他宗の妙法觀と日蓮宗の妙法觀

釋尊の本地開顯は吾人の開顯なり事實成佛

壽量品は一切經の眼目

眞の當體蓮華

ねく衆生を沾ほすに至れるなり。

世を妙法と觀ずる教へは日蓮上人に限るにあらず、華嚴、眞言、禪宗をはじめ何れも佛智眼を開き法界を觀ぜよと教へざるものなし。淨土門の教へは娑婆を穢土と厭離して未來の淨土を欣求すれど、而かも其の極致に至れる眞宗にありては有漏の穢身のそのまゝに心は淨土に住み遊ぶと云ふもの既に佛智眼を開きて世を觀ずるに似たらずや。日蓮上人の所謂妙法は是非とも法華經を通したる妙法ならざるべからず、壽量品の開顯を照見したる妙法ならざるべからず。佛教は釋尊の成道によりて世に布かれたる教へなれば釋尊の成佛を通したる教以外に佛道あるべからず。經の上には種々なる佛菩薩を說くと雖も悉く理體の佛陀にして釋尊を信ずる上に於てのみ成立つべく然らざれば紙上の戯論、冥想泡沫の佛陀なり。されば眞實體を具せられし佛陀は釋尊唯一佛と申すべし。釋尊は實に我等と同樣なる凡夫の身を持たれし歷史上の人物にておはしき。其の釋尊が久遠實成の本佛なりてふ開顯はそも〳〵何を語るものなりや。覺りを開ける釋尊が久遠劫來の佛にてまさば我等衆生も佛智を開かば久遠劫來の佛なるを悟るに至らん。此の開顯を外にして眞實成佛の道あるべからず。釋尊の此の開顯を明かにせられしは五千余卷の經文中只法華經壽量品に限れりと云ふ。此れ上人が開目抄に於て一切經の中に此の壽量品ましまさずば天に日月の、國に大王の、山河に珠の、人に魂の無からんが如しと筆を極めて讚せられし以所なり。觀心本尊抄に曰く、地涌千界の大菩薩を召して壽量品の肝心なる妙法蓮華經の五字を以て閻浮の衆生に授與せしめ給ふ云々。法華經の開顯を透したる五字を體してはじめて當體蓮華なりとは上人の力說せらるゝ所なり。天台宗の肝心なる一念三千の法門は法華經方便品の十如是を基礎として智者大師の闡明せられたるもの、日蓮上人亦甚之を重要視せられ、一切の成佛は一念三千の妙理によると說かれたり。しかも上人の說かれし一念三千は天台その儘のものにあらずして壽量品を根底としたるものなることを注意せざるべからず。開目抄に於て「此の一念三千の法門は本門壽量品の文の底に沈めたり」と特に言明せられしもの何ぞや。釋尊の本地開顯に照らされて事實成佛の道開け、一念三千の理相は事相の上に現じ來るを云はれしにはあらざるか。彼は理なり此は事なりと屢々述べられしもの、天台は觀念の上の理を談じ、此れは事實成佛の道を說くとの義なり。日蓮宗は天台の理を基礎とし、眞言の事をうつし、淨土門の易行によりて建設したる形式あるは誰人も認めざるを得ず。されどこは顯はれたる形の上より眺めたる見のみ、深くその內容に立ち至りて觀ずる時は上人が法華經に對する絕對の信仰より驀直に進み來れる宗門にして、彼を取り是を合はせて折衷的宗教を開きたるにあらざるは火を睹るよりも明かなり。

理の一念三千と事の一念三千

文底の一念三千

日蓮宗の形式

五綱の判釋

第一、教、三種の教相

上人の佛教に對する教判は大體に於て天台大師の判釋により更に五綱に分類して一層切實ならしめたり。一に教、二に機、三に時、四に國、五に佛法流布の前後卽ち序なり。

第一の教に於ては五時八教より一心三觀の說明まで殆んど天台その儘なれど三種教相を說くに至りて本宗の特色躍如たり。三種教相とは一に根性の融不融を判じ、二に化導の始終不始終を判じ、三に師弟の遠近、不遠近を判ずるなり。第一に根性融不融とは衆生と教法とが善く融和し居るか否かに依りて其の說法を異にするを云ふ。根性融せざる間は方便の權教により、根性漸やく融するに及んで正直に方便を捨て法華の實教を說くとなり。第二に化導の始終不始終とは法華經以外の經文は未だ始終を完結せず、佛陀出世の本懷猶ほ明かならず。法華經に至り、始めて始終完備して佛陀出世の本懷を知り得べしとなり。第三に師弟の遠近、不遠近とは迹佛と迹門の弟子とは其の關係近くして遠き源を知らず、從つて徹底せる悟りに至らず。本佛釋尊

と本化の弟子との關係を知るに及んで久遠切來の眞理の當體に達着するを得べしとなり。これ壽量品の開顯より出發し如說に修行せられたる上人自覺の宣言にして本宗の生命なり。上人曰く

第三の法門

日蓮が法門は第三の法門なり。世間に粗ほ夢の如く一二をば申せども第三をば申さず候。第三の法門は天台、妙樂、傳敎も粗ほ之を示せども未だ事畢へず、所詮末法の今に讓り與へしなり。云々、

第二、機、熟、脫、三益の機、

第二に機とは衆生の機根に應じて敎へを施すことにて末法に入りては殊に此事重要視せられたり。淨土門は末法は機根下劣にして自力に堪へずとの信條より純他力の念佛往生を唱へたり。上人は之と見解を異にし、末法は佛種絶えて下種結緣の機なれば正直に方便を捨てゝ純佛敎の粹なる法華經によりて佛種を下す機なりと判ず。玆に佛種とは性種を云へるにあらず、乘種の絶えたりとの義なり。一切衆生皆佛性ありと云ふは性種を云へるなり。性種は衆生本具のものなれば絶ゆると云ふことなし。乘種とは性種を開發すべき化緣の因種を指せるなり。性種ありと雖も乘種なければ佛種なきに等し。佛種絶えなば乘種を植ゑざるべからず、此の機を下種益の機と云ふ。種を下せば種々なる肥料を施して熟せしめざるべからず。此間を熟益の機と云ふ。この機にありては方便、權敎悉く應分の利益あり。既に醇熟し了れば最後に脫益の機となる。米種を下せば米を得る如く、佛種は熟して佛とならざるべからざれば脫益の機にありては法華經の醇味に依らざるべからず。舍利弗、目蓮等の佛弟子が法華經に至りて成佛の授記を得たるもの卽ち脫益の機を了せるなり。以上を種、熟、脫三益の機と云ふ。上人は經文に照らして、末法のはじめは正しく下種結緣の機と判釋せられたり。從つて其の化導の手段も非常ならざるべからず。通常佛道に於て敎化の方法四通りあり。四悉檀と云ふ。悉は遍くの義、檀は施すの義なり。其一を世界悉檀と云ふ。智識低級の衆生の心を調和して歡んで敎を聞く樣

性種と乘種

四悉檀、

仕向くるなり。其二を爲人悉檀と云ふ。衆生の機類に應じて其の情を滿足せしむるなり。其三を對治悉檀と云ふ。衆生の心の病に應じて敎へを與へ其の惑を去らしむるなり。其四を第一義悉檀と云ふ。衆生の機根熟せりと思ふとき直ちに第一義を說きて證悟入眞せしむるなり。されど下種結緣の機にありては一切の方便を捨て驀地に生粹の佛種を授くべく勗むるなり、名づけて超悉檀の化導と云ふ。

超悉檀

第三、時、

第三に時とは釋尊無量の說法は時代に從つて廣まるとの義なり。衆生の信念は時代を追うて薄くなり、邪智次第に增し行くゆゑ之を救ふべき敎法も之に應じて深くなるを要す、恰も病重り行くに從ひて藥の良きを用ふるが如し。佛滅後暫くの間は小乘敎盛んにして、それより權大乘に移り次に實大乘廣まるべし。末法に入りては一向に法華經流布の時なりと斷じられたり。本宗に於ては特に時と云ふ事を力說するなり。

第四、國、

第四に國とは國に應じて敎へを撰むとの義なり。此の事何れの宗派にても云はず、實に日蓮宗の特色なり。法華經は日本國のために說かれたりとは上人の堅き信念なりき。此事上人の獨斷にあらず、經文の敎へと、數多先覺の豫言と、國の成立と、國の現狀と、上人の體驗と、過去に於ける經文の豫言的中等より總合して下したる動かすべからざる信念よりなれる斷案なりき。

第五、序、

第五に序とは敎法流布の前後の次第を云ふなり。上人敎へて曰く、

佛法を弘むる習ひ、先づ先に弘まりける法の樣を知るべきなり。例せば病人に藥を與ふるには先に服したる藥の樣を知るべし。藥と藥とが往きあひ爭ひをなし、人を損ずる事のあるなり。先に外道の法の弘まれる國ならば佛法を以て之を破るべし。佛の印度に出でゝ外道を破り、摩騰迦竺法蘭の震旦に來りて道士をせめ、上宮太子の和國に生れて守屋を切りしが如し。佛敎に於ても小乘の弘まれる國をば大乘を以て破るべ

し、無着菩薩の世親の小乘を破りしが如し。權大乘の弘まれる國をば實大乘を以てこれを破るべし。天台智者の南三北七を破りしが如し。然るに日本國は天台、眞言の二教弘まりて今に四百餘歲、比丘、比丘尼、優婆塞優婆夷の四衆皆法華經の機と定まりぬ。

と、以て教へと序との關係を知るべし。

以上の五綱は何れも日蓮宗の特色を發揮し、極めて直截に、極めて徹底的なり。

現實主義に就きて

日蓮上人の教義は現實主義なりとて盛んに今日の歡迎を受くるを見る。上人の教へは誠に娑婆卽寂光の教へにして現實を非常に重んずるなり。されど決して未來を離れたる現實にあらざることを注意せざるべからず。佛教の何れの宗派を問はず、過、現、未の三世を說かざるものはあらず。而して希望を未來に屬し、現在の行動を重んずるなり。日蓮上人が未來の佛果を樂しんで現世の苦痛を甘受すとは遺文の至る所に述懷せられたるを見る。これに關しては後文筆を改めて更に卑見を述べんと欲す。

以上杜撰ながらも上人の教義は印度にあらず、支那にあらず、全く純日本式の佛教にして、而かも日本にあらざれば開宗せらるべからざる宗門なること、並びに其の教義の精神の大要をも略述し得たりと信ず。

第七節　日蓮上人の性格　並びに折伏論

吾人の最初に於ける上人觀と後の上人觀

上人が智惠日輪の如く闇を照らし、意志金剛の如く何物にも屈せられざりしは誰人も認めて異議なき所、唯その折伏主義のあまりに强盛なりしため卒然として之を見れば狷介にして他を容るゝ量乏しきが如く、弘法、法然等の高僧をはじめ、數多の碩德を罵倒して、一代佛教の肝心を知れるもの古今東西唯我れ一人のみと

上行の資格に座したる上人

個人に歸れる上人

上人の面目

超然高く止りし態度甚だ佛者の德に負くが如く思はるゝふしあり。宗門以外にある人の誰も一度は斯かる感じを懷かれし事あるべし。吾等も初めは一層此の感を强くし、法然上人、親鸞上人の如き春風駘蕩從容不迫なる聖者の態度に服し、上人をば何となく毛嫌ひしたりき。背つて高山栲牛の文を愛讀したりし折、偶々上人を極度まで賞揚したるを見、甚だ心よからず、爾來數年栲牛の文と遠ざかりし事すらありき。後に感ずることありて佛教の眞相を知らんと志し、彼れ此れの佛書に親しみ、稍その心を得るに至り法華經の講義など見たる後、ふと思ひ出して上人の傳記を再讀し、併せて上人の遺文を讀みたり。斯くて月日を經る中に生涯を通じたる上人一切の行動は法華經に對する絕對信仰の顯はれなることを悟りぬ。弘法、法然等を破したるは正法を愛する心の强かりし結果にて、その高く止まられしは本門の釋尊を背負はれし本家の大菩薩上石の資格を以て臨まれし時なり。此の場合には爾前迹門の釋尊も物の數ならず、況んやそれ以下等覺の菩薩をや、まして權門の者共をやと喝破して意氣軒昂殆んど宇宙を呑むの慨あり。しかも一度個人の日蓮に立ち返りては、持戒破戒にも缺けて無戒の僧、有智、無智にもはづれたる牛羊の如くなる者なり、と謙遜し、信仰の人日蓮としての心情を告白せられては

日蓮今生には旃陀羅が家より出たり。心こそ少し法華經を信じたる樣なれども、身は人身に似て畜身なり。魚鳥を混丸して赤白二諦とせり。其の中に識心をやどす。濁れる水に月の映れるが如し、糞囊に黃金を包めるなるべし。心は法華經を信ずる故に梵天帝釋をも猶恐ろしと思はず。身は畜生の身なり。色心不相應の故に愚者の侮どる道理なり。

と歎ぜられたり。何等の權謀によらず、術數を用ひず、堂々と所信を斷行せられし上人の面目は此の中に躍

不輕菩薩

如たり。其の折伏の大悲心の發露たりしは最早云ふまでも無きことなり、斯くて上人の眞面目に接したる吾人は從來もてる嫌惡の情頓に消失して上人渴仰の念の油然として興り來るを禁ずる能はざるに至りぬ。

上人の折伏は法華經の不輕品なる不輕菩薩を理想とせられたり。昔し正法滅して增上慢のもの大勢力を得たる折、一人の比丘あり。一切の比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷を皆悉く禮拜讚歎して「く、我深く汝等を敬ふ、敢て輕慢せず、そは汝等必ず菩薩道を行じて佛となるべければなりと。人々厭ひて遠ざかれば故らに往きて禮拜讚歎すること初めの如し。四衆終に恚りをなして曰く、我等は汝の如きものゝ作佛の證明を要せずと、追ひ退くれば復立歸りて初めの如くに禮拜讚歎す。衆人或は杖木瓦石を以て打擲すれば避け走つて猶も高聲に讚歎す、人々名づけて常不輕と云ふ。此の比丘、命終らんとする時虛空に說かるゝ威音王佛の法華經を聞き、忽ち六根清淨となりて更に壽命を增すこと二百萬億那由他歲、廣く人のために法華經を說きたり。

上人の理想

初め此の比丘を輕賤したる增上慢の人々も終に信服隨從して佛果を得るに至れりと云ふ。此の不輕菩薩こそ釋尊の前身なれとは不輕品にて說かれし所、上人が此の不輕菩薩を理想とせられしは遺文の各所に見ゆるなり。一は佛と稱して禮拜し、一は謗法と稱して破折す。氷炭相容れざる如くにして實に其の精神を一にするものなり。法華經を信ずるものは順緣なれば元より以て成佛す、謗法の者と雖も法華經を以て折伏すれば之が緣となりて必ず法華經に歸し、成佛するに至るべしとは上人の堅き信念なり、名づけて逆化と云ふ。上人曰く、佛法を修行せん者は攝折二門を知るべきなり、一切の經論此の二を出でざるなりと。攝受門は他を責むること無く、自ら信ずる所を行つて自然の感化が他に及ぶを理想とし、折伏門は飽くまでも他の誤りを責めて世に歸せしめんとするなり。上人又曰く、無智惡人の國土に充滿する時は攝受を前とす、安樂行品の如し。邪智謗法の者の多き時は折伏を前とす、常不輕品の如し。と、無智にして惡を行ずる者は愚直の者なり、攝受に依りて化するを得べし。邪智ありて正法を謗るものは非を飾るものなり、折伏して正さゞるべからず。

順緣と逆化、攝受門、折伏門、

折伏の本義、折伏者の資格

攝受は易く折伏は難し。攝受は何人の行ずるも誤り無し、折伏は私心僅かに存するも行ずべからず。私心ありての折伏は甚しき罪惡に墮いるべし。偏に己れの意見を徹さんとして他を折伏するが如きは佛道にあらずして修羅道なり。明鏡の如き智解と、金剛の如き信念と、愛子に對する如き慈悲の心と、誤りと悟らば直ちに正しきに從ふてふ大佳量とある人にして初めて折伏を行ふべし。日蓮上人は日本國を讓らん、父母の頸を刎ねん等の誘惑、脅喝に逢ふとも我が大願は動かさずとの大覺悟を有たれ、其の主張する所は絕對究竟の眞理なりてふ大確信を持たれしも猶ほ、智者に我義破られなば直ちにそれに從はんとの意を示されたり。鳥と蟲とは鳴けども涙落ちず、日蓮は泣かねど涙ひまなしとの大悲心を核とし、此の大覺悟と此の大信と、此の大佳量とに滿たされし上人の大折伏にして初めて有難くも尊とくも感ぜらるゝなり。

上人の溫情、思親閣、風と雨、土牢御書

上人は如何なる人にも常に溫情を以て對せられたり。父母を偲ばれては六十歲なほ赤子の情を存して身延山上思親閣の名を殘し、舊師道善を悲しみては報恩抄の撰述となりぬ。法論に負けたるを怨み上人を毒殺せんと計れる邪惡の人に對しても、自ら邪まに降る雨はあらじ、風こそ夜半の窓をうつらめ、とさとされて終に正道に導かれし等、眞に聖者の範ならずや。殊に弟子信者に向つて注がれし愛情の濃やかなりしは千載の下、人を動かすものあり。彼の有名なる土籠御書の如き一代の大難に逢はれ居る自身の苦痛を忘れて法弟の身を偲ばれ、今夜のさむきに付けても牢の中の有樣思ひやられていたはしくこそ候へ。と尋ねられたるのみならず、年少の弟子日朗に對しても法華經の信者と尊とばれて、牢をばし出でさせ給ひ候はゞ疾く〳〵來り給へ、

見奉り見え奉らん、恐々謹言と結ばれたるもの、殆んど弟子として臨まれしものとは見えぬ程なり。されど誤れる行動を執れりと見る時は慈愛の中にも犯すべからざる威を示されたり。彼の三位坊が京に上りて權門の信能を得たるを喜び上人に報告するや、法門可申事の戒しめあり、僧侶が俗界の顯貴に阿ねる態度何事ぞやと詞し、詮ずる所日蓮をいやしみて書けるか、と喝せられしに至りては凜として秋霜尙數ならざる慨あり。寛嚴その宜しきを得て一に法華經に歸納せしむ。上人は實に生きたる法華經にておはしき。信念地を掃つて師道頽廢せる今日、上人を偲ぶ情特に切なるものあり。吾人が纒を厭はず述べ來れるもの衷心の要求にして誠に止むを得ざるなり。

法門可申事戒、

六老僧、

第八節　日蓮上人の門下　並びに其の分派

上人の門には日昭、日朗、日興、日向、日頂、日持の所謂六老僧をはじめとし、數多の高德輩出せり。日昭は寛厚の長者なり、上人一代の知己にして能く上人の遺德をおとさず、百三歲の長壽を示して寂をとれり、日朗は熱情の人、上人に仕へて孝行第一の稱を得たり。其の下に所謂九老僧あり、上人最後の依屬を受けて京師に法門を弘通せる日像上人は其の隨一なり。日興は駿河なる富士山麓に大石寺を開きて興門派の始祖となり、日向は佐渡阿闍梨と號し、博學智辯にして身延山の第二世となれり。日頂は伊豫阿闍梨と稱し富木胤繼の子なり。法論のため上人三週年の忌日に列せず、父富木入道の怒りに觸れ、哭銀杏の哀話を殘して山林に跡を沒し、日持は單身海外布敎の大願をおこし奥羽を巡化し、北海道に渡り、更に進んで西伯利亞渡航の途につきたるも蟹爲深き處、終に其の消息を絶ちたり。上人の沒後敎義の上に意見を異にするものあり、先づ本迹二門の一致を說く一致派と、その勝劣を論ずる勝劣派と分れしが次第に分派を生じて終に八派九派を稱するに至れり。各派の統一を理想とせる上人の流れを汲める者の、已れと派を分てるは不思議の現象なれど、信ずる所を異にしては分るゝも亦止むを得ざらんか。唯固執を以て信仰と思ひ、他を極めずして之を破折せんとし、其の形を眞似て精神を忘るゝものあらば公明正大なる上人の德に累を及ぼすものと云ふべし。上人及び其の敎への眞相を知らんと欲せば上人の遺文に親しむよりよきは無かるべし。吾人は後章更に現代の思潮と上人の敎へとに關して卑見を述ぶべく暫く上人の記事を止めて他の宗界の消息を窺はん。

一致派と勝劣派、

熊野權現の夢告によりて開宗す、

第九節　一遍上人の時宗

日蓮上人の開宗後二十三年にして一遍上人の時宗の開立あり。されどこれ亦他力念佛の一派にして神勅により開宗せりと云ふもの頗る良忍上人の融通念佛に類するものあり。一遍上人は本姓越智氏、伊豫國河野通廣の第二子として四條天皇の延應元年に生れたり。十歲の時母の喪に遭ひ無常を感じて出家を望み、十五歲にして薙髮し名を隨緣と改め、後に智眞と云ふ。初め天台の敎義を學びしも安心を得る能はずして淨土の易行門に歸したり。建治二年の夏熊野權現に詣して次の偈を授かる。

六字名號一遍法、　十界依正一遍體、
萬行離念一念證、　人中上々妙好華、

夢告の偈に因みて名を一遍と號し、自らの悟りを述べて曰く、

十劫正覺衆生界、　一念往生彌陀國、

十一不二證無生、　國界平等坐大會、

斯くて時宗は開宗せられたるなりと云ふ。本宗の他の淨土門と異なる所は其の信不信を論ぜず、淨不淨を問はず、唯々南無阿彌陀佛の六字の名號を唱へて往生決定と云ふにあり。「智惠も捨て、愚痴も捨て、善惡の境界も捨て、貴賤高下の道理も捨て、地獄を恐るゝ心も捨て、極樂を欣ふ心も捨て、一切の心を皆打捨てゝ一心不亂に念佛を申さば山川草木吹く風も、立つ波も念佛ならざる無きに至る」と云ふにあり。卽ち六字の名號によりて十界の依正は一遍體に歸するなり。彌陀の本願に助けられて西方の極樂淨土に往生するにあらず、自力我執の我見を離れ、分別を離れ、所着を離れ、身口意の三業を皆離れて清淨無爲法身なる南無阿彌陀佛の三業を成就するにあり、名づけて離三業の念佛と云ふ。上人曰く生死無常の理を思ひ知りて南無阿彌陀佛と一度正直に歸命せし一念の後は、我も我に非ず、心も阿彌陀佛の御心、振舞も阿彌陀佛の御振舞、言葉も阿彌陀佛の言葉なれば生きたる命も阿彌陀佛の御命なり。と、されば往生と稱するも十萬億土の淨土に生る、意にあらず、離三業の念佛に座する時、直ちに彌陀の光明に攝取せられて其のまゝ極樂往生を遂ぐると云ふなり。されば西方十萬億土を過ぎて、と云ふは實に十萬億の國土を過ぐると云ふに非ず、衆生の妄執の隔てを指すなりと敎へ、今生に於て直ちに蓮城に至るべしとも示されたり。其の旨頗る禪門の悟りに似たる所あり。傳へ云ふ、上人法燈國師に從ひて禪を學ばれし事あり、一日國師に參して

唱ふれば我も佛も無かりけり
南無阿彌陀佛の聲ばかりして

と悟りを述べられしに國師は、未だ薄紙一枚の隔てありと云はれしが上人後に大悟して

離三業の念佛、

法燈國師と一遍上人、

唱ふれば我も佛も無かりけり
南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛

と呈するに及び國師初めて善哉を稱せりと。其の確說なりや否やを知らずと雖も、上人の開かれし時宗の精神は實に此の一詠の中に盡れたりと云ふべし。時宗の名は臨命終時云々の經文の句に據れりと云ふ。蓋し人身は無常にして時々刻々生滅するが故に平生と臨終と敢て異なることなし、されば所謂平常時を臨終時と心得て念佛する意を宗名にとれるなり。

時宗の意義、

上人は爾來天下を遊行して生涯を衆生濟度に盡さんと志し、勸進帳及び念佛札を携へ、南は九州より北は奥羽の隅々まで足跡印せざる無く、數萬の衆生を敎化して正應二年八月攝州兵庫の觀音堂に於て寂を示す、時に年五十一歲。世に遊行上人と云ふ。明治十九年圓照大師の謚號を勅賜せられたり。嘗つて信州巡化の折、北佐久郡伴野に於て踊躍歡喜の念佛をはじめたり、名づけておどり念佛と云ふ。彌陀の念佛を唱ふるとき世はさながらの淨土となり、樂しさ餘りて踊躍すとの意ならんか。上人滅後第二世他阿上人あり、相州藤澤に淸淨光寺を建てゝ本山となし、遊行回國を終へたるものを住職とする規を定めたり。之を藤澤上人、又は遊行上人とも云ふ。上人の時宗開立は我國に於ける宗派開立の最終なり。

遊行上人

おどり念佛、

藤澤上人

第十節　鎌倉時代信者の消息

賴朝の敬虔なる佛道の信者なりし事は既に述べたり。但し何れの宗派に屬したりとも見えず、唯現世にありては觀音はじめ諸佛の冥助を祈り、來世は彌陀の淨土を願ひしが如し。獨り賴朝のみならず、鎌倉初代の

多くの武人は概ね其の髓を一にしたりしが如し。頼家、實朝等は榮西禪師に歸依したるが如き形跡あれども禪宗の旨を悟りたりとも見えず、且つ頼家、實朝等はその身將軍の顯職にありたれば特に史筆にも載せられたれども是等の信仰は當時一般の事にして特に勝れたる信者とも思はれず。實朝の如きは有爲の資を持ちて外戚北條の制肘を受け、悶々の情を或は歌詠によりて慰めんとし、或は宗教的信仰によりて安心の地を見出さんとしたるが如し。宋人陳和卿より育王山の宿世話を聞きて渡唐を思ひ立ちたる等の色彩ある宗教的逸話を遺せるもの故無きにあらざるべし。北條時政の出家入道、義時の藥師堂建立、梶原景時の内室が淨土門に歸依せる、舞妃微妙が榮西に從つて尼となれる、佐々木高綱が親鸞に從つて僧となれる等何れも當時にありては尋常の出來事にして擧け來らば限りも無かるべし。鎌倉の功臣三浦義村が彌陀來迎の粧を拜まんと安貞三年春の彼岸の初日に當り鎌倉三崎の海上に數多の船を浮べ紫雲棚引ける幕を張り、金銀の金物、五色の彩、七寶莊嚴の趣向を凝らし、青龍、金、鳳、孔雀、迦陵頻迦の形をつけたる幡天蓋をさしたて舞樂の聲を頻らせて彌陀の三尊を裝ひたゝしめ沈檀名香の風さながらに極樂淨土を寫し出したるを將軍頼家を初めとし鎌倉中の貴賤老弱悉く集まりて之を拜し隨喜の涙に咽びたりしと云ふ。以て當時の人の單純なる宗教的情操を見るべきにあらずや。

頼家、實朝、

北條時政佐々木高綱、三浦義村の極樂遊び、

鎌倉政治の基礎を作れる北條泰時

は篤き信仰の下に身を修めて人を化し、時頼、時宗等皆その遺風を紹ぎて民政に意を用ひたれば、名分を誤りて逆臣の地位にありながら猶よく民を歸服せしめ天下の良政治家を以て稱せらるゝに至れり。泰時の常に師事して教へを仰ぎしは栂の尾の大德明惠上人なりき。上人は華嚴の學者にして宗派の上に特別なる義を立てたる人にあらざれど、學深く德高くして當時の明星と仰がれし人なり。承久の亂の時、栂尾の山中に京方の衆多く隱し置きたるよし聞えければ秋田城の介義景此山に入りて搜し求め、上人を捕へて六波羅に參りぬ。泰時かねて上人の德を聞き居し事なれば丁寧に仔細を尋ぬるに、出家の身は世間の事に執する事無ければ貴賤につけて人の方人などせん謂はれなし。但し敵を遁るゝ軍兵の辛くして命助かり木の本、岩の間などに隱れ居候はんをば我身の御とがめに預からんを恐れて情なく追ひ出し申されんや。本師釋尊は鳩に代りて我血肉を鷹に餌かひし事すらあり。助けよと乞ふ衆生のあらば袖の中にも袈裟の下にも隱し申さん。此の事政道に障りともならば卽座に愚僧が首を剝ねらるべし。と、從容たる上人の態度に泰時愈々感じ入り、深く疎忽を詫びて栂の尾に送り歸し、それより折ふしに訪ひて道を尋ね教へを聞きたり。後年若干の領地を栂尾に寄進したるに、上人は寺に所領はいらぬ事なり、反りて僧共懈怠の種となり道心に障りを生ずべし。僧は貧しくて人の恭敬に衣食するこそ本意なれ、とて一切之を辭されたり。嘗つては上人をからめ捕りたる秋田城之助も終にその德に化せられて上人の弟子となり大蓮房覺知と稱しけり。其の大蓮房の話しに曰く、泰時朝臣常に人に語らるゝ樣われ不肖蒙昧の身にて政を執り、幸ひ天下を治め得たる事、一筋に明惠上人の御恩なり。其の故は一日法談の末に天下を治むる心得を尋ね參らせしに上人仰せらるゝ樣、良醫は病の根源をさとり之を治す、世の亂るゝ亦その根源あり、之をさとりて治むべきなり。世の亂るゝ根源は已れに執する私欲にあり、此の欲心をだに退ぞけられなば天下自ら治まるべしと。泰時申す樣、仰せ最も肝要と存候へば泰時に於ては心の及ぶ限り此旨堅く守るべけれど、天下悉く無欲ならしむべからずと。上人宣はく、そはいと易かるべし。

明惠上人

泰時明惠上人に歸依す、

世の亂る根原、

明惠上人泰時を戒しまつる

其身直ければ影曲らず、其政正しくば國亂るゝなからん。執政の御身先づ少欲知足の本分を守らば、御身に仕ふるもの、延いて國民の凡てに及ぶべしと。泰時深く肝銘し念々に此の心を失はざらんと勗めて今日に至れるなり云々と。げに泰時は身を持する事儉にして寡欲の譽れ高かりき。父の死後其の遺產の殆んど全部を弟妹に頒ちたりとは誰も知る逸話なり。又嘗つて泰時の上人を訪ひたる折、古賢曰く、人多き時は天に勝ち天定まれば人に勝つと、他國は知らず我朝は神代の昔より一天四海悉く王臣王土に非るなし、縱令一旦の御誤りおはしたりとするも、臣として王命に負き君を遠島に移しまつりて朝政を私せらるゝは冥罰も恐ろしき心地せらる、おほろけの德をもて此の罪を償はんは難かるべし。是等の道理知らぬ御身にても無かるべきを、さりとては痛はしく存ずると、しみ〴〵諭さるゝ上人の言葉に泰時落涙數行に及びしとかや。大政奉還して罪を謝するまでには至らざりしも其身をせめて仁政に心を委ねたるもの、懺悔滅罪の念の中心となり居たりけんは想像に難からざるなり。泰時を化したる明惠上人の風丰は亦我等の偲ばんと欲する所なり。

明　惠　上　人

名は高辨と云ふ。父は平重國、承安三年紀州に生る。八歲にして父母を喪ひ高野山に上りて文覺上人につき佛學を修め爾來諸方に遊びて顯密の敎義を極めたるも寺僧の徒らに形にとらはるゝを厭ひ

山寺は法師くさくて居たからず
心淸くばくそふくにても

と詠じて紀州湯淺の里に一庵を構へ風物を愛し坐禪の行法一日も怠るなく道譽次第に高くなりぬ。文覺上人の病むと聞きて高雄山に歸りしに文覺深く上人を愛し强ひて止めんとす、上人之に從ひそれより長く高雄の

樽の尾の庵、上人の德行

一峰なる栂尾の庵に住したりき。上人は華嚴の學の蘊奧を極め其の復興にも力を用ひたりと雖も、更に尊とかりしは德行の勝れたるにてありき。田夫は、野人云ふまでもなし、蟻蟻の小に至るまで皆是れ佛性を備へたれば賤しみ思ふべからずとて犬の臥したる傍を過ぎるにも、さながら人に對する如く會釋を行ひ、物荷なふ樵、笠の類まで之は人の肩に置くもの、これは首に戴くものなればとて越えて行くことなかりしと云ふ。

上人の見識

しかも敎への權威に關しては一歩も假すことなかりき。嘗つて建禮門院上人より戒を受けんとて召されし時、御簾の內より御手ばかりを出されて合掌し、上人の座は一段低きに設けたれば、高辨は湯淺權之守が子にて下もなき下萬の身なれど釋門に歸して戒を授けんは師の分なり。師を下位に置くは法をなみするなり。法よりも高貴の人に恐れをなす僧侶を召されて御受戒あるべしと、怫然衣を拂つて立たれしかば女院驚かせ給ひ、急ぎ座を改めて種々懺悔の後、嚴肅なる戒を受けられ生涯上人に歸依せられしとかや。上人常に曰く、人はあるべきやうにと云ふ七文字を持つべきなり。僧は僧のあるべきやうに、俗は俗のあるべきやうに、乃至帝王は帝王のあるべきやうに、臣下は臣下のあるべきやうに勗めざるため惡事おこり來るなり。又曰く、人は常に淨玻瑠の鏡に日夜の振舞の映ることを思ふべし。こは隱れたる所なれば、こは心中竊かに思へば人知らじと思ふべからず。曇り隱るゝなく彼の鏡に映ること耻ぢがましきことなり。亡者の爲に懇ろなる作善をなせども名聞利養のある所に心移りて不信の施しをすれば功德にならずと。又曰く、光る物貴くば螢、玉蟲尊とかるべく、飛ぶもの貴くば鵄烏亦貴とかるべし。不食不衣貴くば蛇の冬穴に籠り、尾長蟲のはだかにて腹這ふも貴とかるべし。學生貴とくば頌詩を能く作り。文を多く諳誦したる白樂天。小野篁などをぞ貴むべき。されども詩賦の藝を以て閻老の棒を免るべからず。されば能僧も徒事なり、更に貴むに足らず、只佛の出世

上人の敎へのくさ〴〵

文殊の上人觀

の本意を知らんことを勵むべし。文盲無智の姿なりとも是をぞ梵天帝釋も拜し給ふべき、云々と。其の他の嘉言德行數ふべからず。文覺嘗つて云へらく、舍利弗、目蓮等は證果の聖者なれば三昧解脫はさる事ながら心の佛法に於て潔く、けだかく、優しき事は明惠房の心ばへに過ぎたりや否や知るべからずと。泰時の歸依渴仰したるも故あるかな。

泰時佛道に歸依したりと雖も宗派に關係は無かりし樣なり。鎌倉時代に於て眞實禪宗の旨を會得したりと思はるゝは泰時の孫

北條時賴

を以て嚆矢となすべし。時賴が道隆を迎へて建長寺の開祖となしたるは既に述べたり。當時聖一國師の弟子

悟空との問答

悟空鎌倉に來り時賴に法問の矢を向けて曰く

如何か建長の禪を會したる、

時賴言下に答ふらく

當所を離れずして常に湛然たり、

悟空直ちに二の矢をつぐ

何ぞ當所を離れざる

時賴この時應答頗る躊躇したりと云ふもの未だ悟道に達せざりしを示すものなり。後兀奄の來るに學んで全く三昧に入れりと傳へらる。

時賴はじめて兀奄を見るや、嘗つて夢みし高僧の佛そのまゝなるを悅んで之を告ぐ、兀奄一喝して曰く。夢

兀庵の一喝

を說くなかれ、我老ひたりと雖も猶ほ拳頭の硬きものありと。時賴深く心服して之に師事し、間も無く悟道の域に達したるものゝ如し。一日欣然兀奄に參して云ふ樣、弟子近日座禪して非斷、非常底を見得す、と。蓋し一切の萬有は斷滅するものにあらず、恒存するものにあらず、有無の境を超越したるを悟れりとの義ならん。兀奄曰く、參禪は只見性を圖る、若し見性を得ば方に千了百當を得ん、と。卽ち見性成佛の義にして見性了れば一切了るとなり。時賴進んで其の垂示を求む。兀奄曰く、天下に二道なし、聖人に兩心無し、故に若し聖人の心を識得せばこれ卽ち自己本源の性なりと。時賴曰く、弟子道崇無心と。(道崇は時賴の法名なり、時賴三十歲の時最明寺にて落飾し、覺了房道崇と呼びなせり。)兀奄直ちに、若し眞箇に無心ならば竪三際を窮め橫十方に遍ねからんと、玆に佛前を指して有名なる蠟燭の譬話あり。

見性成佛の義

蠟燭の譬話

譬へば蠟燭の未だ澆成せざる以前の如く、卽ち是れ本地の風光、本來の面目なり。澆成して熱を點ずるに至り輝々たる雅觀あり、冥闇を照徹し、人々瞻望す。末後燭盡き光極まり、舊に依つて前消息の如し。佛の世に出でて人を度すること亦復是の如し。未出以前は淨法界身本出沒無し。大悲願力を以て示現し、世に出て道を成じ上中下の根機に隨うて三乘十二分敎を演說し、花を拈して衆に示し聖凡人天の大衆をして明心見性せしめ末後無餘涅槃に入る。亦一條の蠟燭の如く二無く別無し。萬古流通し直に今日に至る。若し此の性を見得せば直下便ち見せん。

時賴乃ち森羅萬象山河大地も自己と二なく別なしと悟りの意を示すや、兀奄更に語を續け

青々たる翠竹、盡く是れ眞如、鬱々たる黃花、般若に非る無し

と讚す。時賴此の時全身汗流れて

時頼の大悟

弟子二十一年、旦暮に望み、今一時に已に滿足すと、感涙數行九拜して起つ。斯くて時頼は全く印可の法弟となりしなり。既に無我の里に遊んで國政を攝理す、紙燭の下に味噌をなめて國事を談じたりてふ逸話も、一衣一鉢飄然として民の疾苦を訪ひたりてふ美談も、善美を盡したる鎌倉の法會を水中の牛糞なりと誹りたる青戸藤綱を採用して政治の要衝に當らしめたりてふ佳量ある話も、全く此の中より流露し出でたるものなるを知るべきなり。時頼病んで死する時年僅かに三十七歳、袈裟を着し繩床に上りて座したるまゝ更に動ずる色もなく從容次の頌を口ずさんで臨終せり。

最後の遺偈

業鏡高懸、三十七年、一槌打碎、大道坦然。

こは支那宋朝阿育王山の笑翁禪師の遺偈にして、七十二年とありしを三十七年と改めたるなり。時頼の母松下禪尼亦篤信の人なり、障子の目張りに時頼を諭し千載の訓話を遺したるは人の知る所なり。

一喝して東亞の英雄忽必烈の膽を寒からしめ、十萬の匈奴を邊海に竭して國家を富嶽の安きに置きたる日本男子の標本

北條時宗

時宗幼時柔弱處女の如し

と云へば筋骨鐵の如く、軀幹岩の如き偉丈夫を聯想すれどつら〳〵其の眞相を尋ぬれば全く其の反對に出づるものの如し。時宗の自著にかゝる「途の草々」に述懐して曰く、「齢漸やく長ずるに從ひ心益々精、才愈々巧なるも意氣柔弱恰も處女の如し、云々」と。是れより聯想せらるゝ時宗は體力弱く才氣煥發して意志薄弱なりし眉目清秀の貴公子にあらずや。父時頼は三十七歳にして仆れ、時宗亦三十四歳にして世を去る。如何なる病氣なりしかを審にせざれども其の體質の强からざりしは想像に値す。かゝる時宗をして鎌倉武士の代表的偉人たらしめしは全く宗教的修養の結果に外ならざりしなり。時宗祖元禪師に參するや問うて生の憂苦は怯懦を以て最となす、如何にして之を脱せん」、禪師答へて曰く「當に怯懦の來處を閉づべし」、時宗曰く「怯懦は何れより來る」、禪師曰く「正に時宗より來る」、時宗曰く「我は怯懦を忌むこと甚し、曷んぞ時宗より來ると云ふや」、禪師曰く「試みに明日より時宗を棄却し來れ、膽の大なる坤の如くならん」、時宗曰く「如何にして時宗を棄却せんか」、禪師曰く「一切の念所を斷て」、時宗曰く「その方法如何」、禪師曰く「只管打坐(ひたすらざ)(靜座)して身心の靜寂を期せよ」、時宗曰く「俗家事務を免れず、時日乏しきを如何せん」、禪師曰く「行住座臥、一切の事務これ最良の修善道場なり、これ只管打座の學場なり」、と更に次の五條を擧げて敎へたり。

祖元禪師との問答

祖元の訓戒五ヶ條

一、外界の事物に對して全然無頓着なること金剛座上に於ける釋迦の如く、獅子王の步行する如くあるべし。常に精神を磐石の如く持ち、世界は只我の外に偉きもの(えら)の無しと思ふべし。しかも精神坦然として恭敬を忘るべからず。

二、精神を常に澄水の如く保つべし。精神動搖して外界の事物に頓着すれば必らず其の他を忘却すべし。突然の怖畏は此間より生ず、一方に注意すること深ければ一方の油斷も亦深くなる。努めて平如として精神を臍下丹田に置く可し。

三、才略智謀に恃む所あるべからず、恐懼病は才略智謀の設計を現出する原動力なればなり。その機に當り變に應じて此の心を失はずんば必らず靈妙なる當位卽妙の作略智計を生ずべし。宜しく平時と非常時とその心を一にすべし。

四、勇猛の士氣は能く白刃を踏むべし。柔弱の肢體は窓隙の風をも忍ぶ能はず、宜しく常に勇猛の士氣を

保持すべし。

五、見る所狹少なる時は其の眼光見識狹少にして膽量亦自ら狹少なり。須く常に注意して其の心量を擴大すべし。

時宗は少時道隆にも參したり。兀奄にも參したり。大休にも參したり。されど最後の大覺悟は祖元禪師によりて成就したるなり。斯くて慘澹たる苦心錬業の結果は膽、甕の如き相模太郎となりて顯はれたり。蒙古來の聲に四海鼎の如く沸騰し、汗馬東西に奔りて國家の危急を訴ふるとき其の全責任を双肩に擔へる時宗の態度如何なりけん。祖元の語錄に其の有樣を記して曰く、

（修養の結果鎌倉男子の標本となる）

弘安四年虜兵百萬博多に在り、略んど意に經せず、但だ毎日老僧を請じて諸僧と下語し、法喜禪悅を以て自ら樂しむ。後果して天は響應して家國貼然たり。奇なるかな此の力量ある、此亦佛法中再來の人なり。

（佛法中再來の人）

大事を控へし時宗の虛心坦々として一絲の煩ひなかりしを見るべし。而して最後の大勝を博し、國民歡呼に醉へる時、時宗は如何したりや。祖元又その狀を記して曰く、

參禪悟道二十年、乾坤を握定し喜慍を有して色に見はさず、一風に螢煙を掃蕩して、略んど矜誇の狀を有せず。

鎌倉男子の讃辭は決して溢美にあらざるを知るべし。泰時の恭儉、時賴の佳懷、時宗の決斷、ともに百世の範とするに足り、而してこれ皆佛道修錬の結果なりき。

時宗の子貞時亦一寧一山禪師に參して禪要を得たり。一山は支那元の僧にして元朝の使命を帶びて來りしなりと云ふ。兩國の誼全く絶えて互の警戒嚴重なる敵國に孤杖翩々身を挺して渡來せるもの其の尋常人ならざるを知るべし。貞時も初めは捉へて伊豆の修善寺に拘置したりしも、禪師の心事公明にして學德高きに服し改めて鎌倉に迎へ道を尋ぬ。禪師亦その知遇に感じ永く日本に留りて禪風の舉揚に勗めたり。

（北條貞時一寧一山禪師）

第十一節　鎌倉の末期

鎌倉幕府創立以後は全く武人の天下なり。從つて其の中心たりし北條氏の歸依せる禪宗が恰も鎌倉佛教の代表たるが如き觀を呈したり。されど禪宗は決して平民的宗教にあらざるなり。心膽の練磨として武人の修養には適したり、隨所に主となる悟道ぶりは一種の好嗜心を以て迎へられたり。しかも眞實悟道の域に達したりしもの武人の間にも寥々たりしが如し、まして一般の人民に普及等は望むべくもあらざりき。事實に於ける一般の宗教的生命は矢張り淨土門と日蓮宗となりき。是等の易行門はさながら水の土壤を濕ほすが如く次第〳〵に弘通せられ足利時代より戰國の時代にかけて大に其の特色を發揮したり。

（鎌倉佛教の廢弛）

永仁二年に執權貞時が諸寺の禁制條目を制定して嚴行したるは偶々鎌倉佛教の漸やく廢弛し來れるを示すなりき。京都に在りては龜山上皇篤く禪門に歸依せられ法燈國師を招ぎて皇居を改め禪林寺となし、後南禪寺を建立して無關禪師普門を開基とし、玆に始めて純粹なる禪寺を見るに至り、一山が勅召に應じて南禪寺の住寺となるに及び禪宗の中心が漸やく鎌倉を去らんとする兆を示し建武中興以後は天下の政權と共に禪宗の中心全く京都に遷り了りぬ。次に鎌倉幕府滅亡の際に顯はれたる宗教的發露の面影を敍して本章の結尾となさん。

（禪宗の中心京都に遷る）

＊　＊　＊

新田義貞一度義兵を擧げて鎌倉の空墟を衝くや、百五十年の幕府の偉業は忽然として東勝寺一片の煙りと化したり。高時の暗愚は將士を離散せしめたれど、然かも其の最後の哀史は流石に鎌倉武士の面影を偲ばしむるものありき。

長崎次郎

長崎次郎高重は上の御存命の間に今一度快く敵の中へ駈け入り、思ふ程の合戰して冥途の御供申さん時の物語りに仕り候はんとて又東勝寺を打出づ。先づ崇壽寺の長老南山和尚に參じ問うて曰く、

如何か是れ勇士恁麼の事

と、和尚答へて曰く

吹毛急用不如進

高重乃ち門前より馬引寄せ打乘つて百五十騎を一團となし新田が大兵の直中に割つて入り、敵を追ひ退くる事十七ヶ度、寮毛の如き矢を折り重ねて入道のもとに馳せ戻り早々御自害候へ、高重先を仕りて手本に見せ參らせ候はんとて胴計り殘りたる鎧脱いで抛け捨て、御前にありける盃を以て舍弟の新左衞門に酌をとらせ三度傾けて攝津入道道準の前に置き、是を肴にし給へとて左の小脇に刀を突き立てゝ右の脇腹まで切目長く搔破つて中なる腸たぐり出し道準が前にぞ伏しにける。

鹽飽入道

鹽飽入道聖遠は嫡子忠賴の自害を暫し止め、先づ吾を先立てて順次の孝を專らにし其の後にせよと中門に曲錄を飾らせ其の上に結跏趺坐し、硯とり寄せ辭世の頌を書く

提持吹毛、截斷虛空、大火聚裏、一道清風

又手して頸を伸べそれ打てよと命ず、忠賴刀抜きもちて首打落し、返す刀に已が腹を突き貫きうつ伏しになりて仆れける。

入道信忍

前相模入道信忍、子息仲時の打死と聞きて

待てしばし死出の山邊の旅の道
同じく越えて浮世かたらん。

と口吟みやがて自害して果てにけり。

鹽田道祐

鹽田入道道祐は子息俊時の屍を前にし、主と共に自害せんとて並居し郎黨二百餘人に向ひ、我年來誦み來りし持經の要文讀み了るまで防矢せよと命じ法華經五の卷提婆品を了れる折、郎黨何れも打死との知らせにさらばとて經をば左の手に握り右の手に刀を抜きて腹十文字に搔き切り伏しにけり。

長崎父子

長崎父子左右へ別れて馳せ向はんとしけるが、子息勘解由左衞門是を限りと思ひければ名殘り惜しけに立止つて、遙かに父の方を見遣り兩眼に泪を浮べて行きも過ぎざりけるを父屹度之を見て、何か名殘りの惜しかるべき、獨り死して獨り生き殘らんにこそ再會其の期も久しからんずれ、我も人も今日の中に打死して明日は又冥途にて寄り合はんずるものが、一夜の程の別れ、何かさまでに悲しかるべきと高聲に申しければ、爲基泪を推し拭ひ、さ候はゞ疾くして冥途の旅を御急ぎ候へ、死出の山路にて待ち參らせ候はんと云ひ捨てゝ大勢の中へ打つて入る。

第八章　建武中興の前後

第一節　京都の禪宗

皇室の禪門歸依

後嵯峨上皇が龜山天皇の御子孫に寶祚御繼承の御遺詔ありしは、龜山天皇の英資をたのまれ鎌倉幕府を計らせ給はんとの叡慮に出でられしとは後世史家の專ら稱する所、建武の中興は茲に胚胎せりと云ふべし。大志の存し給ふ所、精神の鍛錬に心がけさせ給ふは自然の數なり。後嵯峨上皇が聖一國師によりて禪要を學ばせ給へること既に述べたり。上皇の皇子に佛國々師あり、下野那須の雲巖寺に引き込んで座禪修養實に二十余年、祖元禪師の印可を受けて道譽四方に高く、平常從ひ參するもの一千名を超え、當時大應國師の筑前横嶽（崇福寺）と下野那須とを指して天下の二甘露門と稱し、其の何れかに入らざるを以て恥辱とする程なりしと云ふ。

佛國々師

二甘露門

大應國師

佛國々師の門より無窓國師、大燈國師の二大明星を出す。大應國師は駿河の人なり、道隆に參して禪を學び後、宋に遊ぶ。歸來筑前にありて法を弘めしが伏見上皇の詔によりて京師に入れり。龜山上皇の御歸依篤かりし法燈國師は信州神林の人なり、十九にして出家し高野山に登りて密部を學び、行勇、道元等の高僧につきて禪を學び、後入宋して修學六ヶ年、歸來紀州由良の勝地を愛して茲に住す。龜山、後宇多等の上皇に請ぜられて法を說きしは八十の老齡に達したる折なりしと云ふ。國師は又日本普化宗の將來者として稱せらる。

法燈國師

普化宗

普化宗は唐の普化禪師を祖とす。禪家の支流にして明暗兩頭を斷じて明暗不到の處に徹底し、一枝の竹管を以て大法輪を轉ずるを得べしとなすを本則とするなり。法燈國師より六傳して僧虛無（楠正成の孫と云ふ）に至り天蓋、掛絡、副子等の制服を定め尺八を吹きて天下を放浪せり。虛無僧の稱ここに初まると云ふ。或は行脚の用として薦席を携ふるが故に薦僧と呼べるにて文明年中僧朗菴が圓音寺を宇治川の邊に建て風穴道者と稱して尺八を奏しつゝ普化宗の宣傳をなしたるを以て我國の開祖となすとも云ふ。德川時代に入りて浪人武士の隱家、武者修行の宗門となし武士以外の入門を禁じ虛無僧改めを諸國に派して宗徒の品行を監督せしめ之を番僧と呼べり。佛國、大應兩國師の門より出で京都紫野大德寺の開山として名高き

大燈國師

大燈國師は諱を妙超と呼び、播磨の人、赤松則村の甥に當れりと云ふ。初め書寫山に入りて天臺の僧となりしが後、佛國國師に從ひて禪門の人となる。大應國師勅命によりて京都に上れりと聞くや直ちに走りて其の門を叩く。大應示すに關の一字を以てす、蓋し雲門の關字と稱して禪家の公案中有名なるものなり。大燈國師久しく公案の旨意を考ふるも悟る能はず、後年偶々机上の鑰を見て揣らずも忽然大悟の域に達し、乃ち馳せて大應のもとに參し、卽今與和尙同趣と告げ、悟る處を述るや大應悅んで之に印可を與へ且つ誡しめて曰く、汝誠に徹したり、我宗汝によりて大いに興らん、されど更に二十年の修養を積んで然る後に立てと。斯くて大應は世を去りぬ。妙超よく師の誡を守り風餐露宿の苦行二十年の後、洛北紫野の地に大伽藍を營造し龍寶山大德寺と號し、勅命を奉じて朝野の縉紳を茲に迎へ開堂式を行へり、京都五山の隨一と稱せらる。花園上皇よりは大燈國師の稱號を、後醍醐天皇よりは正燈國師の稱號を賜はれり、生前國師號を賜はりしは之を初めとすと云ふ。

雲門の關字

大德寺

生前國師號の初め

關山和尚を推擧す

大燈國師の將に寂をとらんとするや花園上皇勅使を遣はして和尚百年の後、朕誰に從ひて法を問ふべきかと尋ねさせ給ひしに國師は「關山と云ふものあり、老僧の骨髓を得たるもの、されど尚ほ修行中にして住所定らず、願はくは宣徴して之に詢はせ給へ」と答へまつる。上皇乃ち使を四方に派して之を求む。偶々美濃國伊深山の麓に一奇僧あり、晝は出でて細民の奴僕となり農事を助け、夜は草庵に歸りて坐禪工夫に余念無し。使者之を糺して關山なるを知り上皇に以聞す。上皇甚だ悅ばせ給ひ慇懃に勅して之を招がせ給ふ。時に關山六十一歳の時なりき。

伊深山麓の奇僧

關山

は信州高梨美濃守高家の次子なり。廿一歳の時鎌倉に入りて僧となり、大燈國師の盛名を聞き大德寺に至りて卒然問ふらく

如何是宗門向上事

大燈言下に唯、關と答ふ。關山無言にして匆々辭し去る。大燈之を見て

作家禪客天然有在

と奬稱す。人々その何の故たるを知る能はず。既にして關山改めて大德寺に來り、掛搭を乞ふ。大燈乃ち紹介者の有無を糺す、關山曰く、善智識は金剛の正眼を具す、學人來つて僅かに門を跨ぐあれば其の心肝を徹見すべし、什麼の紹介をか要せんと、大燈直ちに之を許す。しばらくにして關字の義に徹底し所悟を述るや大燈悅んで汝は雲門の再來なりと賞し關山の號を授けたり。爾來久しく人事を謝して伊深山に入り、修錬を積み居たりしを師の推薦によりて再び世に出で九重の雲深く召されて法を說き、勅により妙心寺の開山第一

關字の義に徹底す

悟後の修養

祖となる。

妙心寺

妙心寺は後世京都第一の禪刹として其の規模の壯大を稱せらるれど關山の當時にありては更に何等の裝りもなく、建てたる儘に修理をも加へず、破るれば風雨の漏るに任せたる如し。帝王の師と仰がれても樹下石上に晏如たりし伊深山下の貧僧の昔と異ならざりき。嘗つて生家なる高梨氏の來りて寺の破損を修せんと云ふや。俗士又他事を念する勿れと一喝して止みたりと云ふ。天龍寺の開山夢窓國師、足利尊氏の歸依を得て聲名富貴ともに當代桑門の冠たりき。一日拜領の鳳輦に駕して妙心寺の門を過ぎ、下乘して關山を訪ふ。關山折りしも破笠弊衣、他の雲衲と共に庭の掃除に從ひ居りしが威容堂々として入り來れる夢窓を迎へて面貌を改めず、直ちに我室に誘ひて手製の番茶に燒餅二三を硯の蓋に載せてすゝめ、聊か愧づる色も無く歡談時を移したりき。夢窓歸途歎じて曰く、吾が宗門は竟に關山に奪はれたりと。果して足利氏の勢力ありし頃は天龍寺、相國寺の繁昌に引き換へて妙心寺の衰微を見たれども間も無く復活して元龜天正以後日本の臨濟宗は關山の法流を以て滿たさるゝに至り、德川三百年を經て尙ほ滅せず明治に至りて無相大師の諡號さへ賜はり法燈の盛んなるに反し、夢窓系の法流は僅々數代にして消滅し、其の豫言をして讖をなさしめたり。

夢窓國師の歎賞

法流の繁昌

建武中興の前後に於ける中央佛敎界の權威を求めなば蓋し

夢窓國師

なるべし。國師は伊勢の人なり。姓は源氏、宇多天皇九世の孫なりと云ふ。四歳にして母を失ひ、父に作はれて甲州に移る。九歳の時同國鹽山に住める空阿法師に從つて佛學を學ぶ。爾來亡母の忌日に當れば法華經を讀誦して至心に母の冥福を祈り又自ら死尸九相の圖を畫きて壁上に掛け其の身の深く執着すべからざる事を

夢中宋に遊學す

轉倒の一刹那に大悟す

七朝の天皇より國師號を賜はる

眼中敵も無く味方も無し

觀察し、時あれば靜坐して觀心の修養を計れり。十八歲の時祝髮して南都の戒壇に登る。顯密の教學に心を潛むるも未だ生死の大關を透過する能はず、一夜至心を込めて佛陀に其の指導を仰ぐ。夢中に宋に遊學し疎山と石頭との兩寺に參詣するに一人の老翁ありて達磨の肖像を授け呉れたりと見て夢さめたり。思へらく我れ禪宗に緣ありと、乃ち名を疎石と改め夢窓を以て號となす。爾來建仁寺、建長寺、圓覺寺等京鎌倉の諸山に遊び、後佛國々師の當時鎌倉萬壽寺を董せるに參す。しかも尙ほ大悟に至らず、卽ち去りて常州臼庭の地に隱れ誓つて曰く、若し安心を得る無くんば高峰（佛國々師を云ふ）に覲せずと、晝夜を分たず兀坐精勵す。一度座を起ちて暫し壁に憑らんとするに誤りて壁なき方面に向ひ、轉倒する一刹那廓然として大悟せり。偈を誦して曰く、

多年掘レ地覓二青天一、　添得重々礙膺物、
一夜暗中颺二碎甎一、　等閑擊碎虛空骨、

早々趨りて佛國の室に參し此の偈を呈す。佛國悅んで印可を與へたり、時に夢窓三十二歲の時なりき。それより甲州に歸りて親を省し、靜閑の地にありて悟後の修養を計らんとしたるも、道譽を慕ひて尋ね來る禪客引きも切らざりしかば更に深山にあとを隱したるも其の名は愈高く聞え北條高時の生母の招ぎに辭する能はずして鎌倉に出で、後に後醍醐天皇の勅命によりて京都に上り、親しく雲上に法を說きて國師號を賜はり、更に足利尊氏の乞に應じて道を敎へたり。斯くて前後七朝の天皇より國師號を賜はり、五千餘人の法弟を有して一代の道譽を擅にし七十七歲にして寂を執りぬ。國師の眼中、敵も無く、味方も無く、至心に乞ふ者には心を空しくして接したる如し。之を普通の人とせばあまりに節操乏しきが如く權勢に附き時の花を簪にしたるかの感じあり。されど其の尊氏に與へたりてふ

雲よりも高き處に出でて見よ
何とて月に隔てやはある

の一詠が國師の遊べる境界なるを思へば普通の道義を以て律すべき限りにはあらざらんか。

第二節　信者の消息

壁山禪師

後醍醐天皇十種の疑問

建武中興の英主におはしゝ後醍醐天皇は盤根錯節に堪へ給ふべき資を大燈以下の各高僧を召されて鍛へさせ給ひき。更に越前總持寺の開山瑩山禪師の道譽高きを聞し召され遙かに勅使を派して十種の疑問を發し給へり。

勅問第一、祖意と敎意と同か別か。

第二、達磨は香至國王の第三子にして四大五蘊具足の身なるを、何によりて一葦の蘆に乘れりや。

第三、禪家に謂はゆる不立文字敎外別傳と、されど一大藏經皆是れ文字なり、禪家の語錄も亦是文字也。もし文字無くんば佛祖の言敎何によりて末世に流布せんや。

第四、人あり曰く、此身は四大假合なり、命終の時、地大は地に歸し、水大は水に歸し、火大は火に歸し風大は風に歸す、然らば則ち何物ありて地獄に墮せんや。

第五、人皆先考先妣のために靈供を備へ茶湯を獻ずと雖も少許だも消する事無し、知らず供を受くるやいなや。

第六、世尊雪嶺に於て六載修行す。明星現ずる時大悟して曰く、我と大地の有情非情と同時に成道すと。
悟人は成道すべし、迷人何によりて成道するか。
第七、金剛經に曰く、一切の諸佛及び諸佛のさとりの法、皆此の經より出づと。金剛經は是れ釋迦佛の所說なり、知らず此の經を先とせんか、諸佛を先とせんか。
第八、經に曰く、大通智勝佛十劫道場に坐して佛法現ぜずと、云々。然るを今時の人一生坐禪修行して如何か佛道を成ぜん。
第九、經に曰く、淸淨の行者涅槃に入らず、破戒の比丘地獄に入らずと其の意如何。
第十、朕趙州無の公案を以て提撕すること年尙し、未だ透徹せざるを恨となす、如何か工夫用心せんや。

常濟大師

瑩山之に對して丁寧懇切なる解說を加へて奏上す、天皇深く感歎ましまし、再び勅使を下して紫衣並びに勅額を賜はり總持寺を官寺の列に加へ更に綸旨を賜はりて日本曹洞宗の本山となすに至りぬ。明治の御世に入り瑩山に常濟大師の諡號を勅賜せられたり。

藤原後基

天皇を補佐しまつれる公卿の多くは佛道、就中禪門に入りてその修養を計れるものゝ如し。斯くて元弘の變に當り鎌倉にて斬られし後基は法華經六百遍の讀誦を果して

古來一句、無死無生、萬里雲盡、長江水淸、

藤原資朝

の詠を遺し、佐渡にて斬られし資朝は

五蘊假成レ形、四大今歸レ空、將首當二白刃一、截斷一陣風

と頌して從容難に殉したり。

松の下露に袖ぬらして至尊と艱難を共にし參らせし

藤原藤房

は王政暫く古に復して朝臣はやくも意滿ち、內奏しきりに行はれて賞罰正しからず、禍亂再び興らんとする機を察して忠諫苦慮到らざるなかりしも時運未だ到らずして用ひられざりしかば千里の馬に最後の諫言を奉り、官祿を捨て恩愛を斷ちて抖擻の身となり都近き岩倉山にしばし忍びしが、知られて後追はれん事を恐れ

住み捨つる山を浮世の人問はゞ
あらしや庭の松に答へん

と障子に記して跡を晦ましぬ。藤房在俗の折より大燈國師に參じて宗弼の法號を貰ひ居しが、後めぐり〳〵て再び京都に來り妙心寺なる關山に師事して其の印可を受け、妙心寺の第二祖となり、明治天皇より圓鑑國師の諡號を追賜せられたり。(此の事史家に異說あり)

圓鑑國師

盡忠報國の結晶として萬世の龜鑑と仰がるゝ

楠正成

は敬神信佛の念わけて著しかりき。其の笠置山に召されて東夷征伐の詔を拜するや、天下の安危を一身に引受け、至誠を凝らして神佛の冥助を仰ぎ。既にして鎌倉幕府滅亡して王政しばらく古に復したれば自筆の法華經を岩淸水八幡の神前に獻へ謝恩の誠を顯はせり。その法華經の奥書に曰く、

自筆の法華經

夫れ法華經は五時の肝心、一乘の腑臟なり。斯に據りて三世の導師此の經を以て出世の本懐となし、八部

冥衆此を以て護國の依憑となす。就中本朝一州、圓機純熟、宗廟社稷、護持感應、僧史の載する所、縡具さに綸紬（織物の名より轉じて書き顯はさるゝ事を云ふ）す。爰に正成恭しく朝憲を仰ぎ逆徒に敵對するの刻、天下靜謐に屬し、心中相協ふ者の若し。毎日當社寶前に於て一品を轉讀す可きの由、立願先づ畢る。依りて一部を新寫し、宿願を果す所、件の如し、敬白、月日、姓名（原漢文）

正行への遺訓

正成又禪要を學びて修養を計りたり。その正行に遺訓せりと稱する一節に曰く

志不信心にして得業すること難し。予若年より一心の觀法に心を傾く、或時南都春日の社へ詣でける時、一人の僧の鴉はむを見て吟句して去るに逢ふ。予れ安間七郎を以て此の僧を呼び返して先の吟句を問ふ。僧吟じて曰く、「道は其れ不明不暗歴々として玄妙なり」、予問ふ、如何なるか是れ道、僧答ふ、天にあらず、地にあらず、物にあらず、佛にあらず、神にあらず、鳥獸にあらず、無情にあらず、人事是道。予問ふ、如何なるか是人事。僧答ふ、善にあらず、惡にあらず、行にあらず、法にあらず、卽心是正に人事。予問ふ、如何なるか是れ卽心。僧答ふ、君が問ふ心は君が卽心、我答ふる心は我が卽心、此心變ぜずば一切の觸目總て皆道なり、此心變じて思となるを凡と名づく。予問ふ、尙密義ありや。僧曰く、公は名は何ぞ。予答ふ、捕多聞正成なり。僧正成と呼ぶ、予應諾す。僧曰く、是れ何ぞ。予時に心中轄然として大悟す。是より此の僧を請じて慈誨を蒙る。此道を授かりて家を興し名を舉ぐること師恩にあらずや。是を以て今此事を汝に附屬す、（中略）汝成長して三寶を敬せざること勿れ、色に耽ること勿れ、君臣の禮を亂すこと勿れ、諸民を勞すること勿れ、軍法を心とせざる事勿れ、（中略）是汝が第一の孝行なるべし。

一書に關山和尙南都に遊學の途次楠正成と遇合して立談す、正成私第に邀請し款待七日仔細に參禪すとあり、

明極禪師に參す

正成の言中にある僧は關山なるべしと云ふ人あり。

其の愈々綸旨を奉じて湊川に向はんとするや、廣嚴寺なる明極和尙に參して曰く

生死交謝の時如何、

師曰く、兩頭俱に截斷すれば一劍天に倚りて寒し、

正成曰く、落處作麼生、

師、威を振つて一喝す、

正成、起立三拜して通身汗流る、

師曰く、爾徹せり。

兜の裏の八文字

斯の如くにして正成は向上の關捩を超出し、渾身皆これ忠義の花と散りたるなり。

正成と共に其の名を稱せらるゝ

新田義貞

は法華經壽量品なる如來祕密神通之力の八字を兜の裏に記して之を戴き刀折れ矢盡きて藤島の地に仆るゝまで奉公の至誠を完うしたり。其の士卒を戒しめたる言に曰く、

外には弓馬合戰を家とし、內には因果の道理を恐るべし。と、此の信念は當時の武人を通じての正義に殉したる者の內心の囁きなりき。

九州は舉げて尊氏の逆を助けたる時、獨り

菊池武時

大智禪師に歸依す

の一族あり。千百日に盡くるの寡兵を以て百萬日に增すの賊軍に抗し、三代悉く王事に殉して忠臣の鑑となれり。而して菊池氏は武時、武重をはじめとし何れも篤き佛道の信者なりき。武時、肥後の鳳儀山なる大智禪師に法を學び薙髮して眞空寂阿と云ふ。後、肥後の玉名郡に一寺を創して禪師を迎ふ。その寄進文の末文に曰く。

若し斯の寄進狀の旨を守り、淸淨信心を以て正法を守護せば則ち密に三寶諸天の護念を蒙り、子々孫々弓箭の家を全うし永く國家の寶祚を守り奉る可し。因りて寂阿自ら身血を出して朱と合し、手印を寄進狀の面に押して以て後代子孫に曉喩する處なり。

櫛田神前の詠歌

此の熱烈なる信仰ありて何物にも恐れざる勇猛心を奮ひ起すを得るなり。元弘三年三月手兵僅かに五十を率るて賊將北條英時を博多に擊たんとして進發するや、櫛田神社の前に至り軍馬足を止めて一歩も進まず、武時憤然社殿に向ひ、介する者は拜せず、まして物祭りする邪神に何すれぞ下馬の怯をなさんやと、弓矢番へて

武夫の矢竹心の一筋に
思ひ切るとは神は知らずや

武重武茂

決心の詠歌と共に洞然社扉を射貫きしに馬は忽ちにして歩み出したりきと云ふ。武時の子武重、武茂何れも大智禪師に從ひて精神生活の糧を得たり。武茂の鳳儀山へ納めたる誓文の一節に曰く

武茂弓矢の家に生れて朝家に事へまつる身たる間天道に應じ、正道の理を以て家名を擧け朝恩に浴し立てん事は三寶の御許しを蒙るべく候。其外私の名聞利欲に我を忘れ恥を顧みず、詔へる當世の武士の心を永く離るべく候。

大智禪師

佛道信者の所世の本願この外に出づべからず。菊池氏累世の尊信を得たる大智禪師亦稀なる高僧なりき。支那に渡りて諸方の智識に參見したれども終に服すべき人に逢はず、歸朝後某僧の彼土に渡らんとするを送れる偈に曰く、

莫下將二日本眞金貴一博二易大唐鑑子一歸上

あまりに支那僧を買ひ被れる當時の僧徒を誡しめ得て痛快なるを覺ゆ。

一度び順逆の道を誤り君臣の分を亂して百世に逆賊の醜名を流したる

足利尊氏

も。はらからなる無道の人にてはあらざりき。唯彼れや名門の出にして聲望高く、しかも武門政治を歡迎せんとする當時一般の歸向を察し、其の家門を輝かさんと勗むるに急にして騎虎の勢他を顧みる能はず、終に叛臣の巨塊となれるなり。彼れ鎌倉によりて臨時幕府の創設と、義貞追討の宣旨とを乞ひ、天皇の震怒に觸れて官軍東下すると聞くや、その反名を受くるを恐れ、薙髮遁世して罪を謝せんとし、道服を纏ひて建長寺に入る。弟直義術數に富む、卽ち綸旨を僞作して尊氏兄弟武威に誇り朝憲を輕んずる間征伐せらるゝ所なり、たとへ隱遁の身になれりとも刑罰を寬うすべからず云々と、以て尊氏に示し左右皆西上して事を圖らんと慫慂す。覇心終に道義の念に勝ちて叛旗を飜すに至れるなり。其の京都の戰ひに敗るゝや、偏に王師に抗する故となし、光嚴院の宣旨を乞ひて兩帝の爭ひとなし、其の下に稍心を安んず、譎は譎なれども裏心反名を厭ひたる處に良心の閃きを見るべきなり。大勢我に利にして覇府を京師に開き野心滿足したりと雖も、良心の呵責を免るゝ能はず、當時の高僧夢窓國師に親炙して禪要を學び、只管精神の慰安を求めたるものゝ如し。天

覇心終に道義の念に勝つ

良心の呵責

天龍寺

地藏菩薩の信仰

龍寺は實に夢窓國師の勸めにより後醍醐天皇の追善を修するため龜山院の故趾に開きたるものなり。光明帝の詔を奉じて夢窓國師開山となり、その資財を支那に募らんとして發送せる船舶を世に天龍寺船と云ふ。此の時數多の物品を滿載し貿易によりて莫大の利得を占めしより爾來遣明船次第に增加し彼此の通商隆盛を來せる因をなせり。尊氏又深く地藏菩薩を尊信し守本尊として平素傍を放さゞりしと云ふ。後年「我れ劍を提げて天下を馬上に定む、殺す所多しと雖も十萬をば越すまじ」と云ひ鑄工に命じ十萬體の地藏を造つて等持院の大殿に安置し之を供養せりと云ふ。其の他、人に對して常に寛容に、慈悲心深くして人に慕はれし等、篤信の人のおもかげを傳ふるもの甚だ多し。奸雄人を欺くと云ふ勿れ、彼は勢利に憧がるゝ天魔の心と、平和を欲する菩薩の心との著しき兩面を有したり。天魔の心が勝を占めて終に彼の生涯を誤らしめたりゝしかも菩薩の心は常に彼を責めて善根功德をも積ませたり。彼れの罪は永久に許されずして千載國賊の名を流す。されど菩薩の心の積ませたる功德は之がために沒すべきにあらず、彼を奸臣として退くる一方には德を具へし大人物と賞揚するものあるは之が爲のみ。斯の如きもの豈尊氏一人のみと云はんや。

第三節　日像上人の京都布教

建武中興の前後に於ける佛教は禪宗獨占の姿なりしこと既に述べ來れるが如し。但しこは史上に著明なる人物を中心としたればなることを注意せざるべからず。勿論禪宗が當時の人氣に應じ破竹の勢を以て公卿武人の間を靡かしたるは事實なるも、他の宗派亦惰性的に或は積極的に多少の活動はありたるなり。就中日像上人の京都布教は此の間に於ける目覺ましきものゝ一なりき。

日蓮上人の遺囑

上人は下總國葛飾の人、父を平賀忠晴と云ふ。文永六年に生れ七歳にして日朗上人の弟子となる。日蓮上人が其の寂にのぞみ、數多の高足をさし措きて當時僅かに十三歳なる經一麿と呼べる上人に帝都弘通の遺囑ありしを見ても其の法器尋常ならざるものありしを知るべし。永仁元年二十五歳の春を迎へて思へらく、明年は正しく聖祖の十三回忌に當る、遺命を奉じて帝都に妙教を布くべき絶好の期なり。而かも此の事尋常の事にあらず、佛天の加護を仰ぎ併せて百折不撓の心膽を鍛へざるべからずと、乃ち比企に入り至誠を籠めて法華經全部を筆寫せり。文字極細にして殆んど人爲にあらざりき。尋いで十月廿六日より一百日を期し、由井が濱に出で毎夜荒浪に全身を涵して久遠偈を誦する百遍、唱題數萬遍、曉に達して止みしと云ふ。嚴冬の極寒、嵐に雪に、一夜を缺かしゝ事なかりき。斯くて滿願の晨には寒水さながら湯の如く暖を覺え、帝都開教成就の自信確然として胸に浮び來れりと云ふ。永仁二年三月身延山に登りて祖塔を拜する七晝夜、それより北陸を經て洛に入り、聖祖開教の紀念日なる四月廿八日、王城の東門に立ちてさし登る旭に向ひ高聲に題目を唱へて帝都開教の式となしぬ。夫れより盛んに折伏の劍をふるひ例の如く各宗の怨憎を買ひ、朝命によりて京を黜けられ、又赦されて再び黜けられ、再び赦されて三度黜けられたり。而かも道譽は一回は一回と加はり來り、天台、眞言等の高僧にして其の說に服し、改宗して寺號を改むるものさへあるに至り、終に至尊を動かし奉り元亨元年十月三度赦されて闕下に召され四海唱導の綸旨並びに洛下に勝地を賜はり妙顯寺を建立し勅願寺とせらるゝに至りぬ。世に三黜三赦の布教と云ふ。上人京都に上りてより玆に至る實に二十八年の星霜を經たり。不撓の精神敬服に餘りありと云ふべし。斯くて日蓮宗は京都に根據を据ゑ次第に西方に布教して足利氏の中世以後には隆々正に各宗を凌駕せんずる勢を示すに至りぬ。

法華經の筆寫

由井が濱の荒修行

寒水湯の如し

帝都開教

三黜三赦の布教

第九章　足利時代

第一節　序說

尊氏、義詮二代の間は吉野朝廷の時代にして大義の上より幕府は公然のものにあらず。後小松天皇の大統繼承以後卽ち義滿の時を以てはじまるものと見るべきなり。而して事實の上に之を見るも義滿に至りはじめて將軍の威令一般に行はれたり。しかも其の統一は殆んど義滿後の二三代に限られ義政の時より應仁の亂に引き續き、群雄割據の戰國時代となり、中央政府全く衰へて世は殆ど亂れたれば、佛敎も政府の保護に待つこと無く隨所に隨意の發達をなし、所謂官臭を脫して純然たる平民佛敎の面目を顯はさんとせり。南都北嶺並びに野山の如きは長き歷史と廣大なる寺領とを有したれば何れも丰然たる大豪族としてその勢强大なりしも宗敎的信念の發露と見るべきもの尠なし。眞實當時を支配せる活宗敎は念佛門と、日蓮宗と、禪宗となるべし。而して禪宗は上來述べたる如く精神の修養として專ら武人の間に珍重せられ、念佛門と法華宗とは一般人民に普及したり。是等信徒の多くは智識の程度低級なれば信仰の熱心は猶介の風を助長し、各宗互に排斥を事とせり。殊に、念佛、法華の二門は犬猿當ならざる間となりて相爭へり。加之同一の宗派にして干戈を採り鬩ぎ合ふものさへありき。眞宗の高田派、本願寺派の如き是なり。彼等の爭ふ所は殆んど敎義の何物にも觸れず、枝葉の問題、感情の問題にして、自家の宗派の黨勢を張るを以て宗門に對する唯一の奉公と心得たる愚夫愚婦の迷信によるもの多かりしは文敎全く衰へし闇黑の時代なれば致し方もなかるべし。されど

平民佛敎

宗門の鬪爭

迷信にもせよ、盲信にもせよ、其の信ずる所に向つて何物をも吝まざりし所謂信仰の力を談るべきもの此の間に尠なからざりしを見るなり。彼の群雄を席卷して向ふ所敵無かりし織田信長も、凝り固まりし門徒の信者には屢々手を燒きたりき。就中日蓮宗は各宗を悉く破折統一せんとの意義を存するものなれば各宗より敵視せられて其の壓迫最も甚しく、而かも祖師の熱烈なる感化と、壓迫に依りて生ずる敵愾心とが一層强烈なる信仰力を助成して悲壯なる現象を示したるもの一二にして止まらず、以下次第を追うて之を略述せん。

第二節　足利將軍と禪

北條氏の禪門に歸依せる如く、足利氏も亦多く禪門に遊びたり。而かも北條氏は堂奧に入りて其の力を國事に盡したる跡十分に認めらるゝものあるに反し、足利氏は殆んど之を一の骨董視し、茶の湯、生花と同樣に所謂禪味を味ひて自家娛樂の用に供したりやの感じあり。一は善政の譽れを殘し、一は苛政の記錄を作れり。等しく禪を學びたりと稱するも心を用ふる如何によりて宵壤の差を生ずるなり。尊氏の天龍寺にならひて義滿亦夢窓の法弟義堂に諮りて相國寺を建つ、義堂並びに其の道友絕海は禪門の文豪として重きを置かる人々なり。義堂は又身を律すること嚴に、所信に對して意を枉げざる人なりき。其の病んで起たざらんとするも猶禪座誦經を絕たざるを見て之を諫むる者あれば答へて曰ふ、人の世にある草頭の露、風前の燈の如し、何の護惜するに足るものあらん、若し辛勤のために死を招かば本望のみと。寂に臨んで從容出世の始末を說く、其の辭僞を乞へば曰く、我れ四十年來人に抑逼せられ枉げて紙墨に上すもの豈に剩語にあらずや、因りて問ふ今幾刻ぞと、侍僧答へて五鼓已に鳴ると云へば乃ち端然危坐して示寂せり。嘗つて義滿が政治の

北條氏の禪と足利氏の禪

義堂

要を質すに答へて萬一天下に變あらば天下を捨つること永平長老(道元)の平氏(北條時頼)に勸めたる如くすべし、以て安樂長久ならんと、暗に大政奉還を勸めたりと云ふ。義滿は斯かる人に歸依して細川頼之の如き明臣の補佐を得たりと云へば天晴れ道念高き德器を成就したりけんと想像せらるゝも事實は全く反對なりき。如何にも南北兩朝の合一を計り諸侯の强傲を撓めて海内統一の功はさること乍ら剃髪法衣の姿にて官爵を貪り榮華をつくし花の御所に憚らずして金閣の別墅を起し、猿樂連歌の遊びに生涯を送りたるもの決して信者の態度にあらず、後年義政が民の疾苦をよそに見て銀閣寺を建て、天下大亂の因を釀して恬然風流三昧に世を送りたるもの、全く義滿を學びたる結果ならずんばあらず。義政は實に義滿を理想とし、天下を意の如くに振舞ひて諸侯を顧使せんと望みたり。而かも事志と違ひて思ひの儘にならざるや

足利義滿

義政

おろかにも尙治まれと思ふかな

斯く亂れたる世をば厭はで

と述懷し、禪門に心をやりて亂世の外に立たんとせり。人生の大事を究めんとする禪門も此の時代に入りては、獨樂主義、洒脫主義なる風流禪と化し去りぬ。而して義政は其の三昧に入れるものなりき。佛道の眞髓は衆生濟度の悲心にあり、人の苦痛をよそにして獨り樂しまんとするが如きは天魔の所爲のみ。天下の禪を學ばんとするもの時賴、時宗の參禪工夫と、義滿、義政の自己滿足とを比較對稱し、依りて分るゝ源を尋ねざるべからず。

風流禪

斯かる時代を諷せんとて洒脫の高僧一休は世に出でたり。

第三節　一休禪師

奇人

奇人と稱せらるゝ人の多くは時代の風潮に激發せられて生ずるもの故、其の言行、時代と背馳するを常とす。卽ち時代の一般が之を外にするものを奇人は內にし、時代の一般が之を內にするものを奇人は外にするなり。例へば時代の一般が外貌を飾り、虛禮を事として內心誠敬の實なき折に生れたる奇人は、外貌を飾らず、禮節にならはず、一見甚だ疎狂なるが如くにして而かも內には誠敬の實を存するが如し。故に奇人を觀察して時代の眞相を知るべき一の材料となすを得可し。一休禪師は一種の奇人なり。勿論その傳へらるゝ逸話の多くは後世の假作にして德を傷つくるもの尠なからざれども滑稽洒脫を表として裏に潛める眞の悟道を世に傳へんと勗めしが如し。卽ち表は殊勝なる悟りぶりして、內心獨樂、骨董三昧主義なりし當時の思潮の裏を行けるものと見るを得べし。

禪師の皮肉

禪師の面目

傳によれば一休は後小松天皇の御落胤なり、母はもと吉野朝廷に仕へしもの、後年後小松帝の寵を受け讒に遭ひて身を引き、民家にありて和尙を生みたるなりと云ふ。高貴の種にして深山がくれの知られぬ身となりては世を敢果なめる事も一入なりけん。旣にして桑門の人となり、堂奧を極めて世を觀ずるに方違ひの道行く人のみ多く、我は顏なる智者學匠の奧底見えて可笑しくも氣の毒になり、持ちて生れし才氣は縱橫に振はれて滑稽洒脫の間に、緣に觸れ機に應じて化導を布かれたるなるべし。木劍を携へて、「之を宝に納むれば刀に似たり、抜き見れば木片のみ」と似非智識を嘲り、元旦に曝れたる髑髏を提げて目出度ものゝ骨頂と諷したるが如き、人の意表に出でゝ而かも眞理を寓したるもの是れ和尙の面目なり。

有漏路より無漏路へ歸る一休み
　雨降らばふれ、風吹かば吹け

と詠みて其名も一休と呼べりと云ふ。

禪師の母

禪師の母は勝れたる賢婦なりき。寺門に入れる一休を誨へたる文なりとて世に傳はるものあり。

我等娑婆の緣つきて無爲の都に赴き候、御身よき出家になり給ひ、佛性の見を磨き、其の眼より我等地獄に墮つるか墮ちざるか、不斷添ふか添はざるかを見給ふ可し。釋迦達磨をも奴となし給ふ程の人に成り給ひ候はゞ俗にても不苦候、佛四十餘年說法し給ひ、終りに一字不說と宣ひ候は、我と見、我と悟るが肝要に候。何事も莫妄想、あなかしこ。

返す〳〵も方便の說のみを守る人は蠶繭と同じ事に候。八萬の諸聖敎をそらに讀みでも佛性の見を磨かゞんば此の文ほどの事も解し難かるべし。

これとても假初ならぬわかれては
　かたみとも見よ水ぐきの跡

果して之が母の文なりしとせば世にも稀なる女丈夫と云ふべし。されど禪師が他日母に書き送りしと云ふ假名法語などに依りて見れば、朝夕佛名を唱へ單へに未來の淨土を欣求したる優しき婦人なりしが如く些か合はぬ心地もせらるゝなり。

禪師が其の悟りに達するまでには人に知られぬ慘憺たる苦心もありしなるべし。悟道の工夫に餘念なく面影さへ衰へしを煩ひにもやと或人の問へば、例の口輕に戀の病よと答へたり。思はずけのけしきに一休とり敢す、

本來の面目坊がたちすがた
　一目見しより戀とこそなれ

湖上の鴉聲

と詠みしとかや。玆にも禪師の面影見ゆるにあらずや。禪師は十二歲にして出家し、十七歲にして關山の法孫宗爲禪師に學び後近江堅田の禪興菴に逸居せる華叟和尙（大燈の法孫）の門に入る。一夜湖上に船を浮べて明月に遊び、折柄鳴ける鴉の聲に豁然大悟したりと傳ふ。水かゞみ、假名法語などに禪道の大要を書き記して母に送りしなど孝子の優しき心は廣く一般の人にも及べるなるべし。

了譽上人の傳通院

西譽上人の增上寺

第四節　淨土門の普及

良忠上人鎌倉にありて淨土門を廣めしは既に述べたり。當時代に入りて了譽上人（聖冏）あり、應永年間武藏の江戸に傳通院を建て、其の弟子西譽上人（聖聰）亦江戸に增上寺を建てゝ武藏地方布敎の根據となしゝもの後年江戸時代に於ける念佛門隆盛の源となる。

眞宗は高田專修寺派と大谷本願寺派との二派に分れたるは既に述べたり。本願寺派は第二代覺如上人の時法燈を輝かしてより爾來久しく振はず、第七代存如上人に至りて不振の極に達したりしが第八代蓮如上人に及びて目覺ましき活躍をなし隆々たる勢力を扶植して本願寺中興の上人と仰がるゝに至る。

蓮如上人

は存如上人の長子にて諱を兼壽と云ふ、應永二十二年二月を以て生る、六歲の時眞宗再興の遺言を受けて母

幼時の艱難

に別れ、繼母の手に育つ、幼きより種々なる事情の下に艱難を嘗められたるものゝ如し。實悟の覺書なる御一代聞書に曰く、

蓮如上人御若年の頃御迷惑の事にて候ひし、唯御代にて佛法を仰せ立てられんと思召候御念力一つにて御繁昌の事御辛勞故に候云々、

又曰く、

古き綿を御とり候て御一人ひろけ候事あり、又御衣は肩の拔けたるを召され候、白き御小袖は美濃絹のわろきを求めやう〳〵一つ召され候、

又曰く、

よろづ御迷惑にて油をめされ候はんにも御用脚(錢)なく候間やう〳〵京の黑木を少しづゝ御とり候うて聖教など御覽候よしに候、又少々は月の光にても聖教を遊ばされ候、御足をも大概水にて御洗候、又二三日も御膳まゐり候はぬ御事も候由、云々

斯かる間に所して信を堅め行を修めたるなり。父上人の後を承けて法燈を次がれしは四十三歲の折にして夫れまでは繼母弟妹の間に心を置き、萬づ日蔭の身にて幼童の襁褓をも一人にて洗はるゝ等の勤めを自らせられしものゝ如し。かくて不惑の年を過すまで忍ばれたる艱難は終に上人をして光り輝く玉ともなしたりけん。上人の大活動は是よりなりけり。最も在家の敎化には以前より從事せられ其の三十五歲の折には遠く祖師の跡を偲びて關東北陸の地を巡り數多の信者を得られたりき。玆に愈々本願寺の住職と定まるや其の德を慕ひて大谷に聚まる信徒の數漸く增加し寛正二年に祖師の二百年忌を修したる折は關東北陸の門徒も之に參して

叡山の猜忌

北國巡敎

山科本願寺

石山本願寺

上人の人格

盛大を極め、朝廷より日華門の銘額を賜はりて正門に冠するに至りぬ。斯くて叡山の猜忌は日に加はり寛正六年には坊舍全く山僧のために燒き拂はれたり。上人は身を以て難を江州に避け、大津、堅田より三河、畿內等を傳道し文明三年五十七歲にして北國巡敎の途に就けり。先づ越前の吉崎に留まりて玆を布敎の中心となし、前後四ヶ年の傳道は加賀、越中、能登、越後、信濃、出羽、奧州七ヶ國の信者を吸收して、四方に響ける道譽は一層高田派並びに天台僧侶の疾視を增し、文明七年吉崎を退去して若狹の小濱に遁れ、丹波より攝、河、泉の方面を布敎せり。文明十一年新たに宇治山科の地を相して本願寺を建て、第八子實如上人に宗務を讓りて退隱し明應五年更に石山本願寺（今の大阪城）を建てゝ住すること四年、同八年山科の南殿に歸り八十五歲にして寂を取りぬ。上人の生涯は一所不住にして法を說き、老ひて益々壯を加へ來れるもの堅忍持久の資によるなからんや。一代聞書に曰く

蓮如上人、細々、御兄弟衆等に御足を御見せ候、御わらじの緒くひ入り、きらりと御入り候、かやうに京田舍御自身に御辛勞候て佛法を仰せ置かれ候由、仰せられ候ひし云々、

眞宗は元來卒直簡明の敎へなれども、親鸞上人の敎行信證等の本書は猶むつかしく高き趣きありたるを、上人に至りて一層低く平易に書き下して誰人にも領く樣せられたるもの化道の上に大なる功果ありたるべけれど、其の感化の大部分は上人の人格に歸せざるべからず。上人の生活が感謝報恩にて滿たされしは其の接する人の誰も感激せざるは無かりき。一片の紙切れの落ちたるも佛法領のものとして無駄にするを歎き、一飯の食、一衣の葛布、一露の凌ぎにも佛恩の冥加を稱し、如何なる不自由をも悅んで之を忍びたりき。小心翼々として而かも何物にも屈せざる勇氣あるもの此れ信仰の力にして一宗再興の依りて生じたる所以なり。

眞慧上人

當時高田派に眞慧上人あり、同じく北國に教を布きつゝありしが端なくも本願寺派と衝突し、朝倉、富樫等の諸侯之に加はりて北國の騒擾は年に激しさを加へ來りぬ。

實如上人

蓮如上人の寂後實如上人法席を繼ぐ、後柏原天皇御即位の費を獻じて戰國時代の美跡となれるは人の知る所なり。實如寂して證如上人後を承く。偶々日蓮宗徒との爭ひ嵩じて天文元年山科の坊舍燒亡の厄を蒙りしかば逃れて攝州石山の坊舍に入る。天文五年後奈良天皇の即位に當りて又獻金の舉あり。證如の後に

證如上人

法燈を紹ぐ。後奈良院の崩御に當り御大葬の費一切を獻じて叡感あり、父祖の功をも併せ思し召されて永祿二年門跡の號を免許せらる。翌年正親町天皇御即位の大典あり、顯如乃ち毛利元就を勸めて共に御費用を獻じたり。斯の如く本願寺は亂れたる世にありて能く常に皇室のために盡したるもの、今日の盛大を來したる所以なるべし。顯如上人の當時は加、能、越の諸州を始めとし三河、五畿内等に數多の領地を有し檀徒は强き信仰の下に寺勢の擴張を勗めたれば今や群雄の間に立ちて些かの遜色なき大諸侯の姿をなすに至りぬ。時に織田信長尾張より起りて數多の諸侯を打從へ足利氏に代りて將に天下を統一せんとす。石山本願寺の要害を聞き茲に城を築きて西國の備へに充てんと欲し、使を遣はして顯如上人に其の旨を諭す。衆徒聽かず。信長怒り兵力を以て乘取らんとし茲に有名なる

大諸侯の如き勢力

勤王の美擧

織田信長との衝突

石山戰爭

は開始せられたり。駿河の今川、美濃の齋藤、近江の淺井、越前の朝倉、甲斐の武田を始めとし十方の大敵を切り靡けたる破竹の勢を以てして終に一本願寺を從ふる能はざりき。寺内にも鈴木重幸、同孫市の如き智勇備はれる名士もありしなれど多くは是れ農民の寄合のみ。石山の地は要害を稱せらるれど元來寺門にして城郭にあらず。斯くて能く十年の長きに渉りて信長に屈せざりしもの實に信仰の偉力なりき。彼等信徒は宗門の爲とあれば火の中水の中をも辭せざりしなり。石山總攻擊の直最中に顯如上人に扮したる一僧、櫓の上に顯はるゝや、皆々踟躕して攻めかゝらず、信長怒りて上人を射殺せと命ずるも應ずるものなし。偶々鐵砲を以て向はんとするものあれば宗門歸依のもの筒先に立ち塞がりて先づ我を打てと爭ふ。既にして上人の口より念佛の聲尊とけに聞えわたるや、忽ち弓矢鐵砲を投捨て合掌して涙を流すものあるに至る、こはこれ寺方の人にあらずして實に信長の軍兵なりき。主命止むを得ずして攻口に向へども、心に宗門の安全を祈るもの多し。信長の焦心も徒勞にして十年その志を得ざりしもの故ありと云ふべし。信長嘗つて叡山の仕打を惡んで之を攻むるや旬日にして三千坊を燒き盡したり。彼と是とを比較して門徒派の勢力並びに其の信仰の如何に强烈なりしかを想像すべきにあらずや。信長百計盡きて終に天皇の勅旨を仰ぎぬ。勅なればいともかしこし上人速かに領掌して織田と和睦し、石山を退去して紀州鷺の森に移りけり。信長猶も怨み思ひ四國征伐に向へる丹羽長秀に内意を含めて突然備へなき鷺の森を襲ふ。軍半ばにして信長本能寺に弑せられ圍みは自ら解かれたり。斯くて本願寺は爾來益々興隆の運に向へり。

鐵砲を投捨て合掌す

勅命により和を講ず

鷺の森

第五節　日蓮宗の法難

永享七年鎌倉に於て天臺、日蓮の法論あり。都下喧諍を極む。管領足利持氏は平素日蓮宗派を惡みありしが茲に至りて日蓮宗一切禁制たるべし、違背するものは遠島若しくは首を斬らんと布告せり。信仰に固まれ

足利時代の日蓮宗禁制令

る宗徒は更に恐るゝ色もなく、我こそ信者なれ、はや流せ、疾く切れと役所に迫り來るもの日に幾百と云ふ數を知らず、流石の持氏も其の所置に困じ果て、改めて禁令を撤回するに至れり。

永享十二年、將軍義教日親上人の强盛なる折伏布教を怒りて禁獄し翌嘉吉元年三月燒鍋冠の慘刑に所したり。

妙宗弘通のための難行

日親上人

は上總中山法華經寺なる日蓮上人の門に出でたり。一身を擧げて妙宗弘通に委ねんとの大願を興し厄難に堪へ得る修行をなさんと戸陀林の中にて蚊蚋に刺されながら毎夜百遍づつの自我偈を誦する一百日、次に一日一本の指爪を拔きて其の痕へ針を刺し、十日にして全指の爪を拔き盡し、更に其手を熱湯に浸たして冷ゆるを待つなどあらゆる苦痛を忍び得て强き自信を得、それより京都に上りて折伏の毒鼓を鳴らし將軍義教に書を呈して他宗を改め一乘の法華に歸依せよと勸告する數次、義教怒りて將軍を侮るものとなし引き捕へて種々なる苦痛を與へ、强ひて題目を止めしめんとす。而かも上人は平然として物の數ともせざれば義教怒へ兼ね、命じて赤熱したる鍋を取り上人の頭上に冠らす、慘狀獄吏も猶顏を背けたり。義教云ふ樣、いかに日親、法華の行者を惱ます者は現罰ありとか、我れ汝を苦しむる久しきものあり、今に何等の報なきは何故ぞ。上人微笑して曰く、將軍若し現罰を望まば三年の内に到らん。義教笑つて曰ふ、三年とは緩慢ならずや。上人曰く、然らば百日に縮め申さんと、言讖をなしてそれより恰も百日目の六月廿四日赤松滿祐のために弒せられたるも不思議なりけり。上人は其後獄をゆるされたり。義教の近臣なりし畫聖狩野元信父子を始めとし數多の信者を得、三十有余の寺院を建て八十二歲にして寂をとれり。上人は實に鍋冠の刑を筆頭として

集鍋冠りの慘刑

廿八回の禁獄拷問

回の禁獄拷問を受け六十六回の法論對決をなしたりと云ふ。

日蓮宗の布教には常に迫害を伴へり、而かも不撓の傳道に宗勢隆々たるものありしが天文五年七月叡山の衆徒、檀家の諸侯と糾合して其勢十八萬、大舉して京都内なる日蓮宗の諸寺を襲へり。日蓮徒終に敗られ本山二十一ヶ寺は灰燼となり數千の殉教者を出して一時都下の本宗派は全滅したりき。之を天文の法難と稱す。されど間も無く寺院再興の御教書下りて天文十四年には稍舊に復したり。但しこれより日蓮宗徒は漸次その鋒鋩を緩めたるが如しと云ふ。天正七年近江の安土に於て淨土、日蓮の法問對決の事あり、信長日蓮徒の不遜を惡みて之を壓迫し敗者と定めて其の首魁者を刑に處せりと云ふ。其の問答の次第と稱するもの信長記をはじめとし諸書に載せあれど我等には根本の問題と頷づかるゝものもなし。要するに日蓮宗は折伏立宗の點に於て最も他の感情を害し易く、一般に狷介不遜の宗派を以て目せられ、爲政者の多くは之を冷遇したり。從つて何れの法論對決も常に公平を失したる裁決を與へられたるものゝ如し。日蓮宗の立場より云へば謗法の罪人なれどこれ亦普通の人情なり。

天文の法難

安土法問

第六節　戰國時代信者の消息

足利氏の中世以後は殆んど無政府の時代にして階級位勳も殆んど權威なく、たのむ所は各自の實力にあり。國憲もなく、禮讓もなく、所謂弱肉强食、押領、分取勝手次第の世の中なれば力あるものは飽くまで榮ゆべき數理なれども戰國時代全體を總合して天下歸一の蹤より大觀する時は實力と稱するもの單に腕力とか、戰略とか云ふもののみにてはあらざりき。舊式の云ひ樣なれど德を備へたるもの終に最後の勝利者なりき。用意

無くして戰國時代の歴史を讀めば權謀詐術を事として誠意も道德も無き樣なれど、仔細に之を見もて行けば、時代の思潮に伴ふ形式の上なる道德觀念こそ異なれ其の內心より流露する至誠のひらめきは至る所に認めらるゝなり。一切衆生佛性ありてふ佛陀の敎へは萬世にわたりて信實なり。德に向つて嚮向するが衆生本具の性なりとすれば德あるものに衆望歸して其の力の大を致すは自然の理なり。權謀術數と稱するも其の一部は德を以て看板となし人心を羅致するにあり。しかも塗粉は久しく面目を覆ふ能はず、本來の醜曝露するに及んで人心忽ち離散するなり。茲に於てか實力本位の戰國時代にありても心懸けある武人は武術戰略を練る傍にも神佛に信仰を捧げ精神的食糧を求めて德性の涵養を怠らざりき。朝倉孝景は北越に響ける名將なり。侍は信心肝要なりと常に部下を諭し、自らも毎朝洗面後に卷數を定めて看經するを日課とせり。嘗つて云ふ樣、合戰に當り吉日を選み方角を調べて期を過ることあるべからず、如何に吉日なりとも大風に船を出し、大勢に獨り向はゞなどか勝つべき。諸神諸佛に祈誓を込め信心を以て戰はゞ必らず勝利を得べきなり。又人の主人は不動愛染の如くなるべし。不動の劍を提げ愛染の弓箭を持てること、惡魔降伏の爲にして內には慈悲深重なり。人の主も善きをば勸め、惡を退治して理非を別つべし、これこそ慈悲の殺生なれと。是れ實に當時の英雄の理想を道破したる者と云ふべし。美濃の齋藤道三は常に守り本尊を身につけ、成佛疑ひなしとて戰陣に臨めりと云ふ。これ亦道三一人に限れるにあらざるなり。文弱の誹りありたる大內義隆にして猶

闇黑時代にも至誠の閃きあり

朝倉孝景の信佛

不動明王を理想とす

齋藤道三

大內義隆

討つ人も討たるゝ人も諸共に
　如露亦如電應作如是觀

と辭世を殘し、從容變に死したるもの、生死の問題を解決し居たる當時の武人の面影なるべし。孝景の理想と、道三の安心と、義隆の覺悟と無かりしものは當時の英雄と稱する資格無きものなり。今著名なる二三の英雄の信仰生活をものがたり、其他を偲ばん。

雲岡和尙に參す

花も實もある武人として戰國時代にうたはれし

太田道鑵

はかねてより禪門に歸し、城南に萬年山靑松寺を創建して雲岡舜德禪師を請し參叩怠らざりき。一日禪師瑞巖主人公の話（一の公案）を看取せしむ。道鑵工夫參究する正に二年、たま〳〵越生に遊びて一人の客の靈跡巡拜するものと道づれとなれり。道鑵その何れの人なりやを尋ねしに京師なる由答へたり。彼地の山川、此地に比して何れぞと問へば、唯鐘聲のみありて異なること無しと答ふ。道鑵此の時倏然として悟る處あり、直ち和尙乃ち之を印可せり。斯くて道鑵は生死の關門を透脫して身心脫落の境界に入れり。後年讒者の舌鋒に遭ひて浴場に刺されし時

道鑵の悟

昨日まで莫妄執を入れ置きし
　へんなし袋今やぶれたり

と辭世を詠んで神色自若たりしと云ふ。

毛利元就

は戰國時代の模範的英雄なり。其の三人の子を誡しめたる文書を擧げて其の平素を窺ふべし。

我等十一の年土居に候ひつるに井上河內守所へ客僧一人來り候て念佛の大事を受候とて催し候、然間、大

神佛の冥護を說きて三子を戒しむ

方殿御出候て御保候。我等も同然に十一歳にて傳受候て是も當年の今に至るまで毎朝多分いのり候。此儀は朝日を拜み候て、念佛十遍づゝ唱へ候者、後生之儀者不レ及レ申、今生祈禱此事たるべきよし受候ひつる又我々故實に今生の願をも御目へ申候。もし斯樣の事一身の守と成候やとあまりの事に思ひ候。左候間、御三人之事も毎朝是も御行候へかしと存候〳〵、日月何れも同前たるべく候〳〵。

一番槍と念佛

我等事、不思議に嚴島を大切に存ずる心底にて年月信仰申候。さ候間、初度に折敷はたにて合戰の時も既にはや合戰に及び候時、自レ嚴島二石田六郎左衞門尉、御久米卷數を捧げ來候條、さては神變と存知、合戰彌すゝめ候て勝利候。其後嚴島要害爲レ普請一我等罷渡候處に存外なる敵船三艘與レ風來候て及合戰一數多討二拂頸一要害之麓にならべおき候。其時我等存當候。さては於二當島一彌可レ得二大利一奇瑞にて候哉。如レ此之仕合共候間、大明神御加護も候と、心中安堵候ひつ、然間、嚴島を皆々御信仰、肝要本望たるべく候。かゝる誠の下に元春、隆景の如き名將も生じたるなり。

山中幸盛

は尼子掉尾の勇士にして三日月權現に祈誓を込め、七難八苦に遭はしめ給へ、我力量の限り試さんと祈りたりてふ逸話は普く人の知る所なり。嘗つて曰く、

一番槍は我慢にては突けず、神號と共に突き入れしも助からんとする氣味ありて危し、死を決し南無阿彌陀佛の聲と共に突き入ることを得たり。

と。法然上人が忠度に與へし歌の心と思ひ合はせて勇士の信念と、大悟せる高德と心裏の相通へるを見る。

上杉謙信

林泉寺の問答

が毘沙門天を信じ毘の字の旗を常に陣中に押立て進みたりてふ事は有名なる話なり。謙信幼時より神佛に對する敬虔の念篤く、又參禪工夫によりて心膽の鍛練をなしたりき。一日春日山林泉寺なる宗謙和尙に參し、「達磨不識の意旨作麼生か會す」と突擊せられ、答ふる能はずして痛棒を受け、大死一番、然る後に來れと喝せられ爾來勇猛なる大精進の下に悟りを開き、宗謙の偏名を取りて謙信と名乘り、不識庵と號したるもの玆に因由するなりと云ふ。謙信は生涯妻妾を蓄へず、全く在俗の出家なりけり。義將の義將たりし其源は矢張り一の信念にして、俠名を馳せんための衒氣より出づるにあらざるを見るべし。其の好敵手たる

在俗の出家

武田信玄

快川禪師に學ぶ

亦諏訪明神を信ずること深く、常に明神の旗を軍陣に進めたりと云ふもの謙信に似たる處あり。甲州慧林寺の快川禪師に親炙して禪要を學びたり。快川は當時稀なる高僧なりき。天正十年信長命じて慧林寺を圍み門側に薪を積みて火を放つや寺僧悉く威儀を正して猛火の中に仆れ、快川禪師最後の偈を提唱して曰く

心頭滅却すれば火も亦冷し

安禪は必ずしも山林を須ひず、心頭を滅却すれば火も自ら冷し

と。其の素行の上に兎角の訾難ある信玄もかゝる高僧に就きて究竟の覺悟をなし居たるなり。

北條早雲

藥師佛に祈願す

は詭計百出を以て稱せられたる英雄なり。しかも神佛の靈驗を信じて疑はざる人なりき。其の關東に下らんとするや伊勢大神宮に弓矢の冥加を祈念し、諸願成就の神符を得て前途の光明となし、上杉氏を打たんとして先づ三島の藥師佛に祈願を込めたり。彼は六韜三略を眼中に置かざりしも神佛の冥助は衷心より之を仰ぎたり。權謀術數は戰略として之を用ひしも、上を敬ひ下を憐れむ至誠を本とする事の佛慮に叶ふべしとは常に

一族に與へたる誡しめなりき。其の子氏綱亦敬神、信佛の念篤く父の遺言によりて相州の湯本に金湯山早雲寺を建立せり　孫の氏康部下を諭したる言に曰く

我數多の合戰に勝利を得ること武力の致す所にあらず、併しながら天運を全うして神明佛陀の擁護にかゝる故なり、云々

寺院の建立

と　四國の英雄　長曾我部元親

父の跡を相續するや泰泉寺豐後を召して兵法の奥義を尋ぬ。豐後答へて曰く、心性を悟り諸民を親愛するを上とし、計謀に依りて學ぶを中とし、戰術を貪り習ふを下とす、魚鱗、鶴翼、堅甲、破軍等兵略擧げて數ふべからざれど、德を以て根本となすべしと　元親常に之を以て肝心とせり。父を吊ひては寺院を建立し千部の法華經を讀誦せしめ、折節、寺門に入りて僧侶に道を尋ねたり。領國を治むる法令の劈頭に曰く、神社佛閣の破損せるものは其所の代官或は領主に訴へ修理を加へしむべし。並に祭禮等古法を濫るべからざる事、と。

以上は著しきもの丶二三のみ。概して云はゞ敬神信佛の念は當時一般の思想の中核をなせりと云ふべし。斯くて亂麻の如き戰國時代にも一條の人道存し、空林、沙漠との想像は案外當らずして美はしき人情自然の花の反りて文明を誇る時代に造れる花の匂ひなきに勝れるものあるを發見すべし。

第十章　織豐時代

第一節　織田信長と佛敎

排佛家として見らるゝ信長

信長は世に排佛家として目せらるゝ人なり。彼は實に日本佛敎の總本山と仰がれし比叡山を燒き拂ひて一字を留めず、眞言祕密の靈場たる高野の僧侶二百余人を捕へて塵殺し、石山本願寺を攻めては十年の確執を結びぬ。其他泉州槇尾寺、甲州慧林寺の燒滅等擧げ來れば排佛の證歷々たるものあり。されど又一面より考ふれば、僧の僧として尊とまるゝは、欲界の巷より去りて淸淨なる道を行ずる聖者と仰げばにて、佛寺の尊きも尊き聖者の道場なればなり。法、妙なるが故に人尊とく、人尊ときが故に處尊としと先覺の敎へられしも是なるべし。若し僧にして道を修むる無くんば、僧として尊とぶべき理由無きのみならず、法の上の賊ともいふべく、斯かる法賊の住む佛寺は一の魔窟とも稱するを得可し。勿論こは極端の見解なれど捉はれたる敎への形のみを尊とんで精神を忘るゝ者を慨する者の眼には斯かる見方もおこるべきなり。信長は活達にして一徹短慮の大將なり。天下の僧侶が蕩々として其の本分を忘れ、人の信仰を奇貨として已れの欲望を遂しうせんとするぞと見、憤然として大鐵槌を加へ、戰々兢々として神佛に侵する昧者の夢を覺ましたるもの又快心の事なしとせず。天下統一は信長畢生の本願なりき　勅旨を奉じて不逞を征し四民の疾苦を救はんとするに當り、敵と結托して之を妨げんとするは國賊の所爲なり、僧侶は飽くまでも世法の外に立つべきものなりと、是れ信長の所信なりき　其の舉あまりに慘酷を極めたるは元より詑難を免れぬ所なれども、單に寺を燒きたり、

信長の見たる當時の僧侶

僧を苦しめたりとの外觀のみを以て信長を排佛家と見ば其の眞相を誤るべし。信長嘗つて卒手政秀の忠死を感じ其の菩提の爲に寺を建立し政秀寺と名づけて自ら參詣燒香せる事實あり。政秀寺の開山なる妙心寺の僧澤彦には深く服したるものゝ如く、其の信長の名命も、岐阜の地名を選みたるも澤彦の敎へに依れりと云ふ。

政秀寺
澤彦和尙

信長の敵山を鎭討せんとするや、佐久間信盛、武井夕庵等之を諫めしに信長用ひずして云ふ樣、

去年淺井朝倉と坂本に於て對陣の時、此條色々仰せ聞かせられ候といへども山門曾て承引なく剩へ敵徒と一味して帝王公方へ弓を引き、魚鳥淫戲を事として頗る沙門の道に背く、是は釋門佛家の僧徒にあらず、天下の政道を相妨ぐ、佛意冥慮に打背きて只國賊の類なるべし。今是を亡す事は我れ是を亡すにあらず、山門の自業自得果也、何を以て赦免せんや云々（信長記）

信長の面目

信長と基督敎

卽ち信長の攻めたるは釋門の僧侶にあらずして佛意に負き政道を妨ぐる國賊なりき。其の燒却したるは精舍にあらずして魚鳥淫戲を事とし帝王公方へ弓を牽く破戒の魔物の棲家なりき。形を捨てゝ精神を見、直情徑行敢て憚らざりしもの實に信長の天性なりき。信長は決して殊勝氣なる所謂崇佛家の態度を執らざりしも、正しき意味に於ける神佛を信ずる點に於て人後に落つるものにあらざりき。信長が基督敎の傳道に便宜を與へたりと云ふもの決して佛敎破却の心よりおこれるにあらず。彼は佛道の敎義を知らざると同時に、基督敎の眞諦に觸れんとも欲めざりき。彼は戰國の英雄なれども斯かる思想問題に對しては全くの門外漢のみ。佛敎に於ける佛陀も、基督敎の神も彼の眼中には殆んと同一なり。卓見と云はゞ卓見、低級と云はゞ低級の思想なりき。斯くて腐朽墮落の僧侶に替ふるに清新の布敎家を以てせんとしたるのみ。信長をしてかゝる態度を執らしむるに至れる罪の半以上は當時の僧侶にありしと云ふ可し。

第二節　豐臣秀吉と佛敎

信長と反對の態度

寺院の復舊

方廣寺建立

根來寺の征伐

興山和尙

宗派の總合を計る

方廣寺大佛

秀吉の佛敎に對したる態度は全く信長と反對なりき。叡山の再興は信長の弑せられたる年の十二月より之を許せり。天正十二年には安土法問以來逼塞せられたる日蓮宗の布敎但復を許したり。天正十九年には本願寺を京都西六條堀河に再建して之が大檀那となれり　而して彼は更に進んで方廣寺大佛殿を京都に建て千人の僧を招ぎて双親並びに祖先の供養をなし、善光寺如來を茲に移して崇信せり。斯の如く盛んに興佛の舉に出でたりと雖も命に從はざるものは之を征伐したり。紀州根來寺を屠りて高野山に向へるが如き最も著明の事跡なりき。時に野山の名僧木食上人秀吉の陣中に來りて一山歸服の旨を述べ攻伐の非理なるを說く。秀吉深く其の態度に服し爾來一山の僧統となして名を興山と呼び、新たに一寺を高野に創して之が開山となし、執奏して興山寺の勅額を賜はるに至る。大佛殿の工事も興山をして督せしめき　秀次の放縱を怒りて之を高野に幽するや亦興山に託したりき。其信任の深かりしを見るべきなり。秀吉の方廣寺大佛の造營は或る意味に於て各宗の統一を計れるものとも見るべき理由あり。其の構造の大仕掛なりしは所謂秀吉流にして大佛の高さ十六丈、佛殿の高さ二十丈、其の廣域東西百三十間南北百三十七間なりしと云ふ。佛像もと銅を用ふる考なりしも竣工の年期を急ぎたるため木像となしたるなり。天下の五奉行命を受け、二十一國の士之に當り更に野山の興山上人主任となり毎日五千人を使役して二千日の時日を要したりき。佛殿の棟木は富士山より之を求め德川家康命を受けて大阪に輸送するに人夫五萬人を要したりと云ふ。而して佛像を造るに要する釘鎹を造るため野山をはじめ武器を有せし寺院より悉く刀劍を沒收し、僧徒をして專念佛道にいそしましむる

刀狩、大佛供養會

事とせり。世に稱して刀狩と云ふ。斯くて落成後大供養を行ふに當り各宗僧侶の出仕を命じたり。蓋し天下統一と共に宗派をも總合して確執を除かんとしたるや著し。最も教義の統一を計れるにはあらず。秀吉は世間の大英雄なれども出世間の道に關しては門外漢なり。幽邃なる佛道の眞諦を知れる人にあらず。されど大體に通ぜる英雄なれば各宗その教義を異にすと雖も同じく佛道なるに於て相通へる精神あるべきを思ひ、各宗とも執るべき道をとりて法を弘め人を導きながらも、全體として融合一致せしめんとしたるなるべし　從つて彼は何れの宗旨を特に信じたりとも見えず、本願寺の檀那ともなれば野山の興山をも信任せり。加藤清正の日蓮宗信者なるを知りては題目を記せる旗を賜はりしが如き、殆んど一視同仁の有樣なりき。多くの史家は秀吉の興佛の擧を稱して其の信仰に出づるにあらず全く人心繰攬の術となす。けにさる事もありしならん。されど彼も亦人なり、宗教的情操のなどか無からん。人事の萬事夢なるを知りて大靈の歸着を認めたるべく、天下を治むるには神佛の威德を感ずる各自が持てる宗教的情操を陶冶　ることの最も必要なるを感じたるなるべし。此意を外にして單に人心繰攬術とのみ見るは人情に通ぜざる見解と云ふべし。但し當時の僧侶中、明惠の泰時に於けるが如く、祖元の時宗に於けるが如く、若しくは夢窓の尊氏に於けるが如く、敎への權威を示して秀吉を指導する程の名僧無かりしは明かなり。興山の秀吉に於けるも所謂信任を受けたりとの程度にて歸依を受けたるにては非りき。彼の秀次の野山に預けらるゝや、當山七百年以來茲に登りし者の命を害したる事無ければ枉げて御宥しに預かりたし、然らずんば當山の名これより汚さるべし、と願ひたる興山の切なる乞も終に許されずして秀次の生害せしめられたるもの這間の消息を漏らして餘りあり。當時秀吉の勢力は何者をも壓倒したり。大佛供養の法席に列なれる各宗の高僧は唯々諾々としてこれ命これを奉じ

信任する僧を得たれど歸依する僧を得ず

人心繰攬の術のみにあらず

不受不施派の開宗

其の一擊一笑に悲喜したる狀想像に値するものあり。此の時一人毅然として法は國家の權威も動かすべからず、と主張して信者ならざる者の供養を退け頑として出仕の命を奉ぜざりしは京都妙覺寺の

日奥上人

なりき。上人は斯くて京都を退き丹波に入り、後慶長四年德川家康の千僧會に亦應ぜずして對馬に謫せられ、配所にあること十三年、慶長十七年に許されて京に歸り寛永七年六十六歳にして妙覺寺に寂せり。これ日蓮宗不受不施派の開山なり。其の主義の如何は暫く措き、信仰の篤には何者にも屈せざりしもの鐵仰に値すと云ふべし。

斯くて秀吉は一人の日奥を除ける外、天下何物をも我意に從はせて萬事意の如く振舞ひしも無常の風には勝たれずして

露と置きつゆと消えぬる我身かな
難波の事はゆめの又ゆめ

と歎聲をもらし六十三歳を一期として世を去りぬ。一代の鴻業はけに目覺ましき事ながら、末期何と無く秋風落莫の感を催さしむるもの、天下無一物の高僧が法悅に滿たされつゝ永遠の生に向つて歸入する臨終の罷はしさと比すべくもあらず。嗚呼人事如何に大なりとするも絶對の力に對して終に何等の權威をも誇る能はざるなり。秀吉が信任する高僧を得て歸依する高僧を得ず、宗教の上に立ちて權勢を振ひたるもの幸か不幸か知るべからざるなり。

英雄の末期と聖者の末期

秀吉と云へば直ちに聯想せらるゝものは

加藤清正

なり。清正は實に全身を擧げて主人秀吉の爲に盡したり。忠と義とは清正の生命なりき。彼は勇者として古今獨歩なり、而かも仁慈の人として渇仰せられたり。彼の朝鮮征伐に從軍せるもの總勢三十萬と稱す。浮田、小早川を初めとし、勇將猛卒雲の如く多かりし間に獨り清正の名の斬然高く唱へらるゝものは何ぞや、虎を打ちたる勇にのみよるにはあらざりけり。二王子を勞はり正道を守りて彼等無辜の上に施したる深き悲心に依るなからんや。清正の死したる時拂虜となりて從ひ來れる朝鮮人二人まで追腹切りて後を慕へりてふ美談は千古例鮮なしと云ふべし。清正の此の忠勇慈仁は絶對信仰の發露に外ならざりき。清正が題目の旗押立てて戰陣に臨みたるは誰も知る所、猶傳ふる所によれば其の用ひたる烏帽子は實に法華經二十八品を寫したる紙をもて貼り込みたるものなりしと云ふ。肥後の國に封ぜらるゝに及び熊本に本妙寺をおこして法華道場となし、更に母の菩提の爲として常光寺を建てたり。清正の孝行は有名なるものにして生前母に仕へて誠を致せるは云ふまでもなし、其の沒するに及んで京都本國寺に法華經の萬部會（まんぶゑ）の供養を行ひ、時人をして古今初めての事と歎賞せしめたりき。秀吉の死するや秀頼のために託孤の忠を致したり。當時天下の大勢は殆んど德川氏に歸して而かも秀頼輔佐の者就中淀君の如きは時代の推移を覺らず徒らに昔の夢を見て之に抗せんとす。清正此の間に所して豐臣氏の祀を存せんと、人の知らざる苦心を重ねたりき。不祥の夢に心を痛め三十番神（法華經守護の神）に祈念を込めたるなど夢寐の間も主家を思へる狀察するに餘りあり。二條城に秀頼を守護して家康との會見を遂げ、歸宅後懷劍を懷より取り出し、今日はじめて太閤の御恩の幾分を報じたりと落涙せる記事を讀みて心を動かさゝる者ありや。秀吉死して豐國神社と祀られ、清正死して清正公（せいしやうこう）と祭らる。豐國神社は英雄の記念として見られ、清正公は信仰の對象として歸依を受く。人間の事業は如何に大なるも時經れば過去の遺物となり、神に通へる信念は時間を超越して宇宙生靈の伴侶たり、先達たるを見るべきなり。

法華經の烏帽子

母の供養に法華經の萬部會

至忠至孝

豐國神社と正清公

第十一章　德川時代

第一節　德川家康と佛教

家康の血統は信仰の連鎖なり

德川家康幕府を江戸に開くに及び治國平天下の第一策として先づ文教を盛んにし佛教を以て一般國民の信仰を統一し階級的制度を嚴にして各自守る所に安んぜしめ、斯くて意の儘に政綱を張らんとせり。されど單に政略的意味のみにはあらずして家康は元來信仰の人なりき。家康の血統は信仰の連鎖なり。遠き祖先義家等の事は既に述べたり。九世の祖有親、八世の祖親氏は相續いで時宗の僧侶となり、親氏の孫信光は松平家中興の人にして信光明寺の建立は其の信仰を語りてあまりあり。信光が本尊阿彌陀佛に籠めたる願文の一節に曰く「子々孫々主從に至るまで自今淨土の宗門に歸依せしむる吉誠相定め畢んぬ。願はくは入道（信光自身のこと）の子孫一天下を領し源氏の武運長久萬々年にして彌勒王迄も繁昌し二世の御利益を施し給はんことを願奉る」と。其子親忠は井田卿の戰にて討死せる敵味方の死骸を集め千人塚をきづきて傍に淨土寺を建立し大樹寺と號したり。其の寄進文書の一項に曰く「大樹寺樣の御事を大切に子供存候は肝要に候、御寺の事を如在（疎略にする事）候はゞ如何樣の弔候ふとも其の志屆く間敷候」。夫れより長親、信忠を經て清康に至り信心更に堅固にして是と云ふ文字を掌に握りてふ靈夢を見、是を別てば日下人なれば天下の蒼生を掌に入るゝ人物の子孫より出づべしてふト者の言を聽き先祖の余德孫の家康に來れりと豫言せしとかや。家康の生るゝや又奇瑞を傳へらる。母の胎るをり三州鳳來寺なる藥師の十二神中第三の普賢菩薩寅の神を賜はると夢み、家康の生るゝに當りて忽然その像失せ、家康の薨去に及び再現せり等云ふ其の一なり。斯の如きは信ずべき限りにあらざれど、兎も角家康は信仰の血統を引き、幼きより奇しき運命の經路を辿りて其の心中に神祕的なる一種の强き信仰を有したりけんは蓋し疑ふべからず。彼は常に自己の幸運を堅く信じて疑はざりしと云ふもの其の信仰を語るにあらずや。家康嘗つて戰破れ難を三州大樹寺に避けたる折、住持登譽上人家康に尋ぬるに戰ひの目的を以てす。家康答ふらく「富四海を保ち名を擧げ父母を顯はし桑を後裔に傳ふるにあり」、上人曰く「威力を以て富貴を贏ち得んとするものは久しきを保たず、一旦は其の志をなすと雖も貪欲の心は惡趣を生じ迷魂量りなき苦を受けんこと必然の道理にして免るべからず」、家康曰く「謹んで教化を仰がん」、上人曰く「一切の所作は元來善惡の區別無し、唯其の人の心にあり。心法に適はゞ日夜に刀刃を振ひ殺斷すとも惡業とならず。心法に適はずば長へに經を誦し晝夜に念佛すとも善業とならず。要は唯方すの一法にあり、不逞を征して四海の蒼生を救はんてふ慈悲の念を中心として鬪爭に從はゞ殺生卽菩薩行なり。己れの慾望を中心として戰はゞ三途の苦患免るべからず、願はくは佛道に歸依して戰に從はれ四海悉く正道に歸せしむるを以て本願とせられよ」と。家康深く其の教へに感じ爾來手に念珠を放さず兵馬倥偬の間にあるも日課稱名を怠らざりしと云ふ。彼れが子孫の計をなすに於て至らざる無かりしもの菩薩の行者を以て目する能はざる所なれど、名教を興して治國平天下を理想とせるもの單に自家の計のみと云ふべからず。其の訓戒百ヶ條の一に曰く、文武皆仁により出づ、千徑萬機と雖も其理同じ、治國平天下の法玆にありと知るべし、と。彼は安心の道を佛道に求め、經國の道を儒道に取りたる如し。儒道は藤原惺窩に依り、佛道は天海によりてそが振興の劃策をなさしめたり。

家康の神祕的なる信仰

登譽上人の教誨

安心の道を佛道に求め經國の道を儒教に採る

天海僧正

黑衣の宰相

日光山

東叡山寛永寺

輪王寺の宮

高僧の俤

は家康、秀忠、家光三代の歸依を受け幕政の帷幄の中に參與して黑衣の宰相と稱せられし政治的手腕を有せる傑僧なりき。家系審かならず、會津なる蘆名氏の一族と云ひ或は足利義澄の末子なりとも云ふ。幼時叡山に登りて臺學の蘊奥を極め慶長四年武州仙波の喜多院に住して弘法に勗めありしが後家康の知る處となり偶々叡山に宗論おこりて紛議を極めしを命に依りて調停の任に當り圓滿なる局を結びて其の技量を示したり。爾來幕府の信任愈厚く慶長十八年野州二荒山を授かり日光山と改めて茲に住しぬ。二荒山は其の昔神護景雲元年勝道上人の開きたる名蹟にして弘法、慈覺等の更に復興修理を加へたる所なり。元和二年家康の死するや遺命により天海導師となりて之を久能山に葬り東照大權現の神號を乞ひて翌年四月日光山に移葬せり。天海法事を總べて盛儀人目を驚かしたりと云ふ。天海又元和九年幕府に乞ひ城北忍が岡に精舍を創立して日光の里坊とせり、其の經營には伊賀の上野の城主藤堂高虎主として之に當れり。其の地形伊賀の上野に類せりとて其名を負はせ寺號を東叡山寛永寺と云ふ。蓋し比叡山の王城鎭護に誓ひ江戸城の鬼門に當れる地を相して營めるなり。天海の宿願により其の寂後、後水尾天皇の皇子守澄法親王を迎へて天海の法嗣となし輪王寺宮と稱せり。爾來世々皇子を以て輪王寺宮となし德川氏の世を終るまで繼續したりき。政治的意味の存したるは勿論なるべけれど叡山を東に遷して廢れたるを興し臺宗の權威を張らんとしたるもの天海の理想と見るべきなり。其の叡山中興の稱ある慈惠大師の像を上野に遷し祀れるもの這回の消息を傳ふるものにあらずや。

黑衣の宰相の名は權謀術數を聯想せしめて有難からざれど、譽むるも喜ばず、謗るも怒らず、高貴に對して屈する無く、卑賤に向つて賤しむる無く手に經卷を放たざりしと傳へらるゝ處に高僧の面影を偲ぶを得るなり。夢窓國師の如き、天海僧正の如き、時の天下に寵を得たるものは兎角着色して見らるゝを常とす。夢窓が南朝の天皇に歸依せられし如く、天海亦天皇の御歸依を蒙ること尠なからず、後陽成天皇より天海大僧正者佛學棟梁、天臺高祖也てふ宸翰を賜はるに至れり。寂年百三十歳とも百八歳とも傳へらる、慶安元年慈眼大師の諡號を賜はりたり。天海と並んで家康の信任を受けたる者に崇傳和尙あり、南禪寺の長老なりしが家康に知られて幕下に參し寺法その他に關して畫策する所多かりしと云ふ。

崇傳和尙

淺草寺

增上寺を以て德川の檀寺となす

東西兩本願寺

寺院の操縱

佛教墮落の因

家康江戸城に入るに及び嘗つて源氏の諸將の歸依し來れる靈場淺草寺（孝德天皇の御代に勝海上人初めて寺を建つ）を以て祈願所となし更に增上寺を再營して檀寺となせり、輪奐の美東都第一と稱せらる。當時增上寺の住職存應上人は學德高く家康の歸依亦格別なりしと云ふ。慶長七年京都東七條に東本願寺を建立し顯如上人の長子敎如上人を以て第一祖となせり。初め秀吉が西六條に本願寺を建て敎如を以て之に據ゐしも故ありて之を退け、其の弟准如上人を法嗣となせり。家康敎如の志を憐れみ、且つは其の勢力を別たん政治的意味より茲に東西兩本願寺の分立を計れるなりと云ふ。爾來兩寺の姝視日に甚しく紛爭常に絕えざりき。

德川氏は元來淨土宗の檀家なれども天下を統御する位置にありては家康の云へるが如く八宗を兼ねざるべからざる必要もありしならん。彼が諸侯を統一し、公家を制馭したる手腕は各宗寺院の上にも施され嚴重なる法規の下に幾萬の緇徒を操縱せり。斯くて寺院は整頓し、僧侶は安心して政府の保護の下に法を說く代となりたれど安心は終に怠慢となり、形式に泥んで精神を忘るゝに至るを免れざりき。耶蘇敎禁止の令は一層佛敎をして墮落せしめたり。

第二節　天主教の禁止と佛教

天主教傳來

南蠻寺

後奈良天皇の天文十八年西班牙人ザヴェールの我國に來りて布教せるもの天主教傳來の嚆矢なり。大友氏をはじめ關西の諸侯にして之を喜べるもの尠なからざりき。織田信長京都に政治を執るに當り南蠻寺を建て其の布教に保護を與へしより頓かに信者の數を加へたり。但し信長は之に歸依したるにあらず、佛徒の跋扈に對する一の手段なりし事は既に述べたる如し。既にして惟しむべき風説の傳はるあり、信長も漸く之を厭ひ制止せんとして未だ果さざるに弑虐の禍に遭へり。秀吉代りて政を執るに至り斷然之を禁じたり。しかも當時は既に西海南海より遠く仙臺に渉りて信者の數三十萬を稱し、本邦在留の宣教師二百餘人、寺院二百五十餘刹を數ふるに至り、禁止の令は或意味に於て信仰をそゝる動機となるに至りぬ。家康は更に嚴しく之を禁じ從はざるものは酷刑に處する旨を布告したり。蓋し天主教徒は布教を方便として人心を收攬し本國の命を受けたる侵略的野心を包懷せりと傳へられたればなり。彼等は果して斯かる使命を帶びたりしや否やは知らざれども唯一の天父を奉じて從來の國神、佛陀を一切退くるものなれば其の教への擴まるにつれて祖先に對する觀念、延いて國體に關する觀念に動搖を來すは爭ふべからず。爲政者の極力之を壓止せんと勗めたるもの單一なる理由にては非ざるべし。されど彼等の信仰に熱烈にして容易に絶滅し得べくもあらず、家光の時に至りて終に島原の亂を釀成せり。幕府は之を討ちて其の抵抗力の意外に強きに驚き亂鎭定後峻烈なる手段を講じて之が撲滅を計りたり。鎖國條令も之がために發布せられ、洋書の閲讀も之が爲に禁ぜられ、踏繪の制度、賞金の懸案、宗門改め等あらゆる搜査方法行はれたり。天主教の厄難は佛教徒の福音となり、政府の保護は一層厚きを加へ、其の權力は一段の强きを加へられたり。日本國民は必らず何れかの佛教宗派に屬せざるべからざる事となり、宗旨人別改帳は設けられ、僧侶は戸籍公證の特權を有し、檀家の者の生死、嫁娶、旅行の末まで勘檢して純然たる官吏僧となりぬ。斯くて僧侶は社會の上の位置も高まり、物質上の餘裕も生じ、講學、布教共に天與の便宜を得たれば、目覺ましき活躍茲におこり、理想的佛國土茲に顯出せざるべからざる樣思はるゝに事實は全く反對なりき。堂塔伽藍の設備は立派に整ひたるも僧侶の多くは次第に墮落し、佛道の眞諦は日に〳〵かくれて迷信助長の媒をなし識者の間には僧徒を厭ひて儒教神道に心を潛むる者漸く多く排佛論さへ行はれて佛道衰運の兆を示し、月日めぐりて乾坤一轉の新氣運は神道者、蘭學者等なる佛徒以外の方面より開展せられ、保護を受けたる幕府倒れて天下の僧侶は樹より落ちたる猿の如く憐みを政府に請ひて漸やく命脈を保つ有樣となりけんはそも〳〵誰の過まりぞや。

天主教徒の信仰熱烈

島原の亂

鎖國令

佛教徒の福音

家康更に天主教を嚴禁す

官吏僧

僧侶の墮落

排佛論起る

第三節　德川時代の高僧

德川時代の僧侶腐敗せりとは一般に對する管見のみ、仔細に之を觀察すれば敬慕すべき高僧元より一二にして止らず。以下順を追ひて其の著しき事蹟を紹介せん。

明忍律師

僧侶の戒律年と共に衰へ行く時に當り一身を以て律宗の挽回を計れる人にあり。京都の人、少内記中原康雄の子なり。十六歳にして少外記、右少史の兩職に拔擢せられしと云へば其の秀才の程も知らるゝなり。一日感ずる所なり、佛法を學んで出離を期せんと志し、折節に高雄山に登りて

佛道を尋ね、二十一歳の時意を決して出家となる。學解漸やく進んで思ふ樣、佛道修行の根本は戒律にあり、而かも律風久しく衰へたるは慨すべし、我先づ之を興すを以て願となさんと。夫れより南都に遊び慧雲、友尊等の道友と共に大乘三聚通受の法によりて自誓受戒す、時に慶長七年、明忍二十七歳の時なりき。斯くて槇尾山の廢寺の址に堂宇を建てゝ律部を講じたり。四方の學侶の從ひ學ぶもの次第に多きを加へ忽ちにして一大道場を見るに至りぬ。三十一歳にして支那に學ばんと志し、對馬まで航したれど國禁嚴にして許されず、偶々病に罹りて終に癒えず、慶長十五年三十五歳にして寂を取りぬ。律師は戒律に重きを置くと同時に又喜んで往生要集を閲したりと云ふ。臨終筆を採り書して曰く、我病苦は須臾の事なり、彼の淸凉雲の中に諸の聖衆と相交らば豈に大快樂にあらずや。八功德水、七寶蓮池是我が所歸なり、と。明忍の後、良永、快圓、慈忍を經て淨嚴に至り律風大いに盛んとなり、菩薩戒を受けしもの一千餘人、三歸戒を受けしもの六十萬人に及びしと云ふ。其の後、正法律の始祖と仰がるゝ慈雲尊者おこるに及んで更に一段の光を添へたり。

自誓受戒

律風擧揚

正法律

正法律本山

慈雲尊者

諱は飲光、百不知童子と號す。俗姓は上月氏、攝津大阪の人なり。母が佛道歸依者なりし緣によりて出家となる。初め之を悅ばざりしが次第に佛道甚深の理を解し勵精寢食を忘るゝに至る。顯密の奧旨より傍ら經史の學を修めしが一日悟る所あり、曰く、法に尊とぶ所のものは心なり。心倘し明かならずんば萬法も徒設なるべし、と。乃ち一切の緣を絕ちて一室に兀座すること二年、更に信州の大梅禪師の道譽を聞きて之に參する九十日、斯くて銀鍊修行の功空しからず、忽ち心地朗然として豁け佛道の眞諦に觸るゝを得たり。これより尊者の間に慕ひ來る者甚だ多く寛政十年河內高貴寺に遷りて築壇結界するや幕府は玆を以て正法律の本山とせり。女化元年八十七歳にして寂す。嘗つて後桃園天皇の勅請によりて十善法を說けるを、弟子錄して十善法語と名づけ天覽に供す、一代の蘊蓄を傾け盡せるものにて尊者は常に、我を知る者は十善法語によらん、而かも我を罪する者亦十善法語に依らんと語られしとかや。尊者は實に自ら律する嚴として秋霜の如かりしも其の人に接するや春風の駘蕩たるが如きものあり。人を導くには恂々として懇切を極めしも邪蓑を斥くるに至りては辭氣壯烈聞く者をして慴伏せしめたりと云ふ。其の子弟に敎へられし言に曰く

大丈夫兒、出家して道に入る、須らく佛智見を具し、佛戒を持し、佛衣を服し、佛行を行ひ、佛位に躋るべし、切に末世人師の行ふ所に倣ふ勿れ。須らく純粹の醍醐を飲む可し、雜水腐乳を歠る勿れ。

十善法語

と、蓋し近世稀に見る高德なりき。明治の偉僧雲照律師は實に尊者に從ひて得度したるなりき。

日蓮宗派の僧侶

日蓮宗派の僧侶には强硬の說を持して他に下らず、種々なる誤解の下に迫害を受くるもの多かりしが慶長十三年には常樂院日經上人の耳鼻殺ぎてふ慘刑に處せられたる記錄あり。

耳鼻殺ぎの慘刑

日經上人

は上總の人なり。廿三歳の時奧州山崎にて淨土宗の各僧を論破したるを始めとし、諸方を遊化して折伏の鋒先、鋭どかりしが尾州熱田にて淨土宗との法論は終に幕府の裁斷を仰ぐ事となりぬ。偶々對決の前夜不意に日經を襲ひて重傷を負はしめたる者あり、辯論不能なればとて日延べを願ひしも許されず、其の日の對論は片手落の所決にて日經の負けとなし、强ひて敗狀を書かしめんとするも服せざりしかば公儀に反抗する僧侶の見せしめにとて京都六條河原にて師弟六人は耳を殺ぎ鼻を削られ、其の一人は卽死するに至れり。上人は斯かる慘刑に遭ひて爾來廣き天地に身を容るゝ地なき迄の迫害を蒙りしも不惜身命の精神は凜として一層の生氣を

加へ舌根の續く限り法輪を轉じて止まず、加賀に移りて宰相前田利長主從の歸依を受け寺を建つる七ヶ所、信者を得る幾千と稱するに至る。元和六年七十歲を以て越中に寂せり。耳無く鼻無き異形の姿にて專制政治の頭目に睨まれながら斯くまで奮鬪の跡を遺せるもの唯これ信念の働きなりけり。

不受不施派の宗派斷絕

日奧上人の不受不施を唱へて後池上本門寺の日樹上人等又盛んに其の主義を主張し幕府の機嫌に觸れて流謫せられ、不受不施派は嚴禁せらるゝ事となりしも猶日講上人等其の主義を改めざりしかば之亦日向に配流せられたり。爾來明治に至る二百餘年間不受不施の宗派斷絕せり。

やゝもすれば爲政者の忌諱に觸れ其の立脚地さへ危うからんとするに當りよく時代と推移して日蓮宗門の勢譽を張りたるは日重、日乾、日遠の三上人なりしと云ふ。世に日蓮宗中興の三師と稱す。

日重上人

は京都の人なり。其の未だ雛僧たりし時師に從ひて檀家に赴き、酒を受けて之を床下に捨てたり。何故に捨つべきものを受けたりやと問へば、捨てたるに非ず法界に施せるなりと答へ施主をして二の句を續かしめざりしと云ふ。此の奇才は卽ち專制なる幕府の下にありて能く强硬なる宗門を輝かしたる所以なるべし。博學鴻才にして廣く各宗の奧祕を極め神儒の二道をさへ兼ねたりき。本滿寺の住職たりし時、日々道俗を集めて講席を張り六ヶ年にして三大部を講了し、後求法院に招がれて三大部を講ずるに七年を要したるを以て人の懶を加へたるを嘆じたりと云ふ。

日乾上人

は日重の門より出でたり。嘗つて後陽成天皇の勅問に應じ宗門大意を著はして奉り、中和門院の請を受けて法譚を行ひ紫方袍を受く。慶長十四年師命を奉じて身延山の住職となり、後紀州侯の母にて篤信の名高き養珠院お萬の方に招がれ蓮永寺の祖となれり。

日遠上人

亦日重の門に出づ。六歲にして出家し、三大部を初めとし一切の敎學の底をつくして當代各宗の推重する所となれり。日經上人の宗論の際忌憚なく所見を陳して家康の怒りを買ひ將に死刑に處せられんとしたりしも上人は平然として旦暮に首の座を待つ有樣なりしかば家康も其の志操に感じ、且つは御萬の方の身を以て殉せんとまでの切なる心に動かされて終に之を許したり。爾來幕府の信任も厚く、お萬の方の歸依は又格別にして身延山、池上其の他の寺院に歷任し、又大野の隱所にありて講演、述作等に從事し日宗門の權威を添へたるもの甚多かりしと云ふ。

由來日宗の僧侶は信仰熱烈にして難を忍び苦に堪ふるに於て勝れり。不撓不屈さながら斷崖に聳立てる老松の風雪を凌ぎて節操に誇る趣きに於て日宗高僧の俤を見る。されど嚴に過ぎて寬容の度に缺くるあるが如く、方に過ぎて圓滿の德薄きが如く、熱きに過ぎて溫情を味はゝれざるが如き感じを人に與ふるものあり。

唯一人

深草の元政上人

あり。日宗門の學者として、又その篤信者として古今に卓越せる人なれども日宗の僧侶とは思はれぬまでに其の臭味を脫したり。眞言、禪等の僧侶も來りて敎を受け、念佛、律宗の人も來りて門を叩き、歌人、詩人、儒者、國學者悉く來り遊んで其の埒を撤去せり。破佛家の聞えある熊澤蕃山も上人の德に服して私淑したり

と云ふ。嘗つて小倉少將と共に草山を訪ねて蓄山は琵琶を鼓し、少將は琴を彈じ、上人は和歌を誦して懷を遣れりてふ逸話あり。

元政上人の三大願

上人は京都の人、石井元好の季子なり。幼字を俊平と云ふ。十三歲にして彥根の城主井伊直孝の近侍となる。生來甚だ讀書を好み、和漢の書を涉獵して廣く諸家の說に通じたり。十九歲にして病を得、母と共に泉州和氣に詣で妙泉寺なる日蓮上人の像を拜し感ずる所ありて三つの願を立てたり。一に曰く、必ず出家を遂げん、二に曰く、父母の壽長くして孝養を致さん、三に曰く、天台の三大部を閱了せん。斯くて二十六歲の時致仕し京都の妙顯寺なる日豐の門に投じて第一の願を果したり。爾來三大部を閱して晝夜の別ちなく苟くも疑ふあれば僧俗を問はず之を糺し信解したる所は悉く之を身に行ぜんとせり。鶉鳴くなる深草の地に庵結びて勤修の所と定めしは上人三十三歲の秋よりなりけり。韜みて愈顯はれ、隱れて益々知らるゝものは誠の智德なり。上人の道譽を慕ひて敎を受けんとするもの日に〻多きを加へたり。權勢を以て召す者あれば斷じて應ずる無かりしも至心に來り訪ふ者には底を盡して與へたり。既に三大誓願にもある如く父母に孝養を致さんとするは上人畢生の願ひなりき。而して父は八十七歲にして上人三十六歲の冬世を去れり。

元政上人の至孝

父母憂へ無く老いて家に在り、幾回か衣鉢煙霞を出づ、
壺中の天地風光別なり、到處相携へて花を見る。

と詠じ

一鉢緣に墜ち却りて方あり、雙親在る所是家鄉、
歸來自ら作す嬰兒の態、喜色溫如として笑ひ堂に滿つ。

身延道の記

と樂しみしも昨日の夢となりしかば殘れる母の望みに任せ七十九歲の老軀を扶けて鄙の長途幾百里の旅情をつくし、身延の祖堂を拜したりき。赤き心を文に寫して身延道の記と名づけしは元和上皇の乙夜の覽に供へられ深く叡感に預かりしと云ふ。上人は極めて多病の人なりしかば常に親に先立たん罪を恐れありしが、至誠は佛天にも通じてか八十七歲にしてみまかれる母を送りて翌寛文八年二月四十六歲にて寂を取りぬ。斯くて三大誓願は盡く果し了ふるを得たり。寂に臨みて

鷲の山常に澄むてふ峰の月
かりに顯はれかりに隱れて

三本竹の墓標

寛容の法華僧

てふ辭世を記し、且つ遺言して曰く、我墓には石を建つるに及ばず、竹兩三竿を植ゑて印となさば足りなんと、三本竹の墓の名は無標の墓碑として反りて世に顯はれたり。日宗の僧侶にて阿彌陀佛に一禮したりとて宗門の大問題としたる程の偏狹なる當時の法華僧の間より、上人の如き寛容の高德を出したるは確かに一の異彩なり。

道を學んで人を度せんとす。驕りて自ら要肆に迷ふ。心に差別の相を存して口に圓融の理を說く。

とは上人の時弊を歎じて發せられたる言葉なり。上人は先づ戒行を修し、智慧を明かにし、正念決定して靈山淨土にまのあたり釋迦牟尼如來を拜し、權實の二智究竟了達し、普現色身を得て廣く衆生を度せんと願はれたり。些か法を學んで直ちに人を導かん等云ふ淺薄なる行爲は上人の最も嫌はれし處なり。されば上人の一生は專ら自行にして化他は其の目的にてあらざりけん。然かも上人の徹底せる自行は自ら他を薰化して永く後世に及ぶ。其の執られし主義の日宗に負けりや否やは吾人の知らざる所なれども、高祖の遺文の表面にの

み泥み、唯他宗を破折し我宗門に歸させだにせば一切の能事了れりとするもの多かりし樣思はるゝ當時にありて、生涯を成佛の行程として身を修められ、日蓮宗は折伏のみの一門に限れるにあらざる事を示されたる上人はまこと達識の高僧と思はるゝなり。上人の姉は彦根藩主井伊直澄の母なり。直澄屢禮を厚くして上人を迎へたれども顯門勢家に出入するは佛制を犯すなりとて終に應ぜず、唯母の之に趣くは其の心に任せたり。

文人としての元政

しかも母は顯榮の位置にある孫の奉養よりも、貧しき孝子の至情を喜びて生涯を之に托したり。上人は又文人として優に古今を獨歩する人なりき。草山集以下許多の述作あり、之を讀めば文身句義悉く金石絲竹の聲を發して琅々然たり。しかも上人は徒らに文筆の技巧を弄するを以て耻づべきものゝ第一となし、自ら一家の見を有したりき。

元政の壁書

世に深草元政の壁書と稱するものあり。讀み見れば一種洒脫の風格、決して上人の面目にあらず。同名異人の戯作なりとは識者の間の定論なれど、世間猶上人の作として傳ふるもの多く案外名高きものにして面白き節もあれば左に錄せん。

不幸に染むる墨のたもとにはあらで髮結ふがむづかしさに頭を剃り、竹のたる木、茅の軒、輕う身を爰に取り置き、浮世をのぞけば東に西に往きて歸る人、皆善惡の辻を股にかけて無性に金慾しいと欲面ひつぱる。眼には木幡の花の哀れも知らず、深草の鶉も燒いてしてやりたいと耳からも鼻からも算盤をはぢきて減多矢鱈に儲けたがる、後に何にする事ぞや。其の靜かならぬ事は人倫のみにあらず、尾上を出る雲は雨催さんとして忙はしう走るけしき、岡邊の牡鹿は妻戀ふ思ひを聲の限りに、はこびつくす。省みれば此身ほど暇に樂なものはあらず。慧心の作の無量佛一體、これ必ず念佛の餞にあらず、先祖より持傳へし道具なれば是非なく御宿申すばかりなり。未來上品上生の蓮台に坐して樂しみたいと思ふ欲無ければ地獄に落つる筈も無し。死ぬるまで生きて居るであらうと思へば春秋の暮るゝをも二文とも存ぜず。籬にこぼれ種の朝顏、ゆがまうがすぢらうが勝手次第なり、あんな物と思へば日蔭に凋むをけしからず驚かず。薄も穗に出てびらりしやらりとめざるゝは、いらぬお世話の小夜時雨、ふらうと降るまいと我身一人の苦にもならず。睡る筈の目なれば晝も蚊帳に枕し、歩くための足なれば夜一夜あるけど盜みせぬからは人に不審も打たれず。膝容るゝ二枚敷きに糎太瓶も飯つきも持たず、萬事を一の土釜に埒をあけて雜煮喰はぬ者には聞かせまいとも云はぬ鶯を樂しみ、夜着持たぬ家とて依估最負せずに窓もる月に打向ひ、覺えた事無ければ忘れた事もなし　年も數へた事無ければ幾つやら知らず。

深草の元政房は死なれけり

我身ながらも哀れなりけり。

東海寺

德川時代の禪僧にして最も廣く人に知らるゝは

澤庵禪師

なるべし。禪師名は宗彭、但馬國出石の人なり。十歳にして淨土宗の寺院に投じたりしが十五歳にして禪門に歸したり。慶長十二年三十五歳にして紫野大德寺の住職となり、皇室の御歸依も篤かりしが偶々幕府の忌諱に觸れ、元和三年出羽に謫せられ四年を經て赦されたり。後德川家光禪師の德を慕ひて之を招ぎ武州品川に萬松山東海寺を建てゝ之が開山となし、折ふしに禪要を尋ねて精神的糧を求めたりき　禪師性磊落にして虛淡を樂しみ、屢々破衣草鞋に一介の編笠を被り、悠々自適の頭陀僧となり、四方を巡錫して敎化を布き、又梢門

澤庵禪師と柳生父子

閥族の間に出入して奇言異行、冥々の間に爲政者の專横奢侈を誡しめたる事尠なからず。柳生但馬守親子が禪師に歸依したるは有名なるものにて彼の不動智神妙錄と名づくる書は悟道を說きて武道の奥祕を示したるものなりと云ふ。天下の大劍士が禪僧より劍道の奥祕を授かりしとは面白きことならずや。嘗つて但馬の長男重兵衞三吉禪師のもとに遊べる折、禪師卒然問うて曰く、今二人の敵ありて一時に切り懸らば如何せらるゝぞ、重兵衞言下に答へて曰く、左右に切りて捨てんのみ。然らば四人一時に來らば如何、前後左右に切り捨てん。八人ならば、八方に切り拂はん。十六人ならば、縱横無盡に切り靡けん。三十二人とならば如何する、斯かる時には斬りて〳〵斬りまくり、叶はぬ時には死骸に跨がり腹切らんのみ。禪師笑つて御身は天下の名人と稱すれど畢竟三四十人の勇に過ぎず。悟道の境に達したる者は千萬人と雖も物の數とせず。術は末なり、心法は本なり、御身先づ其の本を鍛へられよと云ふ。重兵術曰く、論は無益なり、先づ術を比べんと木　持ちて禪師に向ふ。禪師拂子を採りて身構へしに寸分の隙だに無し。暫くありて禪師一喝すれば十兵衞木劍取り落して平伏し是より益々禪要に心を用ひたりと云ふ。こは坊間の傳說にて事實の眞僞は知らざれども劍道の極意と、禪の極意と一致すべき事を述べたる假設的逸話と見るも面白き心地せらるゝなり。正保二年七十三歲にして寂す。死に澁みて遺偈を留めず、唯夢の一字を書したるのみ。遺命によりて墓碑を建てず、土を掘りかけて丸石を印に載せ置きぬ。

德川時代唯一の開宗

後光明天皇の承應三年

隱元禪師

支那より渡來して黃檗禪を傳へたり。蓋し足利德川兩時代を通じて唯一の開宗なり。但し本宗は臨濟禪の一派に過ぎざれど一は日本に渡りて久しく、一は支那にありて時代を經たれば儀例その他に著色の異なりたるものあるべきも宗としての權威を添へたるものは全く隱元禪師の人格に歸せざるべからず。禪師は支那福清の人なり。幼にして父遠方の客となり歸り來らざるを悲しみ、二十一歲の時母に乞ひて父を尋ねんと的も無き萬里の空に旅立ちぬ。二年の月日送りて終に何等の手懸りも無し。茲に人力の及ばぬを思ひ南海の普陀山に赴きて觀音菩薩に祈願を籠めたり。大自然の莊嚴せる普陀山上の秀麗の氣は忽然として禪師の靈性と感應し、嘗つて澎氣滿ちたる秋の空に燦爛たる星斗を眺めて宇宙の靈力に觸れたりし禪師の信仰心は再び盛んに燃え興り、大菩提心を起して出家得道の決心となりぬ。夫れより歸りて母に仕へ、母死して追善の供養を黃檗山に行ひ、之を緣として同山の鑑源和尙に就き二十九歲にして剃髮染衣の人となる。初め禪師は黃檗山の塵界に近きを厭ひ普陀山に上らん志なりしも

空谷の跫音

人の道を學ぶに何ぞ必ずしも地を擇ばん、因緣の在る所卽ち道場なり、人俗なりとも心俗ならずんば可ならずや。

と、鑑源に諭されて之に從へりと云ふ。爾來禪師の修行は非常なるものありき。嘗つて佛前に默願すらく、若し梵行を精修して法門を興隆するに非ずんば生きながら地獄に墮んと。熱烈なる勤行は終に大事を證悟し不立文字の妙諦に徹底して黃檗山の法衣を承け繼けり。日本に渡りしは禪師六十三歲の折なりき。

澤庵禪師逝きて十年、白隱禪師の生に先だつ三十年、宗敎界は正に午睡の最中に當り空谷の跫音は長崎興福寺の山門に響けり。

菩提路一條筆の如くに直く、解脫門兩扉打開す、黃檗の琦上坐、這裡に到つて如何か趣向せん、脚跟を

看破すれば歩々是れ如來。

自行を尊とぶ

鬚髮蓬々として立てる奮國の高僧隱元は生ける如來として數多の僧俗に拜せられたり。妙心寺なる龍溪禪師は支那に渡らんと志して果さず、今しも此の福音に接し遠く志を致して隱元を招ぐこと再三、禪師卽ち

我は是れ支那の老比丘、緣に隨つて應化し東遊に赴く、
相知る唯江頭の月有り、一夜淸光客舟に伴ふ。

と詠じて之に應じたり。斯くて攝津富田の普門寺に留まる數年、幾多の僧俗を導けり。常に曰く、

黃檗山萬福寺

說く事一丈せんよりは寧ろ行ずること一尺なれ。說く事一尺せんよりは寧ろ行ずること一寸なれ。說きて行はずんば何の益あらん。一度人身を失へば萬劫にも復り難し、之を愼しめ。

と禪師は之を實踐して導かれたり、行はざるは之を口にせざりき。萬治元年江戸に來りて將軍家綱に謁す。翌年山城宇治の地を賜はりて寺院開創を許され、寛文元年宏壯なる伽藍は建立せられたり、黃檗山萬福寺と稱するもの之なり。後水尾上皇亦深く禪師に歸依せられたり。嘗つて勅問に答へたる一節に曰く、

單傳直指の道、別に言說無し、唯だ要は自己身心及び一切の塵勞を放下して直下に本來の面目を返照し、無位の眞人を覷破する時は外物の蒙る所を被らず、鏡の鏡に對するが如く了々分明なり。原と一物の染汚無く、亦點塵の留礙無し。圓陀々、活潑々、赤洒々、轉轆々、名も名づくべからず、識も焉んぞ識んん。直に自徹自悟、自了を得て後己まん。既に徹悟了然たるときは生死去來、自由自在、富貴に處して富貴のために牢籠せられず、人天に處して人天の爲に留礙せられず。謂ふ可し、萬象の主にして而も四生の父となる、と。天下を以て一家となし萬類を以て一子となす。往を繼ぎ來を開いて民福を騈臻す、聖種萬代に

彌隆し、法門千秋に砥柱たり。

延寶元年四月八十二歲にして寂せり。

木庵の悟道

禪師の後を慕ひて木庵、卽非の二高足亦渡來せり。木庵、生死の難關を透過せんとして苦慮すること年あり。一日敎に從つて話頭を案じ本有の光明を見ずんば起たじと愛悟し正身端座するもの十三晝夜、一日二日は昏々屯々たりしが第三日に至つて四肢五臟に輕澄を覺え、同時に話頭身心混じて一團となり放捨すれども去らず、斯くて第十三夜に至り、煌々たる燈火の影を踏んで行くと覺えて忽ら廓然悟境に達したりと云ふ。卽非

卽非の大悟

禪師支那黃檗山にありて隱元の下に精修三年、嘗つて橫臥する事なかりき。或夜禪定の座を起たんとして物につまづき倒るゝ刹那に大疑團を氷解したることあり、又山火、寺を圍める折、過つて火坑に墮ち漸くにして救ひ出されしも人事全く不省となりしが人の呼び覺すに愕然飛び起きたる瞬間に豁然大悟したり。隱元之を見て曰く、大死一番して大活現成せりと。木庵は師の後を承けて萬福寺を繼ぎ、卽非は師に先だち五十六歲を一期として寂を取りぬ。木庵の門下に鐵牛禪師あり、機鋒峻峭、伊達綱村の贈を奪ひて仙臺に黃檗禪の敎田を拓けり。隱元禪師の門より

淀川の下り船にて三人の龍象大志を談り合ふ

鐵眼禪師

鐵眼は肥後の人、寛永七年に生る。十三歲にして出家し、十七歲にして豐前に到り同志と談らひて京師に學びしが偶々隱元禪師長崎に渡れりと聞き急遽馳せて之に謁し、爾來銳意禪要を學ぶ。隱元東上してより木庵に師事して研鑽怠らざりき。傳へ云ふ、寛文三年秋の頃、鐵眼所用ありて淀川を下る船中にて揣らずも加賀大乘寺なる卍山和尙と奈良東大寺なる公慶和尙とに邂逅せり。談進

大藏經開版の大願

みて卍山曰く、佛子たるもの必ず發願無かるべからず、我等互に其の所願を語りて相勵みなんと。茲に於て鐵眼先づ云ふ、我が大願は本邦に於ける大藏經の開板なり。我國に佛教渡りてより千幾百年、教へ全國に擴まりて寺塔の造營、高僧の輩出等些か他國に遜色無し。而して大藏經の版木を有せざるは遺憾の極みなり。我誓つて生涯を期し之を果すべし。公慶曰く、我が東大寺は聖武天皇の勅願寺にして治承四年に平重衡の兵火に罹りしを重源和尚勅命を奉じて再興し後三百七十餘年にして永祿十年松永久秀の兵燹に罹り今に建立の事も無く草深き中に本尊の露出を拜するは忍びざる所なり。我は此の大佛殿造營を以て生涯の本願とせん。卍山曰く、我は曹洞宗内に於ける法脈紊亂の弊を矯正せんと欲す。元來我宗は道元禪師の祖訓により一師印證の制度なりしを今や全く亂れて任意の數師に印證を受け、寺院の讓與を自由にせんとす。斯の如きは教への權威に關すること尠なからず。我が生涯の間に必らず復古の策を講ぜんと欲すと。未だ學途に遊べる青年僧侶の身としては何れも容易ならざる願なりき。斯くて鐵眼は翌年筑前明光寺に於て法華經講演の際所志を發表してより至る所に勸誘を試みたり。其の間に於ける苦心經營の慘憺は次の述懷にて想像せらる。

東大寺再興の大願

法脈紊亂矯正の大願

欲弘藏海泊西東、幾度迎春看紫紅、世上不知無靈福、
朝來頻祝萬年躬、千金任費遂塵外、毫末何曾施法中、
鑿髮喫辛如雪白、鑒文何日滿其功、

陽氣の發する處、金石も銷すべし。觀音寺の妙宇道人先づ其の擧を贊して千金の費を捧げたり。熊本侯亦年々黃金一千錠を其の資に投ぜんことを約したり。隱元禪師は特に持する處の藏本を與へ且つ藏版を蓄ふる地を寄進して寶藏院を建てしめたり。(此の間に鐵眼は慈雲山瑞龍寺の住職となれり)かくて愈々刻藏の事業は創められたり。梓人の技を助け、志士の財を寄するもの益々加はり延寶六年には六千七百七十一卷の大藏經開板全く成就せられたり。茲に於て表を上り太上皇に獻じて嘉賞を受け、更に幕府に獻納せんと再び工を起す。時偶々畿内地方大饑饉あり、流民途に滿ち慘狀の甚しきものあり。鐵眼乃ち多年の苦心にて集まれる刻藏の費一切を擧げて貧民救助に施し、爲めに餓死を免れし者萬を以て數ふるに至り時人鐵眼を稱して救世の大士と唱へたり。德川家光が天下の富を擁し、天海に屬して猶遂ぐる能はざりし藏經開版の事業を、一人の念力を以て成功せしだにあるを、悲心の前には一切の努力を犧牲に供して顧みざりしもの是ぞ誠の菩薩行とや稱すべき。鐵眼の死の世に傳へらるゝや葬に會する者十餘萬、號泣の聲山野に滿ちたりしと云ふ。

大藏經の開版成就

救世の大士

公慶上人

橫臥せること七年

は丹後宮津の人なり。十三歲の時東大寺の小僧となる。鐵眼と其の所願を談りしは十七歲の折なりけり。されど此の大願を果す爲には先づ人を服せしむるだけの德器を養成せざるべからざる事に心附きたり。爾來これを口外せずして學問修行に身を委ぬるもの二十年、内外の信用漸く熟するに及び先づ東大寺内の者に訴へて其の同意を得、更に進んで江戸幕府に向つて東大寺再建の許可を乞へり。初め容易に許されざりしも上人の熱誠は終に幕議を動かして貞享元年公許せられたり。上人踊躍して國に歸り父母に向つて次第を告ぐ、父母悅んで卒先、齡に應ずる金額を寄進せり。時に其父八十三歲にして母は六十九歲なりき。爾來上人は錫を飛ばして奈良の市中を始め大阪より京都に上り順を追ひて勸化し六十六個國に鞋跡を印せざる所無く、其の間七ヶ年、嘗つて一度も橫臥したる事無かりしと云ふ。元祿五年佛像の修繕了りて開眼供養會を行ひしに會する高僧一萬有餘に及びしとかや。大佛殿の建立に當つては幕府も之を助け、諸侯に對して百石は百疋、千

東大寺再建成就

石は千疋の割にて三年間寄附すべき旨を命じ毎日三千八百餘人の工人をして晝夜に精勵せしめたり。然かも其の落成を見たるは寶永五年六月にして大佛修繕後更に十六ヶ年を經たり。工事の大を想像すべし。上人は不幸にして其の落成に先だつ三年卽ち寶永二年に病沒したるも大志は終に成し遂げたり。十七歳の青年が胸に畫きし空中樓閣も四十餘年後には事實となりて顯はれたり。是亦信仰の力のみ。

卍山和尙

の淀の渡りに大志を語りしは二十二歳の折なりしと云ふ。因襲の久しかりし宗内の情弊を改革せんとするは是亦難中の難事なりき。之を說くも贊する人尠なく、贊する人あるも共に難關に當らんとする者なし。たまたま友を得たりと思へば中道にして之を失ひ、歳月は匆々として何時しか六十五歳の老境に達したり。斯くては大願終に空しからんと同志の友梅峰禪師と共に江戸に出でゝ洞宗僧統に請願したるも容れられざりしかば更に進んで寺社奉行に建言せり。然かも舊慣の二字に遮ぎられて却下せられたり。僧統聽かず、奉行許さず、齡は七十に近づかんとす。日傾きて亡羊の歎に沈むとは之をや云ふらん。

法華亂の矯正に志を達す

坐看宗弊不能禁、　一起東來感轉深、　徒步舍車非貴趾、
徐行曳杖爲傷心、　偶忘大地無知己、　强向虛空求賞音、
固是裸蟲三百長、　誰扶此道拯陸沈、

とは當時和尙の感懷なりき。而して不撓の精神には神佛の冥護も加はりけん、江戸瑠璃光寺牛甫、越中瑞龍寺央山等の助け起り終に元祿十六年に至り流弊嚴禁の令發せられて最後の凱歌を奏するを得たりき。斯くて三人の誓願は悉く果され佛門の美談として永く後世の龜鑑となる。

成田不動尊の靈驗

一行の文句なほ覺ゆる能はざりし闇愚の身にて信心の功德により忽ち佛智開發して一代の學德を稱せられし人に

祐天僧正

あり。寛永十九年奥州岩城に生る。十二歳の時增上寺なる檀通上人の法弟となりしが記憶の惡しきこと甚だしく如何に勉め學ぶも更に覺ゆることなし。おさな心にも痛く之を恥ぢ歎き終に悲觀して不忍池中に身を投ずるに至る。學友善敎跡を尋ねて之を救ひ、死なん心を以て神佛に祈り見よと敎ふ。祐天乃ち成田不動尊の靈驗あるを聞き茲に斷食參籠して一心に佛智を授からんことを祈る。祈願空しからず夢中に不動尊出顯し給ひ「汝惡業によりて暗愚の身を受けたれど至心に祈る特勝さに智惠を授け得させん、先づ汝の凡血を除かざるべからず、能く之を呑みてんや」と明晃々たる靈劍をさしつく。祐天元より死を期したれば更に臆せずして口を開く、明王乃ち一突き指しゐぐると覺えて夢醒めぬ。爾來頭腦明晰となりて生を替へたる如く、數多の經文聽くに從つて諳んじ、終身忘るゝ無きに至れりと云ふ。斯くて次第に昇進し正德元年には增上寺の住職となりて大僧正に任ぜられ綱吉、家宣等の歸依を受け、化導極めて盛んにして種々なる奇蹟靈談を傳へられ八十二歳にして寂を取れり。遺骨を納めたる目黑善久院は祐天寺と改號せられたりき。

上に述べたる外にも淨土宗に呑龍、靈巖、貞極あり。眞宗に月舟、梅峰あり。天台に慧澄、禪宗に嶺南、愚堂、一絲、古月等、擧げ來らば小冊子の盡すべきにあらず。最後に德川時代の高僧中最も後世に感化を及ぼしたる白隱禪師を紹介して此の節を了へんと欲す。

白隱禪師

墮獄の罪より免るべき道を母に求む

天神へ祈願を籠む

演戲を見て感慎す

普門品受持の望

出家の際に於ける大決心

は駿河の人なり　貞享二年十二月駿東郡原驛に生る。俗姓は杉山氏、幼名を岩次郎と云ふ。幼より聰明、四歳にして小夜の中山の村歌三百餘言を諳誦して人を驚かしたり。七歳の時、行者休心房と稱するもの之を相して曰く、此兒奇骨あり、必らず世の福田たらんと。十一歳の時母に隨つて日嚴に人の摩訶止觀を講ずるを聞く。地獄の相を說かるゝに及んで通身戰慄し、我平常殺生を好み生物を苦しめて快とせり、永劫の苦輪免るべからず、如何にしてまし、と、旦暮心を苦しめて止まず、終に堪へずして避くべき道を母に求む。母諭して曰く、西念寺に祀る所の天滿天神は威德著く一切の苦報を救ひ給ふと聞く、誠を籠めて茲に祈誓せよと。禪師大いに悅び爾來毎朝水に浴して天神に祈る。一日香を天神畫像の前に點し再拜して曰く、我願空しからずんば香煙端直にして沖天の象を示し給へと。默禱之を久しうして眼を開けば一道の香煙直ちに天に昇るを見る。心うれしきものから猶魔障の加はらんを恐れたり。十二歳の時日親上人を脚色せる演戲を見たり。上人官廳に召されて鞫問せらるゝに當り、法華の行者は火に入るも燒けず、水に入るも溺れずと云ふもの眞なりやと問はるゝに答へて寸分の僞りなしと云ふ。官乃ち赤熱したる鐵鎚を以て之を被らしむるに妙經の威力忽ち顯はれ熱鎚冷却して泰然微笑せりてふ事跡なりき。禪師之を見て羨望に堪へず、歸り來りて至心に普門品を受持すること數日、試みに燒きたる火箸を取りて股上に觸れしに皮膚焦爛して痛苦前日に異ならず。茲に於て大いに望みを失ひ、出家解脫の海界にあらずんば叶ふまじと父母に志を告げて出家を乞ふ。父母もとより之を許さゞりしが因緣の催す處は如何ともすべからず、禪師十五歳の時終に出家を許されたり。乃ち單嶺和尙に就きて得度し名を慧鶴と名づく。禪師此時誓つて曰く、火も燒く事能はず、水も漂はす事能はざる底の力を獲ずんば設ひ死すとも休せずと、日夜勵精寢食を忘るゝに至る。十六歳の時法華經を讀む。法華の一

法華經を讀みて失望す

巖頭和尙末期の有樣を讀みて落膽の極に達す

進退谷まる

禪門歸入の決心

瞑目し名所を過ぐ求道の熱心

遠寺の鐘聲に心地豁然

巖頭和尙鐘在なり

代經王なるは豫ねて知る所、佛道の眞諦は茲にこそと畢生の希望をもちて閱讀したるに、唯有一乘、諸法、寂滅等の文を除けば餘は皆因緣譬喩の說のみ。卷を掩ひて歎じて曰く、此の經若し功德あらば諸子、百家、誇曲、妓典の類も亦功德あらんと、望みを失ふこと一方ならず。十九歳の時、因に巖頭和尙末期賊の爲めに首を斬られ、一聲の大叫數里外に聞ゆ、とあるを見、最早落膽の極に達せり。祖門の鸞鳳にして猶現在の害すら轉ずる能はずとせば我輩いかにして苦報を免れ得ん。嗟乎、佛法は虛誕のみ信ずるに足らず。僧たらんか、俗たらんか。我れ進むに期する無く、退くに羞るありと、經像を見るに厭惡の情さへ起るに至りぬ。二十歳の時濃州瑞雲寺なる馬翁和尙に從ふ。一日曝書に際し、內外の典籍積んで堆をなすを見、心竊かに祈りて曰く、護法の善神、われに因緣ある一書を授け給へと、瞑目して群書を探り一書を把して之を見るに雲棲の禪關策進なり。茲に禪門を以て我入る道と決定し、策進を座右の銘となし專ら悟道の工夫をなせり。翌年瑞雲寺を辭して京都より西海に向ひ名僧と聞けば必らず之を歷問す。道友之に山水の觀賞を勸むる者あれば「我が大事未だ成らず、何の暇ありてか山水を見ん」と退ぞけて名所等云ふ所をば瞑目して過ぐるを常としたりと云ふ、求道に熱心なりし態度敬服に餘りあり。嘗つて溪水の流るゝを見て所感を述べし事あり。

山下有流水、滾々無止時、禪心若如是、見性豈其遲。

禪師は實に流水の滾々として晝夜を捨てざる勤勉を學びたり。廿四歳の時越後高田の性徹和尙の講席に參したり。閑あれば必らず寺側の墓場に入りて靜座觀念せり。一夜更闌け遠寺の鐘聲殷々として響くを聞き、豁然大悟する所あり、覺えず叫んで曰く、「巖頭和尙、萬福現在」と。嘗つて殆んど絕望の境に彷徨したりし禪師は茲に洋々たる希望の海を見出したり。闇を破りてさし出づる明星の光に接したり。禪師の喜びや如何な

痛快なる大悟

りけん。思へらく、關山以來三百年、余が如く痛快に了徹したるもの非ざるべしと、乃ち集まれる多くの雲水と問答するに一人として禪師の機鋒に當る者無し。時に宗格と呼べる雲水、禪師に向つて云ふ樣、公の氣宇超絕世を蓋ふの慨あるに服す、但し悟道に至りては如何あらんか、試みに我師正受老人に參し見られよ、必らず得る所あらん。老人は愚堂和尙の法孫にして無難禪師の法嗣なり。信州飯山の正受庵にあり、と。禪師乃ち走りて正受庵に至り老人に參す。先づ所證の一偈を呈するや、老人左手に之を握りて曰く、這は是れ汝の學び得たる所なりと、更に右の手を延ばして曰く、何物か是れ汝が悟れる所ぞ。禪師答へて曰く、若し眞個見得底の師に呈すべきあらば須らく吐却すべしと、嘔吐の狀をなす。老人重ねて問うて曰く、汝趙州の無字如何か了したるぞ、禪師曰く、既に無なり、何處に向つてか手足を著けん。老人指を以て禪師の鼻を抑へて曰く「ても大きな手の著け樣な」と、禪師此時全身に汗を流して慢心忽ち消滅し去る。老人大笑して此の鬼窟裏の死禪和子何するものぞと罵倒し鉗鎚甚だ急なり。禪師爾來精勵舊に倍し、見性工夫に余念無し。一日或農家の門前に停みて大事を思惟しありしが老婆出で來りて去れと斷はる。禪師思念に夢中にして之を知らず。老婆怒りて竹箒を取り禪師の頭を打つ。其の打たるゝ一刹那に釋然古人の旨を了し難透の深旨一時に顯前し來る。禪師喜色滿面、歸り來りて老人に謁するや、老人其の機を察し、汝既に徹せりと、初めて印可を與へたり。禪師は斯の如くにして生死の業根を滅するを得たれど多年の心勞は四大の不調を來して病魔にはるゝ身となりぬ。禪師此時の狀を夜船閑話に記して曰く、

禪師の慢心忽ち消滅す

禪師が眞の大悟

多年の心勞終に病を發す

心火逆上し肺金焦枯して雙脚氷雪の底に浸るが如く兩耳溪聲の間を行くが如し。肝膽常に怯弱にして臯措恐怖多く、心神困倦し、寐寤種々の境界を見る。兩腋常に汗を生じ、兩眼常に淚を帶ぶ。此に於て遍く明

白幽先生に就て內觀の法を授かり身心の健全を致す

內觀の祕法

師に投じ廣く名醫を探ると雖も百藥寸效なし。

時に禪師廿六歲の時なりき。偶々或人の山城、白河の山裏に白幽先生と稱する人あり。天文に通じ、醫道に明かなり、效を受くるもの皆驗ありと云ふを聽き、禪師之を訪ひて內觀の祕法を授かり、之を修して忽ち身心の健全を復したり。禪師白幽先生を訪ひたる時の狀を同じく夜船閑話に記して曰く、

少焉あつて衣を振ひ襟を正して畏る〳〵鞠躬して簾子の中を望めば朦朧として幽が目を收めて端坐するを見る、蒼髮垂れて膝に至り朱顏麗うして棗の如し。大布の袍を掛け軟草の席に坐せり。窟中纔かに方五六筍にして全く資生の具なし。机上只中庸と老子と金剛般若とを置く。余則ち禮を盡して懇ろに病因を告げ且つ救ひを請ふ。少焉、幽、眼を開いて熟々視て徐々として告げて曰く、我は是れ山中半死の陳人、栗を拾ひて食ひ、麋鹿に伴つて睡る、此の外更に何をか知らんや、自ら愧づ遠く上人の來望を勞する事を。余卽ち轉た咨叩して休まず、時に幽恬如として余が手を捕へて精しく五內を窺ひ九候を察す。爪甲長きこと半寸、慘乎として額を攢めて告げて曰く、已哉、觀理度に過ぎ進修節を失して終に此の重症を發す、寔に醫治し難きは公の禪病なり、若し鍼灸藥の三つの物を恃んで而して後に是を救はんと欲せば扁倉力を盡し華陀顚を攢むるも奇效を見ること能はじ、只今既に觀理の爲めに破らる、勤めて內觀の功を積まずんば終に起つ事能はじ（中略）。蓋し生を養ふことは國を守るが如し、明君聖主は常に心を下に專らにし、暗君庸主は常に心を上に恣にする時は九卿權に誇り百僚寵を恃んで曾つて民間の窮困を顧みること無し、野に菜色多く國に餓莩多し。賢良潛み竄れ、臣民膜り恨む、諸侯離れ叛き衆夷兢ひ起つて終に民庶を塗炭にし、國脈永く斷絕するに至る。心を下に專らにする時は九卿儉を守り百僚約を勤めて常に民間の勞疲を忘

るゝ事無し。農に餘んの粟あり、婦に餘んの布有りて群賢來り屬し、諸侯恐れ服して民肥え國強く、令に違する〇蒸民無く、境を侵すの敵國なし。國刁斗の聲を聞くこと無く、民戈戟の名を知らず、人身も亦然り、至人は常に心氣をして下に充たしむ、心氣下に充つる時は七凶内に動くこと無く、四邪亦外より窺ふこと能はず、營衞充ち心神健かなり。口終に藥餌の甘酸を知らず、身終に鍼灸の痛痒を受けず。肅流は常に心氣をして上に悉にす。(中略)眞人の息は是を息するに踵を以てし、衆人の息は是を息するに喉を以てす。氣下焦に在る時は其の息遠く、氣上焦にある時は其息促まる。(中略)夫れ觀は無觀を以て正觀とす、多觀の者は邪觀とす。向に公多觀を以て此の重症を見る、今是を救ふに無觀を以てす、又可ならずや。公若し心炎意火を收めて丹田及び足心の間に置かば膈膈自然に清凉にして一點の計較思想無く一滴の識浪情波無けん。是れ眞觀清淨觀なり。(中略)内に守るの要、元氣をして一身の中に充塞せしめ三百六十の骨節、八萬四千の毛竅一毫髮ばかりも欠缺の處なからしめん事を要す。これ生を養ふ至要なる事と知るべし。彭祖が曰く和神導氣の法當さに深く密室を鎖ざし牀を安んじ、席を暖め枕の高さ二寸半、正身偃臥し、瞑目して心氣を胸膈の間に閉し、鴻毛を以て鼻上につけて動かざる事三百息を經て、耳聞く處無く目見る處なく斯の如くなる時は、寒暑も侵すこと能はず、蜂蠆も毒すること能はず、壽三百六十歲、是れ眞人に近しと。又蘇内翰が曰く、已に飢て方に食し、未だ飽かずして先づ止む。散步逍遙して務めて腹をして空しからしめ煎の空なる時に當つて卽ち靜室に入り端座默然して出入の息を數へよ。一息より數へて十に至り、十より數へて百に至り、百より數へ放ち去りて千に至りて此身兀然として此心寂然たること虛空と等し。斯の如くなること久しうして一息おのづから止む。出でず、入らざる時此の息八萬四千の毛竅の中より雲蒸し霧起るが如く無始劫來の諸病自ら除き、諸障自然に除滅することを明悟せん。(下略)

内觀法と腹式呼吸正座法

禪師は教へに從つて内觀の法を修する三年、忽ち衆病を驅逐して三冬嚴寒の日と雖も褻せず、爐せず、古稀を越ゆるまで指すべき半點の微恙だに無く、頭腦益々明晰を加へ、難信難透の問題悉く透過し得て歡喜に滿つるもの數ふべからずと自讚するに至れり。白幽先生とは如何なる人なりけん、或は云ふ禪師が假托の人に依りて内觀の祕法を世に傳へたるものなりと。其の眞僞を知らずと雖も禪師は爾來内觀法を人に教へて止まず、後世禪師を知るもの其の内觀法を窮ひて益を得たるもの擧げて數ふべからず。今日流行する腹式呼吸、靜座法等の修養法は大概禪師の内觀法に因せるが如し。禪師が鍋島攝州侯に答へたる一節に曰く、

常に心氣をして臍輪氣海丹田腰脚の間に充しめ、應務繁絮の間、賓客揖讓の席に於ても片時も放逸せざる時は元氣自然に丹田の間に充實して臍下氤然たること未だ篠打せざる鞠の如し。若し人養ひ得て斯くの如くなる時は終日坐して曾て飽かず、終日誦して曾て倦まず、終日書して曾て困せず、終日說きて曾て屈せず、縱ひ日々に萬善を行ずと雖も終に怠惰の色なく心量次第に寬大にして氣力常に勇壯なり。苦熱煩暑の夏の日も扇せず汗せず、玄冬素雪の冬の夜も襪せず爐せず、世壽百歲を閱みすと雖も齒牙轉た堅剛なり、

四十二歲初めて法華經の深理に契當す

これ机上の空論にあらずして禪師が實證せる結果を述べたるなり。禪師健康を回復してより錫を四方に飛して且つ化導し且つ修行す。三十三歲の時鄕里駿州の松蔭寺に招せられて住す。枯淡の生活を悅び、一老僕の薪を拾ひ菓を採りて僅かに晨昏に供するあり、一僧の每日食を乞ひて給を助くるありしのみなりしと云ふ。四十二歲の七月某夜法華經を讀んで譬喩品に至り蓋の古砌に鳴いて聲々相連るを聞き豁然として法華の深理

禪師の法華經に對する見識

に契當し、初めて正受老人平生の受用を徹見し、此れより大自在を得たりと稱す。爾來法華經を愛讀し身邊を離さゞりしと傳ふ。禪師が法華經に對する見識如何。遠羅天釜の一節に曰く、

大凡世尊一代頓、漸、祕密、不定の法門ありと無量の妙義をのべ給ひて五千四十八卷の諸經あれども其中の至極の旨は法華一部八卷の中に促り、法華一部六萬四千三百六十餘文字の極意は妙法蓮華經の五字に促り、妙法蓮華經の五字は妙法の二字に促り、妙法の二字は心の一字に歸す。心の一字は却りて何の處にか歸すとならば兎角龜毛過別山、畢竟如何、欲ゝ知三無限儁春意一盡在三停針不語時一、さる程に妙法の一心は展ぶる時は十方法界を含容し、收むる時は無念無心の自性に歸す。此の故に心外無法とも說き給ひ、三界唯心とも、諸法實相とも說き給ひぬ。その極處に至りては法華經と云ひ、無量壽佛と云ひ、禪門には本來の面目と云ひ、眞言には阿字不生の日輪と云ひ、律家には根本無作の戒體と云ふ。皆是れ一心の異名なりと覺悟いたさるべし。(中略)然れば眞實の法華經は手にも把れず、目にも見えざるものなるを如何にやは受持すべきぞ。如何樣に心得たるを法華經の行者とは云ふべきぞとならば蓋し三種の根機ありて下根の行者は黃卷赤軸を把へて讀誦、書寫、解說し、中根の行者は自心を觀照して此經を受持し、上根の行者は眼に此經を見徹し、自心の面を見るが如し。此の故に涅槃經に曰く、如來目見佛性とは是れなり。法華經の行持は大乘至極の眞修なれば中々容易の沙汰にし非ず、易きことは甚だ易く、難きことは甚だ難し。去程に本文にも此經難持、若暫持者、我卽歡喜、諸佛亦然と說き給ひて至極大切の行持なり、(中略)難きことは甚だ難しとは我れ得て疑ふ事なし。易きことは甚だ易しとは如何なる故ぞとならば、若し人此經を手を放ちて行住座臥にやす〳〵と持たんとならば、誓つて一回法華眞の面目を見屆くべしと願ひ給ふべし。法華眞の面目を

法華眞の面目

一見したらん上は咳唾掉臂、動靜云爲、草木瓦石、有情非情悉く皆妙法蓮華經と現成する故に十二時中此の經と冥合す。(中略)法華三昧の行持とは今日より思ひ立て、憂きにつけつらきにつけ、悲しきにつけ、嬉しきにつけ、寢ても覺めても、起きても居ても、只管に法華の首題を南無妙法蓮華經〳〵と間なく唱へらるべし。此の首題を杖にも柱にもして是非とも法華眞の面目を見屆くべしと、深く望みをかけて唱へらるべし。願はくは出る息、入る息を題目にしてほしき事よと隨分親切に間斷も無く唱へらるべし。唱へ〳〵て怠らずんば久しからずして心性たしかに大石等を淘り居たる如くにて安住不動、如須彌山の心地は、ほのかに覺えあるべし。その時に捨て置かず隨分唱へらるべし。いつしか聞及びし正念工夫の大事に契當して平常の心意識情都べて行はれず、金剛圈に入るが如く瑠璃瓶裏に座するに似て、一點の計畫思想無く忽然として大死底の人と異なる事無けん。纔かに蘇息し來らば覺えず純一無雜打成一片の眞理顯前して立處に法華眞の面目に撞着して忽ち身心を打失し本門壽量、久遠實成の如來は目前に分明にして推せども去らじ、此時に當つて天台の法性寂然、寂而常照の實所に投入し、眞言の阿字不生の惠日に照され、律宗の諸佛無上の金剛寶戒に冥合し、淨土の卽心往生、極樂報土の素懷を遂げ水鳥樹林、念佛、念法、念僧の妙莊嚴を目のあたり見屆け、娑婆卽寂光の正眼を開き、草木國土悉皆成佛の田地に至らんこと毫釐も相違あるべからず、然らば則ち人中天上の善果何事か是に如かんや、是卽ち三世の諸佛出世の本懷なり。(下略)

五百年間出の師

爾來八十四歲にて寂をとるまで數多の道俗を化して休する無く、其の文筆の傳道は遠羅天釜、白隱法語、へびいちご、夜船閑話、辻談義、さては安心ほこりたゝき、大道ちよほくれとなりて後世無數の衆生を濟度せり。五百年間出の師と稱せられたるもの溢美の言にあらざるなり。明治十七年正宗國師の諡號を賜はる。

第四節　德川時代に於ける信者の消息

其の死の早晨を以て豐臣氏末期の運命をトせらるゝ程の重望を擔ひし

前田利家

は仁義の念の極めて厚き名將にして亦佛道により安心立命したる人なり。暇あれば必らず高德の僧を招じて宗要を尋ねたり。就中越の太白山なる大透和尚（曹洞宗）に歸依する事深かりき。和尚常に敎へて曰く、大事の解決は唯念々捨てずして求むるにあり。久しうして純熟し時節到來せば自然に證入せんと。利家はよく其の敎を守り、たまゝ童子の庭に趨りて桃花の詩を吟ずるを聞きて悟道の趣を解せりと傳ふ。

茶器に墮して心地豁然

圖南の鵬翼を空しく奧州の野に收めたる獨眼龍

伊達政宗

亦參禪工夫に其の膽力を養成したり。はじめ臨濟の虎哉和尚に從ひ、後東獄和尚に從つて學ぶ。晩年雲居和尚の道譽を慕ひ松島の瑞巖寺に招がんとしたる等、求道熱心の狀見るべきものあり。一日秀吉より賜はりし茶器を玩び、過つて之を落し思はずはつと驚きを生じ、忽ちにして思へらく、我はこれ奧州五十四郡の大守なり、一茶器のために心を動かすとは何事ぞやと、取りて微塵に打碎き心地豁然として些の障碍無きを得たりと云ふ。常に不動明王の面に憤怒の相を顯じて內に慈心を蓄へ給ふに感じ武將の範なりと稱して之を仰ぎたりとかや。

鏡底の金を呈して名馬を買はしめ終に夫君をして土佐二十萬石の大名たらしめたりてふ美談を遺せる婦人を妻とせる

出陣に際し禪僧と問答

山內一豐

は宗敎的修養に心を用ひたること亦一段と深かりき。初め妙心寺なる南化和尚に就きて參禪し、後遠州掛川に移りて眞如寺の在川和尚に學びたり。其の關が原の戰役おこるや、早旦馬を馳せて眞如寺に至り禪師を呼んで手槍の鞘を拂ひ突き掛らん氣勢を示して

勇士凭（ひょう）麼の時如何

と大喝するや、禪師從容聲に應じて

大阿手にあり出格自在

と答ふ。一豐すかさず

占へば今日は凶日、出づれば則ち家に歸らじ、此時如何、

と疊みかくるや和尚言下に

二途に涉る莫れ、速かに步を發せよ。吾今公の爲に一戰必勝の妙符を傳へん

と、無字を書して旗となし之を授け

天地一無の禪、誰か是と鋒を交へん、道に往け、須く大國を領せよ、何ぞ小國に歸るを慮らんや。

と敎ふ。一豐拜謝して

珍重、吾れ直ちに出馬せん

と一揖して馬に跨り一鞭くれて駈け出したりと云ふ。一豐に此の修養あり、貧苦と戰つて屈するなく、群雄

を歴して南海に秀を稱せらるゝに至れるもの蜀り内助の功にのみ待てるにあらざりしを知るべし。

康の家臣にて三河武士の典型と稱せられたる

鈴木正三

より佛道に志深く出家の望みありしも主家事繁くして果さず。已にして豐德二氏天下分け目の戰に二度の忠勤を抽んじ、天下靜謐の後、素願の如く出家して諸國を修行し大事を了畢して三河に歸り、石平山愚眞寺に錫を留めしが更に武州熊谷に移り了心庵と云ふを營みて終身の長養所と定め、雲居、物外等の高德と道交厚く、一時道譽四方に喧傳せられ了心庵の生如來と尊とまれたり。其の教への一端に曰く

後生を願ふと云ふは、此の糞袋を何とも思はず打捨つる事なり。之を仕習ふより別の佛法を知らず。我は若き時より之ばかりを仕習ひしなり。先づ千騎萬騎拔き揃へたる備の中に駈け入り胴腹を撞き拔かれて死に死にして死にならひしに、是れやがて仕習ひて駈け入られたり。亦谷底に大蛇口を張り居るに飛び込み角に取りつきて居習ふにこれもやがて仕皆ひて角にとりつき居られたり。羹に何もなき樹の下に只落ちて死んで見るになか〳〵張合ひ無くて飛ばれざるなり。然れども此頃になりて少し飛ばるゝかと思ふなり。各々も何とも思はず、自由に捨てらるゝほど、さま〳〵巧みて此の身を捨て習はるべし。なる程強き心を用ひずしては叶ふべからず、云々

と、實際修行の教訓、味ひありと云ふ可し。

天下を周遊して六十餘回の眞劍勝負に一度も不覺を取らざりし眞面二刀の元祖

死の稽古

宮本無三四

は技を學べる傍ら參禪の工夫を怠らず、終に兩々相俟ちて武道の妙諦に達したるなりき。就中肥後熊本の泰勝禪寺の住職春山和尚に負ふ所多かりしと云ふ。されば其の教へ遺されし兵法の書には、或は構へありて構へなしと云ひ、念無く想無しと云ふが如く宛然たる禪書の趣きあり。細川侯に呈したる兵法覺書きの末文に曰く

一、萬理一空の事。萬理一空の所書き顯はし難く候へば、おのづから御工夫なさるべきものなり。

と、蓋し後世に名を傳へたる程の劍客は何れも禪的修養を積みたりしなり。無三四は其の著名なりし者のみ。更に考ふれば武道の奥義は禪道なり。否一切諸道の奥義は悉く禪道なり。彼の俳道の巨人

萬理一空

芭蕉翁

は亦實に禪門の巨擘なりき。小築庵春湖の上梓したる古池眞傳の記に曰く

常州鹿島根本寺佛頂長老、博覽大悟の智識なり。桃青翁舊交の師なり。近來江戸深川長慶寺へ移轉せられたるに桃青を訪はんとて六祖五兵衞を供して芭蕉庵に至る。六祖先づ庵に入りて、如何なるか是れ閑庭草木中の佛法、桃青答へて曰く、葉々大底者大、小底者小。夫れより長老問へり、近日何のある處ぞ、桃青答へて曰く、雨過ぎて青苔を洗ふ。又問ふ、如何なるか是れ青苔未生以前の佛法、とある時、池邊の蛙、一躍して水底に入る音に應じて、蛙飛び込む水の音、と答ふ。佛頂長老、珍重々々と唱へて持ち給ふ所の如意を桃青に授與す。長老席上に紙毫を取りて、本分は無相なり、我是れ什麼物、若不會、爲汝等諸人下一句子看、一心法界、法界一心と書して諸風子に示し給へば、其の時初めて法界と一心の永音に耳ひらけて實に桃青翁の省悟を各々隨喜しけるとなり。此の時杉風謹んで桃青翁を賀して我師風雅に參禪の

佛頂長老

蛙飛び込む水の音

功を積んで今や水音大悟の一句に、佛頂長老付法の如意を授け給へば、今は天下に宗匠たるべしとて賀儀を陳ふ。嵐雪が云ふ、水音に俳骨悉く連續すと雖も未だ冠の五字を聞かず、師之を定め給へ。翁の曰ふ、我れも此の點を思へり、暫く諸子の高論を聞きて而る後に定めんと欲す、二三子試みに此の冠五を云へ、聞かん。各首を傾けて錬思す。やゝあつて杉風「宵闇や」の五文字を出す。嵐雪は「淋しさに」と伺ふ。其角ひとり「山吹や」と色卽是空、空卽是色の曲をつくして其の姿を調へんとす。翁つく〳〵と見て云ふ。吾子等が冠五、各一理を含んで平生の句にまされりと云ふ可し。就中、其角の山吹やのはなやかさ、力ありてよし。さりながら斯かる七五の冠たてんは觀相見機の理を離れて、只此庭の此のまゝに我は「古池や」とおきはべらんとあるに各あつと感じ入る。

萬象風雅

古池や蛙とび込む水の音

妙なるかな、爰に俳偕の眼開けて天地を動かし、鬼神を感ぜしめぬべし。是こそ敷島の道とも云ふべく、佛を造る功德にもたくらぶべけれ。人丸の陀羅尼、西行の讃佛來も僅かに十七字の中に籠めて向上の一路に遊び、眞如法性の光を放たれて遠く天下の俗俳を破る。今時の俳人を正風の眞路に導かんこと此の翁なり。嗚呼天地風雅なり、萬象風雅なり。

と、芭蕉翁の芭蕉翁たる所以は全く佛道の眞諦に達して宇宙萬象を觀察したるにあり。徒らに技巧を弄して之を學ばんとするものゝ三省を要する處なるべし。其の病んで死せんとするや、靜かに觀音經を念じて眠るが如く逝けりと云ふ。

將軍の連枝として幕府重鎭の身ながらも尊王の大義を唱へ遙かに明治維新の先導者となれる

神儒の粹たる崇んで神儒の固陋を排す

心越禪師の一喝

水戸黄門光圀

は神儒佛の三道を併せて其の粹を取りたり。其の壽像の銘に曰く

崇二神儒一排二神儒一　尊二佛老一排二佛老一。

凡て宗教に附隨して起り來るものは偏見と迷信となり。初めは正しき信仰によりて開かれたる淸き源を有するも時代移りて末流濁らざるもの殆んど稀なり。其の神儒の粹を崇んで神儒の固陋を排し、佛老の眞諦を尊とんで佛老の虛誕を排する卓識は聰明光圀の如き人に於て之を見るべし。祖母養珠院、生母久昌院等何れも深く日蓮宗に歸依せる人々に保育せられたるが因となり、光圀亦日蓮上人の鑽仰家なりき。母の菩提のため水戸城下に久昌寺を建立し、身延より日通上人を招請して莊嚴なる落慶式を行ひたるを初めとし數多の日宗寺の創立若しくは助緣をなしたり。光圀至孝の人にして元政上人の老頽せる母を携へ亡父の遺骨を頸にかけて報恩慰藉の旅日記身延行記の一篇には深く感激せられしと云ふ。光圀亦禪要を尋ねて精神の鍛錬を計られたり。心越禪師の支那より渡來せるを招ぎて參禪せられしは人の知る所なり。禪師は關羽の末孫と稱する名僧なりき。一日光圀、禪師の膽力を試みんと欲し、招ぎて酒を饗し、その杯を擧げて口つけんとする刹那、隣室に於て一發の大砲を放たしむ。禪師騷ぎたる氣色も無く靜かに盃を干して光圀に獻ず。光圀その疎忽を謝するや、禪師曰く、砲を放つは兵家の常のみ、何の遠慮か候はんと。光圀盃を受けて呑まんとする時、禪師威を振つて大喝一聲す。光圀驚きて杯を取り落す。禪師平然として棒喝は禪家の常のみ敢て遠慮申さゞるなりと。光圀一言もなくて益々禪師に服したりてふ逸話あり。

武士道の權化として名も高塙の泉岳寺に千載の美譚を殘したる赤穗の義士は何れも信念の礎り固まれる

人々にて、亡君に地下に見えて今日を語るを樂しみに死を待ち佗びたる心情、轉た敬墓に堪へざるものあり。一々述る遑なければ首領良雄が信仰の一端を擧げて他を偲ばまし。

良雄の硯の銘

大石良雄

かねてより禪によりて心を錬へたり。殊に當時の名僧網干龍門寺なる盤珪和尚(正眼國師)に參得して大事を商量したるは人の知る所なり。元祿六年二月遂に印可を得て一の名硯を授けられたり。良雄自ら其硯に題して曰く、

予嘗つて盤珪和尚に參禪す。師曰く、本來不生と、予會せず。今春聊か其趣きを識る有り、直ちに和尚に到りて擧す。師曰く、是々、時に師の傍に一の硯を見る。師曰く是卽ち西行法師自作の硯なり。余曰く然らず。師曰く、卽今何人の作ぞ。余曰く、西行未生已前、某の作る所なり。師微笑して曰く、爾に出づるものは須く爾に返るべしと、以て予に贈る。予辭せず拜受して歸れり。時に元祿六春二月日、大石氏某受用印。(原漢文)

と、斯くの如くにして既に生死の大事は究明したるなり。さればこそ元祿十四年三月十四日淺野長矩刄傷の急報傳はるや、良雄は折しも淺野家菩提寺の方丈と碁を圍みありしが愴てたる色も無く靜かに一局を了りて徐ろに善後の策を講じ、主家斷絶一族離散の急變に所して、秋毫の亂るゝ無く一切の仔末を了して更に赤誠の同志を糾合し、さしも用心堅固なる敵を打ちて本望を達したるなれ。其の最後の辭世に曰く、

あら樂し、思ひは遂ぐる身は捨つる
浮世の月にかゝる苦も無し。

歡喜天に捧げたる願文

田沼の濁れる後引受けて幼主家齊を補け、世を澄みたるに歸さんと力盡しゝ樂翁公

松平定信

亦篤信の人なりき。人心すさみ驕り天災地變しきりに至る世を泰平にもり返さんには人力の及ぶべからざるを識り、至誠を込めて本所吉祥院の歡喜天に捧げたる密封の願文は後世に至りて發見せられたり。其文に曰く

天明八年正月二日、松平越中守定信儀、一命を懸け奉り心願仕り候。當年米穀融通宜しく、格別の高値に無之、下々難儀仕らず、安堵靜謐仕り、並びに金穀御融通宜しく御威信、御仁惠下々に行屆き候樣に越中守一命は勿論のこと妻子の一命にも懸け奉り候うて必死に心願奉り候事。右條々相調はず、下々困窮し御威信、御仁德行き屆かず、人々懈怠仕り候儀に御座候はゞ只今の内に私死去仕り候樣に願奉り候。生きながらへ候ても中興の功出來仕らず、汚名を相流し候よりは只今の英功を養家の幸、並びに一時の忠に仕り候へば死去仕候方却りて無孝に相叶候儀と存ぜられ候。右の仕合はせに一き御憐愍を以て金穀融通し下々困窮に及ばず、御威信御仁惠行屆き忠孝全く成就の儀偏に心願奉り候敬白。

春日神前の誓詞

佛天の加護の天下蒼生に及ばん事み身命にかけて祈る赤心あればこそ、さしもはけしかりし反對黨を押し退けて傾きかゝりし江戸の繁榮をもり返すことを得たるなれ。治國の勳功ある古今の名主賢臣に共通なるは實に此の信念に住する力なりけり。當時三百餘藩中、治國第一を稱せられたる米澤の藩主鷹山公

上杉治憲

亦同樣の逸事あり。明和四年春日大明神の神前に立てたる誓詞に曰く

一、文學壁書の通り怠慢なく相務め申べく候。
一、武術右同斷。
一、民の父母の辭、家督の砌り歌にも詠じ候へば此事第一思惟可し仕事。
一、居上不驕則不危、又惠而不費と有之候語日夜相忘る間敷候。
一、言行不齊、賞罰不正、不順無禮無之樣慎しみ可申候。
右以來堅く相守り可申候、若し怠慢仕るに於ては忽ち神罰を蒙り永く家運盡くべき者也、仍而件。

領内一同大旱魃となるや、有司に命じて出來得る限りの手段を講ぜしめしも水源枯渇して如何ともすべからず。治憲乃ち林泉寺春日山に一七日の祈雨をなさしめたり。又淋雨しきりて民の耕作を妨ぐるや、自ら斷食して神に祈り父をして其の健康を害なはん事を案ぜしめたる事ありき。奥州一圓の大饑饉に津輕、南部、仙台等の各藩悉く數多の餓死者を出したるに米澤藩のみは一人の餓莩を見ざりしと云ふもの豈に治憲の至誠に應じたる神佛の冥助にあらずと云ふべけんや。

德川三百年の治世中所謂御家騷動と稱する小波瀾各所におこれり。而して奸臣權を弄して庸主をたぶらかし、正義の士奮起して艱難辛苦の間に狂瀾を既倒に救ふてふ事蹟を示すに於て其の轍を一にせり。是等の忠臣にして宗教的信念を其の核となさゞるもの殆んど無し。仙台騷動に一身を抛ちて其の忠烈を稱せられたる

伊達宗重

を擧けて其他を偲ばん。宗重常に菩提寺の住職石水和尚に參して大事を究明しありしが、愈最後の覺悟を定めて江戸に向はんとするや、石水を訪ひて今生の暇乞をなす。石水、宗重の信念を試さんと、突然法問を發して曰く

石水和尚と法問

如何か是れ劍刃上の事

宗重驚かず、法戰場中勝旗を立つ

と答ふ。石水透かさず

意志は如何

と迫るや、無二亦無三

と應ず。和尚終りに

如何かこれ生死の大事

と問へば、宗重自若として

一跳直ちに入る如來の地

と答へたり。一跳直ちに如來の地に入る信念ありて事に當る、大老の威も、甲斐の才智も施すによしなく六十萬石の伊達の宗家を全うするを得たりしもの偶然にあらざるを知るべし。

眼明きは扨ても不自由の者よと喝破して萬卷の書を胸底に藏し、盲目の身にして空前の大著群書類從を世に出し眼明きの學者をして顏色無からしめし

塙保己一

は信心極めて堅固の人なりき。一旦學に志してより日夜天滿宮を念じ般若心經を讀誦して措かず、背つて千日間不斷心經讀誦の願を起して麹町平河天神に日參をなし、以て事業の成功を祈りし事あり。毎日讀誦の心

般若心經讀誦の日課

經の卷數を書き留めたる般若心經御卷數帳と上書きせる帳簿あり。三十四歳にして群書類從の編輯を企てゝ以來死に至るまで四十三年間殆んど一日も缺かしゝ事なく、讀誦したる心經の數を此の帳によりて調ぶれば實に百五十四萬八千卷の多きに達したりと云ふ。

了雲に一喝せらる

平易に所世の道を講じ、卑近の譬に悟道を談じたる所謂心學道話の開祖として知らるる

石田梅巖

は丹波の人なり。幼より學を好み道義の念に厚し。神儒佛の三道を併せ學び、特に洛陽の陰士了雲に從つて禪を修む。一日忽然として悟るあり。「堯舜の道は孝悌のみ、魚は水に泳ぎ、鳥は空を飛ぶ。道は上下に察かなり、性は是れ天地萬物の親なり」と。乃ち了雲に見えて之を述ぶ。了雲聽き喝して曰く「汝の見たる所は當然の凡慮のみ、恰も盲人の象を探れる譬の如く未だ全體を見ざるなり。我が性を天地萬物の親と見たる其の目が卽ち汝の知見のみ。抑々性に目なきを知らざるか、今一度その目を離れ來るべし」と。梅巖爾來寢食を忘れて工夫すること年餘、一夜深更まで思考を凝らして身心疲れ眠りに入りて黎明を知らず、彷彿の間、後林に雀の囀くを耳にし忽ちにして胸宇海の如く廣く靜かなるを覺え、玆に初めて自性の見を放らゝを得たり、と傳ふ。彼が說きたる心學は四書五經より博く諸子百家に及びたれど、要するに禪の悟道より其の源を開けるものなり。梅巖の門に

浴衣を纏はんとして大悟す

手島堵庵

あり。一日入浴し了り浴衣を纏はんとして冥悟する所あり。「我れ浴衣を着るにあらず、浴衣我に着するにあらず、然かも斯くの如くにして更に疑ひなし」と、歡喜の餘り直ちに馳せて道兄齋藤北山を尋ね此の趣きを語る。北山突然掌を以て堵庵の頰を打つ。打たるゝ刹那忽然として道に貫通するあるを覺え、梅巖に見えて此の事を語る。梅巖首肯しながらも猶ほ存養の工夫を怠るなかれと戒しめたり。堵庵の門下大いに榮え心學道際然として世に行はる。其の門より

中澤道二

出でたり。道二は京都の人、機織を業としありしが宗教、道德の上に心を寄すること深く、且つ其の家日蓮宗の檀家なれば常に妙法の意義を悟らんと苦心し、人に質すも意に滿たず。一日鬼子母神に參詣して思へらく「此の尊像木にて彫れりや、銅にて鑄れりや知らずと雖も祈願の靈應あるは何故ぞや」と、疑心百出して決する能はず。偶々西山等持寺なる東嶺禪師の說法を聽く。禪師詢說いて曰く、「心あらん者は各々我と我が住家を尋ねよ。魚は水に棲みて水を知らず、人は妙法の中に住みながら妙法を知らず。疾く出でて之を見よ」と、道二忽ち年來の疑問氷解せり。妙法は我が此の一心に外ならず、鳥には鳥の妙法あり、人には人の妙法あり。神佛との感應道交皆この妙法の所作なりけり。けにも一天四海皆歸妙法ぞと悟りてより心中の愉快譬ふるに物なく、從來の宗教皆その形に泥んで精神伴はざるを見、手島堵庵の令名を慕ひて其の門に入り終に三教一致の大旨を了し、師命を奉じて江戸に下り大いに門葉を耀かせり。松平定信、道二の感化の著しきを感じ之を召して俸祿を與へんとす。道二辭して曰く「彼の官醫、官工の如きは富貴に慣れて營業を忘れ、祠官、寺僧亦寺祿に安んじて其の道を忘る。今若し心學にして俸祿を得ば恐らく同一の轍をふまん。斯の如くんば素餐の罪を遺すのみ。敢て辭す」と、其の抱負と卓識とを見るべきなり。

妙法觀

堪忍のなる堪忍は誰もする

ならぬ堪忍するが堪忍

てふ道歌は實に道二の作り敎へたるものなりと云ふ。これに就きて面白き逸話あり。備前の池田侯隱居して一心齊と呼べるが一日道二を招ぎて心學の講話を乞ふ。朝來早く招ぎて應接の一間に通し、數刻を徒らに待たして後に一心齊上座にあり、數多の女を集めて酒宴をなし居る席へ呼び入れ、先づ酒を呑めよと云ふ。恰も藝人を招ぎたると同樣の待遇なり。道二これまでも十二分の堪忍をなし居たりしも玆に至りて甚だ憤り、拙者は道の話を仕らんとて參りたるに此の御待遇はそも何事にて候ぞ、最早御暇蒙らんとて立上る。折しも數多の人々手を叩きて「ならぬ堪忍するが堪忍」と歌ひ笑ふ。道二はつと心附き、其處に手を突きて誠に拙者の修行足り申さゞりけりと詫ぶ。池田侯つくゞ〳〵此の樣子を見て此の人ならば我一族の敎へを托するに十分なりと、改めて禮を以て迎へ、爾來厚く信賴せられしとかや。敎を以て名を遺す程の人には皆この修行の伴ふなりけり。

ならぬ堪忍するが堪忍

瑞賢は法號なり

貧賤より身を起し一代に巨萬の富を作り、治水、架橋、航路開始等その他公益事業に身を委ねて後世の鑑となれる

河村瑞賢

亦佛法篤信の人なりき。鐵牛和尙に參禪し、身も法體となりて瑞賢と稱したる事は知る人尠し。鄕里勢州を離れて江戸なる叔父の養子となり家業の車力に從事しありしが、已に妻子も生じ生活の難も加はり來りしかば京阪地方に上りて一事業を營まんと妻子に別れを告げ、東海道を上る途次小田原に於て一人の老僧に逢ふ。老僧事の次第を聽きて事業を營まんとせば江戸に知くはなし。且つ御身に富貴の相あり、再び江戸に歸りて働かれよと敎ふ。瑞賢之に從ひて終に運命開拓の曙光に接したり。瑞賢は爾來深く世相の裏に潛める神祕を信じ心を佛道に傾くるに至りしと云ふ。

成田山に斷食の祈願

濟世家として、勤勉家として、將た報德の權化として後世士民の範と尊崇せらるゝ

二宮尊德

は信仰の熱に燃えたる人なり。幼時觀音經の訓讀を聞きて深く感ずる處あり、勤勉力行至らざる無く頹發せる家產を復興して人の稱する處となり、小田原侯の家老服部家の財政を整理して藩侯に按俗を認められ荒廢せる領邑下野の櫻町興復を托せらるゝや、一身を擧げて之に從事せり。しかも領民悉く墮落の淵に沈み居り奸人中に立ち廻りて尊德の勵精も終に功を奏する能はず。尊德最早人力の及ぶ所にあらずとして潛かに下總の成田不動尊に詣で三七日間の斷食祈願を込むるに至る。至誠は佛天に通じたり。さしも膏肓に入れる櫻町士民の怪懶の病も平癒して尊德の素志は達せられたり。初め頑固の野人を以て冷遇せられし尊德は聖者の權化を以て迎へらるゝに至り、其の一言一行悉く生きたる經書として永く後世を照らすもの此の信念の發露なることを知らざるべからず。世の人多くは尊德の勤勉を賞して尊德の信仰を忘る。勤勉は美德なり、產を修むる唯一の道なり。しかも勤勉のみを知りて神佛實在の信念無くんば倉庫滿ちて心的糧食の饑渴に遭ひ索然たる生を送りて死の幕垂れし彼方の闇に心悸くを禁ずる能はざるべし。尊德の信念は左の道歌若しくは語錄の拔抄にても其の一部を窺ふを得可し。

昔もなく香も無く常に天地は
　書かざる經を繰り返しつゝ。

昨日より知らぬ明日の懐かしや

元の父母ましませばこそ。

萬づは悉く唯我獨尊なり。釋迦も唯我獨尊なり。孔子も唯我獨尊なり。我も唯我獨尊なり。禽獸蟲魚草木も皆唯我獨尊なり。云々、

神道は興國の道なり。儒教は治國の術なり。佛法は治心の教なり。

神佛の擁護なければ諸災降伏せず。諸災の降伏は神佛の擁護にあり。

我は神佛を信ぜず唯報德教を奉ずるのみと云ふ人あるも、焉んぞ知らん其の報德教の本尊は神佛の擁護を確信したる人にして報德の教は之を核として生れ出でたるものなることを。又尊德の神佛祈願を以て人心感化の術と斷定するものあり。かゝる人は未だ至誠の何物たるを語る資格無きものなり。

彼の開國主義を採りて朝廷の命に違ひ、天下意々の間に所して斷然たる所置をとり、終に櫻田門外血染の雪を點出したる

井伊直弼

に對しては棺を覆うて歸に六十年を經たる今日猶は是非の定論無し。賞する人は先見の明と果斷の勇氣とを擧げ、貶するものは專權と違勅の罪とを以てす。何れも一理あり。されど吾人は其の人を品隲する標準を至誠の有無に歸するの最も妥當なるを覺ゆるものなり。直弼にして至誠の人にあらずんば其の採りたる主義の如何を問はず、人物として稱すべき所以を知らず。若し至誠を以て事に當れりとせば事の成敗を外にして十分賞すべき價値あり。吾人久しく直弼を以て剛腹の人、冷血の人、專横の人と思惟したりしが彼が信仰の人なりしを知るに及んで其の一代の事業を悉く善意に解釋するを得るに至れり。直弼が從弟福井寺の住職攝專に贈りたる書信に曰く

聊か拙者が信心すら苦にして呉れ候者も有之、妨けんと思ふものも無きにしもあらず、思ふばかりの修行も出來申さず候間彌生の中頃より一つの修行を初め申候。尤も願望の筋も有之かた〳〵早朝後夜の讀經並びに朝晝二食の行をはじめ申候。二食の儀は清凉寺の制規に習ひ申事に御座候。然し俗家の儀に候間無據對客は是非に及ばず、在宅の日は晝後食事止め人知れず施しと致候心得に御座候。先々今に怠り申さゞる事に御座候。是は御一流の御深意には反對いたし申すべきや、（攝專は眞宗の僧なればしか云へるなり）然し捨身の行等申すも思ひ入りの切なる處には佛も感應し給ふ道理も御座候。さり乍ら尙致し方も可有之事に候へども、とかく密々行はれ候事と存候につき此儀思ひ立ち候事に候。但し願望と申候ても名聞のためにては聊かもなく候間よく〳〵御察し、猶ほ御高意仰せ蒙むりたく奉存候。一人も口外仕らざる事は心易く候まゝ御話し申上候。努々御他言被下間敷候。

直弼は實に菩提所清凉寺の僧につきて嚴格なる宗規の下に參禪工夫を怠らざりしなり。而して師事せる師虔和尙の寂するや、攝專に送れる書信の中に衷情を吐露したり。

過し彌生の末つ方、年來の師匠と頼み候清凉寺の師虔和尙急病にて世を早うし侍る、誠に如何なる宿緣にや斯かるおろか者（自身を指す）をも又なき樣に愛敎を受け何に付けても杖柱の樣に思ひ侍りけるに思ひもよらぬ事の出來候は日頃慕はしかりける事忘るゝ暇なく且又おろか者のさがとしてうか〳〵と致し居り御敎へをも受け得ず、師の尊靈に向つて何の面目か侍らん、口惜しとも嘆かはしとも申ばかり無く候。誠

直弱の至誠

に闇夜の燈火を失ひ盲人の杖なき心地、御察し可被下候。

師を慕ふは道を慕ふなり。道を慕ふは至誠の内に籠れればなり。直弱既に至誠の人なり。安政の獄に忍びたるも、違勅の罪を敢て犯したるも、當時の事情として、直弱の立場として、内患外憂並び迫れる幕末の大老が採るべき手段之を措きて他に無しと信じたればなるべし。違勅の罪は終に宥すべからずとするも、之がため他の一切を非難せんとするは畢竟机上の書生論のみ。至誠の人を解するには同情を以てせざるべからず。

第五節　德川時代の結論

三道の一致

前節に述べたる信仰談は猶千百に一二を記載するに至らず。明治維新を境界として開國に至れるまで我國民の間には敬神信佛の思想充ち滿ちたりき。例外の者時に無きにあらざるも、又教權の隆替消長、僧侶の活躍沈滯等の事跡は免れざりしも、一般に靈的信仰の萠芽を有せざるものはあらざりき。意志薄弱にして罪惡を犯せるものも冥々の罪を恐れて末期に懺悔滅罪を計りたる實例數へ盡すべからず。當時流行せる牌史小說類の殆んど悉くが因果應報、神佛靈驗を談らざるものなきは當時の思想界の面影にあらずして何ぞや。中世より神儒佛の三道融然として一致し來れるもの決して傳敎、弘法其他の高僧が手段として融和せしめたるにあらず、三道は元來如々として一致すべき性質のものなり。神ながらの道は我國民の粹にして至誠に外ならず。孔子の敎へは人道の至極を說きたる至誠の敎なり。而して佛道は一切の私を捨てゝ眞理を遵守すべき至誠の至極を敎へたるものなり。至誠に二つ無し、一致すべきは自然にあらずや。しかも印度は思想の國なり、其の粹佛道となりて顯はる、其の徹底的なる、一切の敎へを網羅して餘りあり。支那は最も古き歷史を有する

排佛論の生じ來れる因由

國にして人道の至極を說ける亦世界に冠たり。人類相互間に於ける道德の敎へ、天下儒敎に加ふるもの無かるべし。而して日本は品性の高潔を以て勝る。朝日に匂ふ山櫻、雪に磨ける富士の山、何れか日本民俗の理想にあらざる。印度の佛道支那に渡りて道德的色彩を濃厚となし、日本に渡りて神ながらの道と融和し、崇高なる品性を陶冶して玆に理想的なる佛國土の建設あるべしとは既に述べたる所なり。斯くの如く神儒佛の三道は至誠を核として一致融合すべきこと全く自然の數なるに關はらず、德川時代に至り分離して相爭ふ姿を示したるは我執に捉はれし人爲の業のみ。然かも玆に至れる因由なきにあらず。佛敎は既に屢々述べたる如く眞如法界の大理想を談ずるものなれば相對的智識の言說のみにて能く云ひ顯はすべからざるより、種々なる比喩因緣より佛菩薩をかりて殆んど荒唐無稽と見做さるべき說話を以て縱橫に述べあるゆゑ、種々なる迷信をも助長したるは爭ふべからず。之に反して儒敎は所謂惟力亂神を談らざる流儀にて專ら常識的倫理を說き、人世に適切にして其の人力の及ばざる所は天命として之に安んじ敬虔の念を道義の上に置く處、たしかに方正なる君子人に悅ばるゝものあり。神道は天皇の直系に遡りて純然たる國粹を說くものなれば其の說の淺深は暫く措き我國民の情として之より離るゝ能はざるものなり。國を鎖して二百餘年、世は泰平の高枕に机上の研鑽は各自の長所を發揮したり。一方國家の保護を受けて惰氣慢々たる寺院の僧侶は或特殊の人を除く外、佛道の眞諦に觸れんともせず、徒らに低級なる俗人の迷信に取りゝ入り、佛陀の理想は空蟬のもぬけのからとなり果てゝ轉た士君子の齒するを恥づる有樣となり、玆に浮圖氏の法は正法にあらずと喝破して儒敎、神道の旗幟鮮明に獨立を宣するものあるに至れるなり。坊主憎くければ袈裟まで憎くし、當時の僧侶に慊焉たらざりし儒者神道者は口を極めて佛道を誹れり。古來の佛道歸依者を指して佞佛と嘲り、迷信と罵りたる歷史の

物集博士の佛教觀

記錄は殆んど德川時代の儒者、神道家の筆になれるものなる事は我等の特に注意し置くべき事なり。僧侶の非行は僧侶の罪にして佛道の罪にあらざるは勿論なれども舉世滔々俗惡なる僧侶に滿たさるゝを見ては佛道に對する反感のおこるも亦止むを得ざるなるなり。嘗つて文學博士物集高見氏、法施の紙上に於て述べたることあり。參考となる節多ければ左に其の大要を抄錄せん。

佛教が我國家の歷史上に大關係を有し、之を補助誘導したる事は如何に佛教嫌ひの人にても否定する能はざるなり。余は今より廿四五年前より和漢の書籍は凡て讀破せんとの心願を起し、今日に至るまで熱心に繼續して居る次第なるが、その結果、余の精神に刻まれし佛教と我國家との關係の大なる點は驚くばかりなり。其の間佛教が我神道と衝突せりやと云ふに決して然らず。古來の人傑皆佛教を能く味ひて經世の大資料となし世の風教を進めたり。神道が宗教ならば佛教とも衝突すべき譯なれど神道は正直潔淨を尊とぶ神ながらの大道にして宗教にあらねば、さる氣遣ひ更に無かりき。殊に佛教は耶蘇教と異なり、千數百年來我國と同化し渾然として日本人の所有となり居るなり。今一例を菅公に取らん。菅公は表面神道を立てたれど治國の要諦は佛教に學ばれたること明々白々なり。結局神道の主眼たる神ながらの道も佛教の助けによりて大いに其の面目を發揮したり。平田氏は隨分と佛教の惡口をなしたり。平田のみならず、神道家、儒家に佛教の惡口をなしたるもの尠なからざれど主として感情より來れるものなり。眞に道理の上より云へるにあらず。僧侶の中に不良のものあれば自然佛教にまで累を及ぼすは當然なり。同じ神道家にても本居宣長は決して佛教に排斥せず。平田氏の排佛は當時日蓮宗徒と淨土宗の者と陋劣なる喧嘩をなし居たるが動機となりたるなり。平田が眞に佛教を惡しきものと思ひ居らざりし證據は屢々曹洞宗の永平寺に手紙の往復をなし居りたるのみならず實に永平寺の瑪瑙大和尚より大壑居士の號を受け居るなり。然らば平田先生程の人が一面には佛者を攻擊し、一面には佛者に依したりやと云ふに平田の眞意はさる淺薄のものにあらず、平田は時弊を救はんためには大いに攻擊を試みたれどもそは眞意にあらざりしなり。之により之見るも佛法を興隆せしむるには佛教者その人を得ざるべからず、云々、

平田篤胤居士號を受く

博く和漢の書籍を涉獵せるに於て古今にためし無き程の博士の言は十分尊重して之を見るべきなり。博士は自らも云はれし如く所謂佛道信者にあらず、其の云はれし所全く公平無私なる他觀論なるを知らば思ひ半ばに過ぐるものあらん。又彼の德川中葉の儒者として、武士道の祖述者として、皇國主義の先覺者として又乃木大將の私淑せる偉人として世にかくれ無き山鹿素行の配所殘筆中に自白せる左の記事を讀まば儒者、神道家と雖も必ずしも排佛家にあらざりしのみならず、眞實徹底せる修養を計るものには佛道に加ふるもの無きを領づくに至るべし。其の記の一節に曰く、

山鹿素行の參禪悟道

此の時分は別して佛法を貴び候うて諸五山の名智識に逢ひ參學悟道を樂しみ隱元禪師へ迄令相看候。然れども我等不器用ゆゑに候や、程朱の學を仕り候うては持敬靜座の工夫に陷り候て人品沈默に罷成候樣に覺え候。朱子學よりは老莊禪の作法は活達自由に候て性心の作用天地一枚の妙用高く相成樣に被存候て何事も本心自性の用所を以仕候故滯處無之乾坤打破仕候ても萬代不變の一理は煌々洒落たる所無疑候、云々、

儒者として、皇國主義者として德川光國、山鹿素行に加ふるもの尠く、勤儉力行の手本として二宮翁に過ぎたるは無く、排佛者として知られたるもの平田篤胤を最とすべし。而して是等の人々の佛道に對したる眞相は上述の如し。彼の「山高きが故に貴とからず」と敎へたる實語敎、「弟子七尺去りて師の影を踏むべからず」

近世までの國民讀本

と論したる童子教は德川末世に至るまで久しく我民俗を化したる國民讀本なりき。今之を繙くとき誰か其の三道邪々として而かも中心思想の佛教なりけるに驚かざるものあらん。或は曰く「八正の道は廣しと雖も十惡の人は往かず」と。或は曰く「半偈聞法の德も三千界の寶に勝れり」と。是等何れも僧侶の手になれりとせば恠しむに足らざるが如きも、これ實に國民指導の教科書として天下を風靡したるものなるを思はゞ寺子屋教育の稱は名實ともに舊日本國民教育の代名詞なるを知ると共に、佛教がよく儒教と合し神道と冥し國民道德の源泉となり、精神的最上の糧食となり居たる事を否認する能はざるべし。斯くの如く我國史と佛教とは切りても切れぬ深遠なる因緣を有するものなりしも、安きになれ惰氣慢々たる僧侶の無氣力に愛想つかしをなす者漸やく加はり來れる德川の幕末に、乾坤一轉の新氣運澎湃として漲り來るや、一たまりもなく壓倒し去られんと見えたるもの實に維新前後に於ける佛教界の概觀なり。

維新前の佛教史は簡略ながらも其の精神を述べ了んぬ。いでや筆を新たにして明治大正の御代に於ける佛教觀を記さんかな。

第十二章　明治大正時代

一、開國と思想の變化

思想界の大變化

明治維新の大業は實に我國未曾有の革新なりき。獨り政治、實業、教育等、萬般の顯はれたる事績のみならず、其の思想界の大變化此の際の如きはあらざるべし。長夜の夢の醒めたるか、今見る境は夢なるか。見もし聞かざる鐵艦は波濤の間を縱横し、唯一筋の針金は千里の便りを瞬間に傳ふ。湯氣の力に車飛び、一寫の下に萬象の姿歷々として畫き出さる。泰西の文化の拙ても目覺ましや。思へば我等は幼稚なりき。世間知らずの昧者なりき。釋氏、孔孟の教へをこよ無きものと尊重じ、神よ佛と祈りを掛けしは頑陋なりけり、迷信なりけり。聞かずや文明の彼土にありては自由民權に平等を樂しみ、科學の光りに神祕をあばき、造物主の鍵を奪うて樂國土を自由に築くとよ。覺めよ、疾く覺めよ。過去の陋習ははや打破せよ。泰西の文明を輸入して大改革を計るにあらずば我等は終に彼等の驅使の下に立たん。君子の國よ、神國よと己惚れしは昨日の夢のみ。我等黃色人種は白皙人種の下なるぞかし。人は神の裔孫なり等と誰か云ひし、我等の祖先は猿にてありき。次第に進化して顏面骨の角度を增し、白皙人種に至りて極まる。我等は世界五人種の第二位なり。未だ彼れに及ばずとするも協力一致勤勉努力の結果は彼等に幾分の接近をなし得べしと。これ實に當時に於ける所謂先覺者と稱する者の間にしき波打ちて起り來れる思想なりき。對外觀念の熾んなるにつれ國家てふ意識著しく明瞭を加へ、極端なる泰西心醉者の一方には我國粹の美を顯揚せんと勵むるものあり。文明の度に於て彼に一籌を輸するは致し方無きも我には建國以來獨立を汚されず、萬世一系の皇統を戴き來れる歷史あ

泰西の文華に惑ひす

國粹論者の奮起

智識の推論と至情の發露との矛盾

人間の行動は實際に支配するものは情なり

り。此の國體の尊嚴は萬國之に比するものなし、天與の國にあらずして何ぞや、と。然りこれ實に我國民の當時唯一の誇りにして又唯一の力なりき。我に佛性ありとの自覺におこりて大悟成道の域に達する如く、天與の國との自覺は終に幾多の難關を突破して世界强國の班にまで進みたるなり。天與の國、神聖なる皇上を思ふ時、其の建國に遡りて天祖の御威靈を仰ぎ、一種神祕的なる所謂神代の觀念に達着すべし。文明的なる智識の推論は我等の祖先を類人猿となし、皇國の神聖を思ふ情は我等の祖先を神となす。嗚呼此の矛盾、如何に解決を下すべき。學術に於て、實業に於て、武器に於て彼の脚下にだも及ばざりし當時、唯一の誇り、唯一の原動力なりし國體の觀念をさへ捨て去らば國民の意氣消沈して如何なる非運に墮いりしや知るべからず。然かも非常の場合に臨んで人間の行動を實際に支配するものは所謂理智にあらずして感情なりけり。否理智を超越せる本能的湧發的の情操なりけり。一面に於て黄色人種を是認しながらも、我は特殊の神國人なりてふ觀念を把住して之を高潮せり。其の影響は德川中世以後より勃興せる國學者、神道者に一段の勢力を加へ

佛道者無慘の境遇　廢佛毀釋

之に反して德川の保護の下に惰眠を貪り、王政維新に何等の功績を認められざりし佛道者は九天より直下して哀れ無慘なる境遇に逢着せり。寺錄は召上げられ廢佛毀釋の聲は四方に起り、薩摩、長州、富山、松本等の諸藩は卒先して寺を廢毀し、佛像、佛畫、佛具を破却するに至れり。宗教上何等の確信なき僧侶は相率ゐて還俗願を差出し、民政寮は喜んで之れが許可の指令を下せり。其の指令に曰く、

正業復歸

開明の御趣意を遵奉して正業に復歸の儀願出し候段奇特の至りに付き願の通り聞屆候事。

正業復歸の　字、以て當時の消息を窺ふ可し。一般の僧侶に姓氏を稱せしめ、肉食妻帶蓄髮の官禁を解き、女人結界の制を廢する等、最早佛徒は政府の眼中に無からんとするに至れり。此の大鐵槌に僧徒の彈力失せざるものは必死となりて奔走し、各宗互に提携して之が挽廻の運動に着手せり。斯くて漸やく神道者と相伍して教導職となり

教導職三條教則

一、敬神愛國の旨を體すべき事、

二、天理人道を明かにすべき事、

三、皇上を奉戴し朝旨を遵守せしむべき事、

所謂三條教則に違背せざる限りにおて宗意を変説する事を許されたり。而かも教導職養成の目的を以て設けられたる大教院は麹町なる紀尾井町より芝增上寺に移されしが、神祇を以て大本としたる故本堂なる本尊阿彌陀佛は撤去せられて三本の御幣と三枚の鏡とは造化の三神の形代として安置せられ、山門の前には鳥居立ち、十六羅漢は薦包となりて倉中に押込められ、僧侶にして衣冠束帶、神官と共に拍手し、若しくは法服を纏ひて魚鳥を神前に供する等の奇觀を呈し、僧徒の職業は之に依りて繼續するを得たれど、佛教の本旨は茲に絶滅せんとす

佛教本旨は絶滅せんとす

僧侶の歐米視察

を來さんとせり。此時に當り本願寺に於ては歐米視察のため梅上澤融をはじめ島地默雷、赤松連城等を岩倉大使に從はしめ、次いで北畠道龍、南條文雄等の僧侶を彼土に派遣して宗教上の制度並びに學術を研究せしめたり。默雷等の諸師彼地に渡りて先づ其の宗教の盛んなるに驚きたり。各國の帝王を始めとし、政治家と云はず、軍人と云はず、學者も無學者も天の使命をかしこみて各自その責任を盡す有樣に轉た我國佛徒の現狀を對照し、悲憤の涙を催したり。默雷師歸路印度の佛跡を拜し大なる抱負を以て朝に歸り、或は眞宗各派の門を叩き、或は政府に議を建ずる等、佛教の獨立して布教なすべき事の當然なるを論じ侃諤の議は終に識者を動かすに至れり。一方には荻野獨園、諸嶽奕堂、密道應、新井日薩、福田行誡等の高僧連名して政府に

島地と雷

佛教の獨立論

佐田介石

建白するあり。經濟論、天文說を提げて當時に嗚れる佐田介石の起稿せる論文を之に添へたり。佛教開國論と稱するもの是なり。之を讀まば如何に焦心して佛教思想の低級なりし當時の反對者と戰ひしかを見るべし。

二、佛教界稍活躍す

高僧輩出

西有穆山

環溪禪師

雪爪老人

義堂和尚

原坦山

恒順上人

寂順僧正

雲照律師

泰龍和尚

佛教の獨立布教

大内青巒

此の前後に當り、或は德行を以て、或は學識を以て、或は膽力を以て人を心服せしめたる高僧漸やく顯はれ來りぬ。大教院なる法服廢止の議を蹶したる西有穆山あり。神道者より神式舉行に列し其の禮に從へと迫られて言下に諾し、子等我寺院に來らば剃髮法衣の禮を執れと酬いて神官等に二の句を次がしめざりし環溪禪師あり。國轉滑骫緡神の間に交遊して彼此の疏通を計れる雪爪老人あり。十餘の劍客に圍繞せられ神色變らず、貧僧の痩首欲しくば一人にて足れり、と大喝して流石の大西郷を驚歎せしめし天龍寺の義堂和尚あり。後年死期を數多の知人に豫報して誤らざりし惑病同源論の著者坦山和尚あり。佛教孤兒院の範を示せる博多萬行寺の恒順上人あり。皇室と佛教との關係を舊に復せしめたる寂順僧正あり。眞言律を宣揚して戒律堅固の名を博し皇族縉紳間の歸依を受けたる雲照律師あり。教導職の試驗に應じ、試問に對して悉く不知と答へ辛うじて權訓導の辭令を受け、大講議に登第せる數多の門下生を戒しめて佛道の權威を說きたる泰龍和尚あり。斯くて彬出せる數多の智識の言行は次第に世人を動かして一時絕えなんとしたる法燈再び光を耀すべく、神佛分離して教導職を廢し、佛教の獨立布教は認可せられたり。寺院住職の任免其他一切の權限を各宗管長に委任せられて宗制寺法の定まりしは明治十七年八月の事なりき。當時僧侶以外に佛教の外護者として活躍したる人も尠なからず、就中大内青巒、佐久門貞一等その著しきものなり。青巒居士は仙臺の藩士なり。學博く、識高く、三條、岩倉、木戸公等の知遇を受け、屢々仕官を勸誘せられしも思ふ所ありとて從はず。默雷、坦山、行誠、日薩等の諸師と交りを訂し、明教新誌を發刊して佛教徒のため萬丈の氣焰を吐き、其の布教宣傳に力を盡したる功績舉げて數ふべからず。正に明治の佛教史に特筆大書せらるべきものなり。人呼んで明治の維摩となす。

基督教に抗すべく佛徒漸やく活躍し來る

衣裏の寶珠を見出す

井上圓了佛教哲學

斯かる間に博く智識を世界に求めよとの聖旨に基づき信教自由の政を布かるゝや、久しく禁制の厄に遭ひ居し基督教は猛然として國内に浸入し來れり。佛教徒は之と對抗すべく茲に積極的活動を始めたり。或は破邪顯正と云ひ、或は耶蘇教退治と云ひ、一は教義の上より、一は國體の上より盛んに論難討議して佛教の眞理は次第に顯揚せらるゝに至る。一方には學術の研究日に〳〵博く深きを加へ歐米の哲學科學を咀嚼して彼に心醉するもの多き間には衣裏の寶珠を見出して佛教哲理の更に玄妙なるを歎稱する覺者も起りぬ。大内氏は釋門哲學叢誌を發行し、井上圓了氏は佛教活論をはじめ數多の著書の上に佛教哲學の玄を開き、傍ら哲學館、後の東洋大學を建てゝ數多の後進を養成し、佛教哲學、東洋哲學の名は之より盛んに喧傳せらる。井上氏は更に妖怪學の研究と稱し古來の迷信を打破し從來怪を稱し、不思議を唱ふるもの皆科學的智識を以て闡明するを得べしと斷じ、佛教の眞諦は決して斯かる淺薄なる迷信を鼓吹するものにあらず、玄妙不可思議なる宇宙の眞相を說くものにして俗惡なる迷信が文明の光りに消失する時その眞光を發揮し來るべしと喝破して科學の發達の佛道の教と抵觸せざるのみならず反りて之が援助たるべしと論じたり。今日之を見れば元より論じ盡さゞる處多きが如きも當時極めて斬新にして有益なる企てなりしを疑ふ能はず。西洋の諸學者亦佛教哲理の深奧なるを認めて之が研究に身を委ぬるもの次第に加はり、發達し來れる西洋哲學に比して何等の遜色無く華嚴、天台の妙理に至りては更に一段の高きを見るとは内外學者の殆んど定論とも云ふべき程に其

の價値を高め、世に行はるゝ一切の宗教中哲理の根底に於て最慢なること最早何人も異議なき所となれり。

三、明治天皇の聖旨

不出世の資を持たれて振古未曾有の大業を大成せられ、億兆の父母と仰がれまし〻明治大帝は其の御治世四十五年間、大政を聞はし給へる御餘暇に聖慮を佛教の外護に用ひさせ給ひ、古典には總べて準せさせ給はん、先例は爲めて保存し給はんてふ尊き思召より、明治初年頃久しく廢せられたる宮中後七日の御修法も、叡山に於ける法華勅會も凡て御再興遊ばされたり。而して御内儀の御黒戸（御内佛）は毎朝拜せられて篤く三寶を御崇敬あらせられ、京都へ行幸の砌には屢々兩本願寺を始め他の諸名刹へ御參拜を遂げられ、嘗つて長野縣へ御巡幸の際には特に善光寺へ御參拜ありて誓願尼公に拜謁を賜はれり。其の他演習等のため各地方へ行幸の際、寺院が行在所、若しくは御休憩所となりたる場合には必らず其所に奉祀しある本尊前に敬禮を行はせられ、且つ香華の料を捧げられ給ふのみならず、住僧へは御物を下し給ふを例とせさせ給へりと漏れ承はる。又各宗祖師の高き道譽を御追念遊ばされ、親鸞上人の見眞大師、道元禪師の承陽大師を初めとし、大師號、國師號を追謚せられしもの實に十二人に及べり。各宗本山に於て宗祖の大遠忌を營まるゝ時は追遠の思召を以て香華料、供物、佛具、法器等を賜はり、由緒ある寺院再建の奥ある時は用材或は其資を賜はるを例とせり。彼の東福寺へ方丈門一字を御寄附に相なり、總持寺の再建に一千圓の御下賜ありたるが如き其の一例なり。殊に皇室の香華院なる泉涌寺へは特別の思召を以て歴代天皇の御聖忌ある毎に莊嚴道具をはじめ一切の法器費用を御寄進ありたるのみならず、明治四十五年度より年々四千八百圓の淨財を御下賜の事に御定めとなりしは御登遐遊ばさるゝ六十日前の事なりしと拜承す。

古典、先例保存の叡慮

三寶の御崇敬

大師號等の追謚十二人

泉涌寺

目に見えぬ神の心に通ふこそ
人の心の誠なりけれ

てふ御製を拜する時、誰か天皇の御至誠、神に通はせ給へるを仰がざる者あらん。げに天皇は神の顯はれにておはしき。佛陀の權現にておはしき。擧世滔々浮薄の思想に溺るゝを悲しませ給ひ、敬神、信佛の最も重んずべき事を御身もて敎へさせ給へる聖旨かしこしともかしこき極みならずや。

四、佛徒の安堵と佛敎の不振

斯かる聖天子の外護を仰ぎ、深遠なる敎義と、千數百年の歴史と、七萬有餘の寺院と、十萬有餘の僧侶と、三千餘萬の檀徒とを有し達識の僧侶漸やく顯はれ來りし明治の佛敎界は自由布敎を許されて既に三十餘年、如何にも目覺ましき活躍の期して待つべかりしを、顧みて其の實蹟は如何なりし。維新後四邊の壓迫に漸やく眠りを覺して活動の期に入りしと思はれし僧侶は聖代の惠みに一身の安心定まるに及び早くも偷安を貪りて其の職責を忘れたる姿となり、深遠なる敎義は徒らに一部の學者の娯樂的研究の資に供し、慣習的なる御經の誦讀と、戒名の書き方と、葬儀の際の儀式の型の一通りとを知れる外、人を服せしむる學識も無く、信仰も無く、戒律等は上の空にて唯々檀信徒の鼻息を窺ふ有樣となり、徒食の遊民、葬式の道具とまで識者の誹りを受くるに至れるはそも〳〵何ぞや。勿論この間には篤信の聖僧、博學の智識、憂國の傑僧、悲心の名僧無きにあらず。我等の知れる狹き範圍にも敬服すべき僧侶二三にして止まらざるなり。されど一般より見たる近時佛敎界の狀態は如上の記事を一概に抹殺する能はざるべし。吾人は徒らに僧侶の人々を罵しりて快とするものにあらず。唯佛道の盛んなるべき期に際して實績擧がらず、世を擧げて因果の道理を悟らず、

聖代の惠みに安心して佛徒再び惰眠を貪らんとす

徒食の遊民葬式の道具

永久の生命を信ぜず、目前の利に趨りて道義を忘れ、物質の光に幻惑せられて信仰の光を見失ひ、日に〳〵罪惡を作りて未來無限の苦患を思はざる輕薄なる現實主義者に滿たさるゝを見、其の職にある人々の猛省を乞はんと欲するのみ。

佛教不振は僧侶の罪のみにあらず

されど翻りて考ふるに此の事獨り僧侶のみを責むべきにあらず、現代の教育に從事する人々も其の責を頒つべく、一般社會の人々も其の責任なしと云ふべからず。昔は教育の大部分が僧侶の手にありし事あり。然らざるまでも僧侶は社會の智識なりき。今の社會は卽ち然らず。一般の智識向上して犬打つ童子も理學を談じ、機織る少女も理想を語る世の中なり。農夫は鍬鎌、商估は十呂盤、大工は規矩と相場極りし時代は昔にて、今は實業家と稱する國家の中堅となり政治經濟は云ふまでも無く、哲理を說き、教育を論じ眼中既に宗教家も無く、教育家も無き世の中なり。實際の內容之に伴へりや否やは別問題として、兎も角一般にしか任じ、教へを受けんとするもの無く、高く他觀の立場にありて批評の人のみ充ち滿てり。社會の風潮に最も責任ある教育者は宗教の圈外に立つを以て高しとなし、或る特殊の人を除く外、殆んと佛教の何物たるかを理解せず、多くは古き思想と稱へ、一種の迷信として之を笑ふ。斯の如く社會一般は何れも自ら悟れりとして高く止まり、僧侶に道を尋ねん等とは思ひもよらぬ時代となれり。偶々說法、演說等聞くことあるも、彼は巧みなり、是は拙なしと品隲するのみ、誠に道を求むる心なし。僧侶の人亦時代の子なれば眞實發心して道に入れる人尠なく、多くは種々なる事情の下に一種の職業として之に從事するのみ。社會の要求尠なければ無用の佛學等修めんよりも世事賢く社交の術にても學ぶが肝心となり行くなり。既に求めんとするもの無く、教へんと勗むるものなし。佛道の衰へ來るは當然のなり行きと云ふべし。

僧侶も亦時代の子なり

思想變遷の過渡期

更に靜かに之を考ふるにこれ實に國民思想變遷の過渡時代として免るべからざる自然の經路なりしを覺ゆるなり。そも〳〵我國建國以來二千六百年、時に隆汚無きにあらざりしも蒙古來の强迫を外にして眞に國家存亡の危急に際會せることなく、從つて對外的の國家觀念は甚だ漠たるものあり。其の思想の如きも支那印度の埒外には一步も踏み出したること無く、殆んと同一のものを繰り返し居たるかの感じあり。然るを一朝忽然として西洋文明の光りに接し、交通機關の發達は萬國舉げて比隣となり、劍を磨き銃を裝せる强敵の四周に遍滿して玆に國家の危急てふ觀念著しく濃厚となり、先づ西洋文明を一刻も早く輸入して彼れと伍を列するまでに國運開拓するが焦眉の問題となり、國家は此の方面に向つて全力を盡したり。卽ち國家の危急を自覺して猛然之が救濟を計らんとするもの當時の國家的意識なりき。斯かる際に厭世悲觀の色彩ありと認められたる佛教の悅ばれざりしも當然なり。國家の爲に實材を養成せよ、常識ある而かも健全なる人物を作れとは憂國者衷心よりの叫びなりき。念佛して未來の淨土を欣求するが如き思想、獨り高く悟りすまして社會の塵より遠ざからんとするが如き思想も悅ばれざりしは當然なり。國家を中心とする思想の新しく、然かも熱烈に起り來れる場合、個人の未來とか安心とか云ふ問題は閑却せられ、從つて宗教的意識は潛在し、現實の上の施設を尊とび、富に於て、力に於て、彼に勝れる國家を造り上ぐるが先決問題、唯一の問題となれり。斯くて實業家の位置は高まり、科學の智識は重んぜられ、體育の奬勵と、常識の發達と、國家的觀念の養成とは教育の大方針となり、直接之と關聯なしと思はるゝ佛寺の門には雀羅を張るに至れるなり。而して一面には、概念的、冥想的、直覺的、傳說的なりし東洋の思想にのみ耽り居りたる國民の頭腦に解析的、實驗的、推理的、考證的なる西洋の科學思想流入したれば玆に又思想の大變化起れり。佛教の如き、解析して實驗す

國家觀念の鮮明

佛教不振の理由の一

佛教不振の理由の二

宗教意識の潛在

科學思想の興起

佛教不振の理由の三

る能はず、科學的推理のみによりて知る能はず、其の經典の如きも、出所の考證に材料乏しきものに在りては最早印度に於ける過去の思想の記念として見らるゝに過ぎず。且つ其の科學思想は未來の生命など云ふことを以て痴人の夢となす。已に未來の生命を信ぜず、從つて宗教家には何等の用事も無し。唯在來の慣習のまゝ墓展葬送の際、僧侶と交渉の道を繫ぐのみ。

二大思潮と佛教

如上述べたる對外的國家觀念の高潮と、科學思想の流入とは我國建國以來初めて遭遇せる大事實にして又我國運發展上缺くべからざる要素なりき。此の二大思潮と相容れざるが如く思はれたる佛道の一時勢力を失墜したるは寧ろ自然の事にして僧侶の罪とも云ふべからず、社會の罪とも云ふべからず。

五、佛教の復興期

形式に於ける文明の成立

國の心的生活の荒涼

理想の文明國にあらず

斯くて舉國一致努力の結果は國運隆々として長足の大進歩をなし、教育に於て、實業に於て、學問に於て漸やく彼に接近し來り、日清、日露の戰役後は世界强國の一として人も我も許すに至り、大正の御代に入りて歐洲の大戰亂起るや我は有利の立場となりて商工業は空前の活躍をなし、幾億萬の正貨流入して所謂富國强兵の實績擧り、教育の設備は日に〳〵完備を加へ、形式に於ける理想的文明國は一先づ茲に成立ちぬ。而かも一度眼を轉じて其の心的生活の眞相を窺ふ時は轉た荒涼の感に堪へざるものあり。子は親を凌ぎ、弟子は師を蔑り、名利の爲には親友を賣り、節操道義の觀念は次第に失せて唯々實利の一方に走り、口を國家に借りて自已の便宜を計り、面貌を飾りて虛僞の交際に人は忙殺せらる。國家の富愈々增して細民の苦しみ益々加はり、教育の設備次第に完備して教育の精神漸次に衰ふ。此れ豈に期待せる理想の文明國ならんや。人心の荒廢斯くの如くにして止まる無くんば國家の前途實に計り知るべからざるものあり。蓋し心に至誠の存する無くして愛國的舉國一致を永續せしめんとするは木に據りて魚を求めんとするより更に難き事なればなり。茲に於てか從來の國民教育の根本に缺陷ありとの議漸やく識者の間に湧き來り、精神教育、精神修養の聲至る處に喧傳せらる。然かも現代人の多くは從來の格言的道德を墨守せしむるには餘りに批評的の理智に富み、文化的理想の下に導くには自守的氣根餘りに薄弱なれば通漫なる道德談學究的なる倫理說を以て此の缺陷を救はんことの難きは想像にあらず事實の試みが之を證明しつゝあるなり。斯くて絕對權威に順應すべき宗教的信念を養成することの如何にしても必要なるを說くもの漸やく其の數を增し來り敬神崇佛の聲と共に種々なる宗教的修養の會合、並びに此の種に關する著書の刊行次第に加はり來れり。沈滯せる佛教の活躍を見るは蓋し是よりならんか。而して近時特に注目すべきもの二つあり。一は禪的修養の流行、一は日蓮主義の勃興これなり。

國民教育根本の缺陷

理智に富みて氣根薄弱の現代人

宗教的信念必要の叫び

六、禪的修養

精神の鍛錬を計るに於て

禪的修養

に加ふるものなきは上に述べたる古來の人傑の跡に照らして之を知るべし。煩鎖なる教義を離れ、直ちに自已の心性を觀じて道の當體に同ぜんとす。其の理智を離れたる處に何となく頷づかるゝ節あり、一度靜座して之を試みるも心神何と無くすが〳〵しきを覺ゆ。茲に於て精神修養に志ある人の爭つて其の門を窺ふは昔も今も變らざりけり。されど之によりて大悟の境に達するは容易の事にあらず。本書に述べたる數多の禪僧が苦心慘憺、一切の人事を拋うちて漸やく悟道の域に入れりてふ事蹟は之を證して餘りあり。悟りて後に考

へなば數多の年月を徒らに門前の彷徨に費し、近きにあるを遠きに求めたりとの感も起るべく、後進に教へて道は汝の脚下にあるを知らざるかと云ふ。しかも其の脚下の道は容易に見ゆるものにあらず、元本の無明は唯一枚の膜ならんも之を除くには大なる修行を要すべし。公案幾度通過して安賣りの印可受けたりとて果して悟りに入れりや否や怪しきものなり。誰人も或は靜座して默想する場合、或は心機の一轉せる場合、心身脫落して悟りに入れり等已惚るゝことあり。斯かる時に自稱悟道者の起り、反りて正道に累を及ぼすものなり。白隱禪師の一代を見ば思ひ半ばに過ぐるものあらん。靜座法と稱し、數息觀と云ひ、凝念法と名づくる數多の修養法は何れも其の源を禪に發して其の形式を改めたるものなり。修養法として效果あるべきは云ふまでも無けれど之のみによりて宗教的信念を獲得するは至難の事と云ふ可し。

自稱悟道者

七、日蓮主義の活躍

維新前にありては兎角其の筋の氣受け惡しく、他の各宗よりも、一般世間よりも偏狹なる一派と見られて常に迫害の歷史を繰返し來れる

日蓮宗

田中智學
本多日生
高山樗牛

は過去十數年以前より著しく世に活躍し來れり。田中智學居士が燃犀の筆と、熱烈なる辯とを振ひ、本多日生師が大なる意氣と抱負とを以て社會の表面に立ち人目を新たにしたる事の宗門外の人々に强き影響を與へたるは云ふまでも無く高山樗牛が日蓮上人の人格を慕ひ青年に喜ばるゝ筆を以て盛んに青年文壇を賑かしたるもの亦預かり力ありしならん。樗牛が果して信仰の人なりしや否やは吾人の速斷する能はざる所なれども、兎も角宗門以外の人々に日蓮上人の大を知らしめ從つて此の門に向ふ動機を與へたるもの、當時樗牛の文を愛讀するもの多かりしだけ確かに功績ありしを見のがすこと能はざるなり。其他識見人格共に高き人々の間に上人を鑽仰する者次第に加はり熱心に力說する所ありたれば茲に教界の一勢力となりて特に認めらるゝに至れるなり。されど日蓮宗にして時代の要求に應ずべく、根本的に國家人類を救ふべき眞實權威ある教へならざらしめば縱へ一時の盛況を呈するとも、所謂一時の流行にして了らんのみ。感情一片の熱辯の力、迎合主義なる文章の力は決して永く人を率うるものにあらず。靜かに日蓮上人の教への眞髓を以て日本國の理在に涵むとき日蓮主義の勃興し來れる事の偶然にあらざるを知るべきものあり。

日蓮宗の勃興偶然にあらず

過去に開かれたる東洋文明の粹が日本國に集まり醇熟して今日に至り、西洋文明の華亦めぐり來りて現に我國を飾りつゝあり。東西文明の接觸して融合統一せらるべき地の日本國なりてふ聲は久しき以前より內外識者の共に發したる所、而して世界的勢力の焦點たるべき地が巡環して正に日本國に來れりてふ聲も識者の間に聞く處なり。個人に個人の特性ある如く、國民には國民の特性あり。此の特性高潮せられて交互文明の中心となり、十方に波及して其の恩澤を博く世界に及ぼし、斯くて人類は幸福なる理想界に向上し行くなり。支那と云ひ、印度と云ひ、埃及、ギリシヤ、羅馬より、佛蘭西、獨逸、英吉利、北米合衆國等何れも其の國民特有の文明を世界に貢獻せり。天運巡環し來れる日本國民の特性や如何に。他人の特性を知るは易く、自己の特性を知るは反りて難し。而かも歷史は良き鏡なり。國民の多き、時代の遙かなる、玉石の混淆は免れざる所、時に盛衰あるは數理なり。されど大體の上より通觀すれば、智德を研くも、事業を興すも、以て祖宗の名を擧ぐるを理想としたるは我國民の歷史なりき。事あるに涖んで君國に殉するを最大名譽と信じたるは我國民の歷史なりき。神ながらの道を貴ぶに於て何人も異議なかりしは我國民の歷史なりき。儒教と云は

東西文明の統合廻世界勢力焦點地の巡環

日本國民の特性

日本國民の特性より發したる理想と日蓮主義

ず佛教と云はず、全く我と同化せしめて異國の臭味を脱却せしめ、其の精神我が國粋と融合して東洋文明の精華となれるものを今日に持續し來れるは我國民の歴史なりき。國土の純潔を悅び、風土の明媚を樂しみ、或は詩となり、文となりて樂天の思想を傳へたるもの我が國民文學の歴史なりき。而して君國の絶對尊嚴におはするを確信し、政綱失はれて世は刈菰と亂れたる弱肉强食の闇黑時代に猶ほ天津日嗣の皇位を窺はんとするものなく天壤無窮の皇上を戴けりてふ榮譽を獨り世界に向つて誇るを得るに至れるは實に我國民の歴史なりき。吾人は徒らに自畫自讃して世間知らずの已惚れを談り合ふものにあらず、我等の體を流るゝ血液は、清き歴史を作れる祖宗の血にして、我等を支配する思想の核は斯く麗はしき歴史の華の果實なりしを自覺して覆ひ渡れる雲霧を拂ひ、本然に備はれる特性を發揮して世界文明に寄與するあらんを欲するのみ。如上の記載を非認せずんば我國民の特性は餘りに明白なり。一言にして之を云へば絶對眞理に順應すべき道義の理想を實顯して世界の風潮を玆に導き、天覆地載の名分を明かにして差別の當相その儘に平等の眞義に叶へることを闡明し、各自其の分に安んずるを得しめ、人類を擧けて寂光淨土を建設せしめんと勗むるもの、これ實に我國民の特性より發する世界文明に寄與する最大なるものなり。

而して日蓮上人の人格、教義を透したる日蓮主義は實に此の理想と符節を合せたるが如きを見る。日蓮上人の略傳並びに其の教義の特色は既に述べたる如く、佛教の正統を尋ねて法華經を取り、我國土に對する觀念と一致融合したる大信仰を披瀝して純然たる日本佛教となし、其の古しへの靈山淨土を日本に移して佛陀の理想を事實の上に顯はさんとし、厭世的色彩より脱して娑婆卽寂光の現實主義となし、消極的に見ゆるを積極的となし、世間、出世間を調和して一切世間治生産業皆實相に違背せずてふ法華經の教へを徹底せしめ、

名分の上の破折と人物評

釋尊を透たる久遠の本佛

日蓮主義の長所

儒教神道を初めとし佛教各派一切を擧げて法華經に融合統一せしめたるも、其の名分を正すに當りては絶對權威の壽量の本佛を立て、假りにも之を犯さんとするものに對しては其の何物たるを問はず、斷々乎として破折せり。日蓮の教義を他と相容れざるが如く解するは色彩のみを見て精神を了せざればなり。既に絶對の權威を說く以上、之れと對立するものあるを許さゞるは勿論なれども他の如何なるものをも包容して餘す無き特色あるを知らざるべからず。上人の他を破したるは偏へに名分の嚴正より出でたるものにて日本人には是非とも之を理解する能力なかるべからず。吾人は本書の人物評に於て其の信仰の人、至誠の人なりしを見れば勗めて同情の筆致を用ひたれど、そは行動の跡のみに依りて批議する人の世に多ければ見方を換へて至誠の一方面を力說したる結果のみ。若し名分の上よりせば北條、足利より下りて大老井伊に至るまで筆誅すべきは勿論なり。上人の破折は主として此の點にあり。絶對權威の本尊を顯はすに當り本より當然の事と云はざるべからず。而して教主釋尊を透したる久遠の本佛を力說する處に至情籠れる上人の面影を偲ばるゝなり。華嚴の教理高からざるに非るも、眞言の教へ深からざるに非るも、教主釋尊を低く見て、他の佛菩薩の權威を說くは、我等の現に受けつゝある君主の恩を外にして、大主權者を認むるに等しく、久しうして不知恩の人となるを免れざるべし。上人の此の本尊觀は天地の德を至尊に仰ける我國人に最も共鳴する教ならずや。法然上人、親鸞上人の崇高なる人格と、其の徹底せる信仰とは吾人之を讃美す。然かも其の淨土欣求の理想と報恩感謝の念佛とは、地湧の菩薩を自覺して妙法蓮華の寂光土を建設せんとする上人の理想と比して、列强環視の間に立ち國威の振張を急務とする今日の情勢に何れが適りや。彌陀本願のみを唯一の信條とする淨土の教へと、諸法の實相を說きて佛陀の本地を開顯せる法華經の教へと、理智進みたる今日の人を導くに何れ

自力教の長所短所
他力教の長所短所

が適せりや。信仰の獲得は理智を超越すべきものなることを屢述べたれど、理智を全く外にして信仰を說けとにあらず。理智の境を超越すとは、理智を退くるにあらざるのみならず、現在持てる我等の理智を十分擴充せしめ其の極まる所に絕對界の風光を看取すべき信仰の湧起し來るを云ふなり。淨土宗派の開山も法華經の最勝なるをば認めたれど、其の敎へ餘りに高ければ我等の機にあらずとして彌陀の本願により信仰に入る道を示されたるなり。然かも日蓮上人の活釋により法華經は機根の優劣に關らず、智識の深淺の隔て無く、一樣に信仰の樂しみを頒つ經典となるに至れり。自力の敎へは天賦の靈力を發揮するに存し、奮勉努力、開發進取の氣象を養成するに適すれど、絕對信仰の樂しみに達し難き怨みあり。他力の敎へは直ちに信仰の源泉に觸れて報恩感謝の人となり、和樂に滿ちたる生涯を送らしむる利益あれども、天賦の靈力を發揮すてふ觀念の薄らぎ行くを免れず。日蓮上人の敎へにありては其の當體蓮華の開發を語る處に自力の色彩顯著なれども、地湧の菩薩に非ずんば唱へ難き題目なりてふ敎へに歸する時、立派なる他力信仰は成立するなり。唯一念の念佛に彌陀の救濟確かなりとの親鸞の敎へと、唯一唱の題目に地湧の菩薩を保證すてふ日蓮の敎へと其の趣き甚だ似たり。日蓮宗は實に自力他力の長所を備へて其の短所を補へり。自他を超越せる妙力なりと稱する人あり、げにもと頷づかるゝを覺ゆ。

日蓮上人の敎へは自力、他力の長所を具へて短所を補へり

妙力

法華經と日本國との因緣

更に繙りて法華經と我國との關係を考ふるに其の因緣の深き、寧ろ驚くべきものあり。我國佛敎の元祖におはする聖德太子は先づ法華經を取りて治國の要諦となし、其の精神を基礎として大化新政の源を開き、奈良佛敎の頽廢しかゝるや傳敎大師、法華經を以て國家鎭護の大道場を叡山に開き日本諸宗の總本山となし、末流別れて其の歸着を失はんとする鎌倉時代に、日蓮上人立正安國を高く唱へて法華經の精神を極度まで高

潮し、一切諸宗を統一せんとせり法華經を唱ふる時、國家を稱へざるもの無きは法華經の敎理の然らしむる所なるべしと雖も、或は諸經の上に、或は印度、支那の諸高僧の言に法華經は日本國に流布する因緣ありと豫言し置かれたるもの多きを見る時、玄妙なる理の其の間に存するを否認する能はざるなり。大日經と稱し、華嚴經と稱するも知らざる人多けれど、法華經の名を知らざる人はあらざるなり。如何なる事を說けりやは知らざるも法華經は佛敎の極意を說けるものなりとは誰人も云ふ所、或は法華經轉讀と稱し、或は法華經書寫と云ひ、之を唱へ之を寫すを無上の功德と信じたるは佛敎渡來以後絕えず行はれたる國民信仰の意識なりき。斯くまで我國と遠く深き因緣を有する法華經は愛國の權化日蓮上人の體讀によりて生氣潑溂たる生身の敎典となれり。退いて觀念の空にのみ眺めし理想の月は現實生活の上に不斷の光となりて我等國民を導くに至れり。日本國の精華を世界に發揚すべき機運に際し、日蓮主義の勃興し來れるもの決して偶然にあらざるなり。

日蓮宗は世界的にして又純國家的なり

日蓮宗の世界的なる所以

日蓮宗の純日本的なる所以

宗敎は世界的なるべしと云ふ。誠に然り。しかも漫然として一視同仁なる宗敎は國家的觀念と相容れざるものとなるを免れず。人類の生存幸福を保つに於て國家の存立の極めて必要なる以上、之と一致する敎への必要なるは云ふまでも無きことなり。されど一國に偏する敎へは公平なる他觀の立場に在る人をして其の眞理なりやを疑はしむ。日蓮宗は立派なる世界的宗敎にして又我國民にとり絕大の力を生ぜしむる純國家的宗敎なり。甚だ矛盾するが如くにして矛盾にあらず。佛敎の世界的宗敎なるは誰人も異議なき所、而して法華經は之が肝心なり。法華宗の世界的なるべきは當然ならずや。然かも種々なる豫言と、千數百年間歷史の上に顯はれたる數多の事實と、其の說相の我國體の精華に一致せるとは先づ日蓮上人の活眼によりて見出され、

上人の信仰的生涯は端なくも法華經文々句々の體讀となり、茲に末法附屬の大導師上行菩薩の現顯は事實となりて法華經は點眼せられ、我國と離るべからざる純粹の日本佛教となりたるなり。其の國家的なるもの決して迎合にもあらず、御都合にもあらず、牽强附會の說にもあらず、大信念より生じて正々堂々たるものなり。法華經と日本國との因緣斯くの如しと云はゞ他國の人は法華經と如何なる因緣ありやと問ふ人あらん。

反問に對する答

吾人は之に答へて宗教は純主觀的のものにて敢果無く思へる自己の生命に不滅の靈火を點じ、金剛不壞の信念に座して變轉極まりなき所謂不如意の浮世を化し希望の光り滿々たる常樂國土となし、徹底せる意義の下に生活を營なましむるにあり。我等法華經に特殊の因緣あるを感得し、地湧の菩薩の自覺起り、苦は苦と悟り、樂は樂と開きて聖凝する處なく、妙法蓮華の大理想を我は實顯するなりと、國民一同、大勇猛心、大歡喜心に滿たされて理想の國土を建設するに至らば我等の要求する宗教の目的は達せらるゝにあらずや。他國の人は各自其の立場に應じて信仰の道を見出さん。我れ未だ五里霧中の彷徨に在りながら何を苦しんで他國の人の上に心を勞するやと云はんのみ。但しこは自己の安心を求むるために宗教を見ず、徒らに他觀的批評にのみ耽ける人に與へたる答へなり。佛教は他より之を見ば對比的一ケの宗教に過ぎざれども、信仰の人にありては宇宙の萬有悉くこれ佛道なり。一切衆生をして悉く成佛せしめんとするもの卽ち佛陀の本願にして時に古今の區別無く、所に東西の隔て無し。何ぞ獨り我國のみに厚しと云はんや。唯過去の因緣多樣なるに從つて現在の果報萬樣なれば緣に從つて濟度せんとす、これ平等の中に差別の生ずる所以なり。因緣最も深き日本國に先づ佛國土を建設し次第を追ひて世界を救はんとする佛陀の大悲心と解すべきこと前章に於て述べたる如し。

日蓮主義の世界的となれる日は日本國精華の世界的となれる日なり

日蓮主義者の用意

されば法華經は世界的なれど日蓮上人を通したる法華宗は當分純日本佛教なり。他國に向つて粹かに宣傳すべきものにあらず。先づ我國民を覺醒し、地涌の菩薩の自覺と共に日本國の使命、法華經の眞髓を悟らしめ、國を重んじ身を重んじ、上仁に下和し、一切の職業に意義ある生命の跡を印して山川國土悉皆成佛の境に達せしむべく勉むべきなり。我に大乘佛國土の建設成らば世界の人も終には之に歸向して南無妙法蓮華經を唱ふるに至らん。日蓮宗の世界的となれるの日は卽ち日本國の精華の世界的勢力となれるの日なり。此の時に至りて萬國一同に南無妙法蓮華經と唱へんこと大地を的とするとの日蓮上人の豫言的中し、十方無礙透徹の理想的佛國土は顯出し來るべし。コーランか劍かとはマホメットの敎へなり。日蓮上人の敎へを以て之に擬するは甚だ當を失へり。劍を以て信仰を强ふる時代は既に過ぎ去れり。上人の折伏的態度の表面のみを見て其の形を學ばんとするは眞の日蓮主義者にあらざるなり。上人の遺文を讀む者も徒らに字句の上にのみ拘せず、之を時代の上に活釋すること上人が法華經を活釋したるが如くなるべし。四箇の格言は日蓮主義者の堂々押立つべき旗幟なるを疑はず。然かも其の字句に拘泥せずして精神に徹底すべきこと勿論なり。而して折伏者は絕對權威の宣言に從つて戰ふだけの準備をなさざるべからず。已れの信仰、已れの行動未だ人を歸服せしむるに足らずして徒らに他を破するとも誰かは從ふべき。已れの動行未だ人を服せしむるに足らざる間は自ら修むるを主とし、人を說くには詢々として親切なるべし。他宗の人、門外の人と雖も德高く、行正しきをば十分之を尊重すべし。我說く法門は如何にも高きものなれど顧みて我身の信行に及ぶとき忸怩たらざる者幾人ありや。地湧の菩薩の自覺とは磨かば六合に滿つべき光りを包める寶石の未だ麁鑛なるを得たるにも譬ふべきか。自ら修むるとは之を研くなり。研きて光りの發しなば人に貴とまるゝは自然なり。麁鑛

の儘にて我は光りありと稱するも容易に人は頷かざるべし。已れの渡らざる前に人を渡すは大乘佛教の本義なりと云ふ人あり。然り、こは佛陀の大悲を云へるなり。已れの信仰を他所にして人を導けとにあらざるなり。人の心は言說のみもて動かし得べきものにあらざるは古來默々として人を化したる數多の高德あるに照らして明かならずや。言說を逞しうして徒らに人の感情を害するが如きことあらば反りて日蓮宗を衰微せしむる所以となるべし。他宗の破折は日蓮上人十分之を遂行し給へり。今日の日蓮主義者は宜しく其の折伏の意義を一般に徹底せしむることに勗むべし。科學的なる、懷疑的なる現代人を信仰に導くには科學的智識を理解し、懷疑の起る源を尋ねて之に同情し、懇切に導くより善きはなし。日蓮上人は當時のあらゆる智識を兼ね給へり。之が法脈を承けたる現代の日蓮主義者亦宜しく智識を世界に求めて弘法、宣傳の材料となすべきなり。日蓮主義者の用意眞に斯の如くならば機運に際會せる日蓮宗は破竹の勢を以て進み行かんこと火を睹るよりも明かなり。

以上は國家觀念の思潮と佛道の敎と相抵觸せざるのみならず、日蓮上人の敎義は實に我國體の精神と離るべからざる純日本佛敎なることを再說せり。次に科學思想と佛道との關係を述べん。

科學と宗敎とは別種の根底の上に立つ

八、科學と宗敎

科學と宗敎とは元來其の目的を異にし別樣の根底の上に立つものなれば互に衝突を來すが如きこと無かるべき筈なれど、科學者が他觀的に萬象を研究する結果、宗敎の根底に疑ひを起し、一の迷信として之を破らんとするものあるは亦理由無きにあらず。根底薄弱なる宗敎が之がために破られ行くは寧ろ喜ぶべき現象と云ふ可し。されど宗敎本來の生命は嚴として獨立し、決して科學發達のために阻害せらるべきものに非ざるのみならず、動もすれば宗敎に附隨し來らんとする諸種の迷信を一掃して正しき宗敎の面目を發揮するに科學の發達は關かりて力ありと云ふ可し。されど科學を以て一切萬事を解決し得可しとし、宗敎無用論を唱ふるものあらば甚しき誤りなり。相對象なる智識のみを基礎として建設せられし科學は自ら制限ありて萬有の眞相を悉く闡明し得べきものにあらず。宇宙は無限なり。右に向ふも極まり無く、左に向ふも極りなし。右に向つて無限に進み行くとも、左の眞相は終に知るべからず。科學は科學として無限に發達し行くとするも、宇宙の大に比して知り得べき所甚尠なく、不可解の領分非常に大なり。自然科學發達の理論的基礎をなせる幾何學に於て平行線を論ずに同一平面にありて一定直線に平行なる直線は如何に延長するも相交はることなしとはユークリット派の定論なれど、非ユークリット派にありては是等平行線は無限の距離に於て幾度も相交はるものとなす。初めに一双の平行直線を想定して之を無限に延長する時ユークリット派の說を肯定せるれど、一組の相交はれる直線を想定して之を平行の位置に直さんと思ふ時非ユークリット派の說を否定する能はざるは數學を學べる人の誰も知る所なり。理論の嚴正を尊ぶに於て今日の學問中幾何學に如くは無かるべし。而して其の幾何學の基礎たるべき平行線の原理に矛盾せる理論の併立するは何故ぞ。吾人の智識の有限にして無限を知る能はざるを幾何學的に證明せるものにあらずや。又彼の熱力學の第二定律を推論し行く時は一切のエネルギーは最後に使用すべからざる熱となりて一樣に瀰漫し、凡ての活動的現象悉く屏息して宇宙の終焉を來すべしてふ所謂エネルギー變衰論となる。而かも無より有を生ずる能はざるは自然科學の原則なり。宇宙の活動は如何に大なる數を用ふるとも其の始まりを云ふ能はず。假りに其の始めを云はんとすれば無より有を生ずてふ撞着を來すべし。既に始まり無し、從つて宇宙活動の終焉を云々するは之亦撞

科學發達の宗敎に及ぼせる力

幾何學原理の矛盾

人智有限の幾何學的證明

エネルギー變衰論の撞着

科學的智識の有限なりてふ科學的證明

科學の權威の行はるゝ範圍

潜にあらずや。或は宇宙の始まりは活動にあらずして一種の潜勢力なりしと云ふものあらん。而かも其の潜勢力の源や如何に。科學の智識は潜勢力の源を活動に歸す。然らば活動は潜勢力を生じ、潜勢力は活動を生じ、轉々して終焉なきこそ宇宙の眞相と云ふべけれ。斯く自然科學の結論に矛盾を生ずるは豈に推理的自然科學の智識の有限なることを科學的に證明せるものにあらずや。凡ての科學は自然科學に伴へるものにして自然科學は一切科學の基礎をなせり。從つて自然科學に缺陷あらば一切科學の根底に缺陷あるを免れざるべし。要するに科學は制限せられたる人間の顯意識的感覺にて宇宙の大に比し殆んど比較すべからざる小數の實驗を基礎とし、數學的推理力を用ひて之を統一し得べき定律を作りたるものなれば決して萬代不易のものにあらず。我等の遭遇する他の現象を此の定律にて說明し得る範圍内に於てのみ其の權威を有するものなり。光に關するニュートンの光素說がフレネルのエーセル波動說にて破られ、更にローレンツの電磁氣說之に代る。分子說が原子說となり、原子說亦電子論にけ壓さる。元素の不生不滅を絕對の眞理の如く唱へられしは既に過去に屬してラヂュームの發見は元素の崩壞を事實に示し學者を驚倒せしめたり。物質とエネルギーとの區別すら今は學者の疑問となれり。斯く有限的なる科學の定律を無限に擴張して一切を解決せんとす。其の推論の常に撞着を來すは當然の事と云ふ可し。元來科學は人間の智識欲を滿足せしむるが目的なれば人智の進歩に伴つて改まり行くべき性質のものなり。從つて今是の昨非と變るは怪しむに足らず。科學に依りて人生を解決し、安心を其中より求めんとするは科學者の欲する所なるべしと雖も、斯く其の根底に變化を認容しある科學の力にて絕對の眞理に到達するや否やは疑問なり。假りに百步を讓り、科學に依りて人生問題の解決を得たりと信ずる時來れりとするも、飽くこと知らぬ人間の欲情を其の儘にして安心立命を此の中に求めしめ得べきや否やは更に大なる疑問なり。智識の解決のみにて情意の滿足を得べからざるは人間の事實なり。

見惑頓斷思惑漸斷

科學者の告白

宗教の理論に於て納得するも眞實の安心を得る能はずして煩悶せし古來高德の實際談は本書に於て屢々述べたり。佛教に所謂、見惑頓斷破石の如し、思惑漸斷繭絲の如しと教へたるは智識的迷ひは一朝の悟りに破石の如く快然たるを得ることあれど、欲情的迷ひは斷ち易きが如くにして反りて容易に斷ち難きこと繭絲の如きものなりとの意なり。永井潛博士が其の著生命論の末尾に「人間の死は自然のものなれば恰も一日勞働せる人の眠りを欲するが如く安んじて死に入るべきものならんと思へども前途甚だ遼遠にして果して何れの時なりや殆んど其の曙光だも認むる能はず」と嘆聲を發せられしもの科學者の僞らざる告白なり。吾人は何れの方面より考ふるも科學は人生に徹底的安心を與ふべき性質のものと思惟する能はざるなり。理非の判斷は智識によりて之を知る外なし、智識に依りて求むべからざるものを何によりて求めんとするかと問ふ人あらん。斯かる人は理非の間に彷徨する相對的智識（有漏智）あるを知りて直ちに宇宙の大靈に接觸する絕對智（無漏智）あるを知らざるより起る疑問のみ。自然觀察の進み〳〵て宇宙の靈妙益々加はり人智の及ぶべからざるを知りて歎聲を發する刹那、心内微かなる所に一種の靈感起り來るもの無漏智開發の端緒ならざるを知らんや。理學者の泰斗ニュートンが熱心なる神の信者なりしと云ふもの、進化論の開山ダーウヰンが天を覆へる大森林にさしかゝりオゝ神よと、思はず拜跪せりと云ふもの、哲學者として又物理學者として其名を知られしフエヒネルが難治の病氣全快するや忽然として來世の信念熱烈に起れりと云ふもの、其他自然科學者の知名なる人にして宗教的信仰に入れるものゝ數多あるは畢竟何を語るものぞ。有限的智識の極まる所に絕對智顯はれ來ると先きに述べたる寒書きとも見るべきにあらずや。心理學者は心理的に信仰問題を解決せ

相對的智識と絕對智

自然科學者の宗教的信仰

科學と宗教との目的の相違

んとするも心の本體に至りては終に何等の說明なし。解剖學の進步は實驗心理學を促して身心相關の理を說明す。然かも何故に斯かる靈妙なる構造を致せりや、其の絕對の根源に對しては何等の答をもなさゞるなり。幾度も繰り返すことなれど哲學、科學は人間の智識欲を滿足せしめんとふ希望の下に出發し、宗教は樂しんで眞理に殉すべき情操を心內に擊發せしむるを目的とするなり。從つて前者の眼は只管外界に注がれて知らんことを求め、後者の眼は內に向つて常に不動の立脚地を求む。二者何れも人間の本能的欲望にして之あるが爲めに向上の途開かるゝなれば科學の人生に必要なる如く宗教も亦絕對に必要なること最早云ふまでも無かるべし。されど二者元來同一なる心の作用に外ならざれば其の間に劃然たる區別を立て難きより宗教的情操の發して形式をなすに當り種々なる矛盾の跡を示せり。現在の小さき自己に滿足する能はず、大なる天地の威靈に接觸せんとする內心の要求動き出して宗教的情操となり、靈德ありと認むる身外の或る物と呼應して宗教的信仰の成立したるは宗教歷史の示す所なり。宗教的情操は單純にして普遍的なりとするも外界の現象萬樣なれば對象に應じて其の宗教的信仰多岐に涉るは自然の結果なり。而して一面には有漏智の之に判斷を下すあり。宗教的情操には或は靈と稱し、或は法と呼び神祕的要素を含むが本體なり。之を解するに低級の有漏智を以てすれば玆に一種の迷信釀成せらるゝを免れず。有漏智の進步と見るべき科學の智識進むに從つて不合理なる迷信に包まれし宗教の根底にまで疑を起し之を破らんと試みたるも無理ならぬ次第なり。之あるがために根底薄弱なる迷信的宗教次第に除去せられ、不純より純粹に、淺薄より深遠に進み行きつゝあり。吾人冀きに科學の發達が正しき宗教の面目を發揮するに力ありと述べしは此の意味に外ならず。然かも眞實迷妄の闇を拂つて眞理と一如せられし大聖の悟界のみは絕對純粹なるものにして科學の力の左右し得

迷信的信仰の釀成せらるゝ理由

科學者の宗教を破せんとする理由

科學の賜物

大聖の悟界は絕對なり

べきものにあらず。斯かる大聖の實在を信じ其の悟界に向つて憧憬するものこれ卽ち旣成宗教の完全なるものなり。若し夫れ斯かる大聖の存在を信ずる能はずと云ふ人あらば、そは理智に捉はれて誠の人情に通ぜぬ人なり。親を思ふ念厚き人は孝養の人を尋ねて隨喜し、君恩に泣く人は忠臣を求めて讚美す。古今茫々幾千載、心誠に之を求むる時、已れの理想と共鳴する一人の聖人君子無しと云はんや。吾人は眞實究竟の悟界に達せられし大聖を釋尊に於て仰ぐを得たり。從つて吾人の見たる佛敎は天地を貫き萬世を通じて不易の眞理を含めるなり。唯人師の有漏智を以て解釋せるものには不當の迷信も伴へり。是等不純の佛敎を槪括して假りに舊式佛敎の名目を附し、德川時代の終りと共に過去帳記錄のものとなし、明治、大正の科學の光りに堪へざるものは消え去らしめ、鏗爾として響きある佛敎の精粹の、國粹と一如せるものゝ發揚を勗めんとするが本書を草せる吾人の目的なり。

旣成宗教

大聖釋尊に於て仰ぐ

本書の目的佛者の眼より觀たる科學

佛敎信仰の立場にありて科學進步の現狀を見るに幼兒の次第に智惠つき行くを見るの感じあり。一切の不生不滅は佛敎根本の哲理なり。科學は最近に至りて漸やく物質不滅、勢力不滅を認知して自然科學の根據とせり。因果の法は佛敎の生命なり。科學者の研究亦此の埒外に出づる能はず。薰習せられし慣習により或は向上して佛身を成じ、或は下りて畜身を現ずとは佛敎の敎ふる所、進化論は其の一部分を科學的に敍述せり。佛敎の世界觀は無量無數の國土を說く。近世天文學の發達は此の說明に裏書きせり。而して成劫の間に宇宙開闢し、住劫の間に萬物生成居住を營み、壞劫の間に破滅して空劫を顯じ、更に成住壞空を繰返すてふ四劫の循環說は自然科學者の贊せざるを得ざる所となれり。我等の體內別に靈魂等稱する物の存在する無しとは佛陀の力說せられし所、科學の說亦玆に一致せり。佛陀が一切を包藏して宣言せる法界微妙の眞理の物的方

四劫の循環說

宗教を科學的に解する弊
永久生命の科學的解
常識的解

面のみを漸やく自然科學に於て立證し來れるものと思はず、微笑まるゝ心地もするなり。

されど又一面に於て科學的智識のみを以て宗教を解釋する者多き結果、餘りに常識的に傾き、宗教的修練の實成績薄らぎ行くかの感じあり。例へば永久の生命と云ふを解して後世に傳はる名譽の如く說明する人あり。名譽亦其人の生命の一部なるべけれど宗教にて敎ふる未來の生命は決して名譽を指せるにあらず。名譽の如きは傳へんと求むべきものにあらず、自然に傳はるを本義とするは少しく道を知る者の誰も頷づく所なるべし。或は人の事跡は其の大小に關はらず悉く後人に影響を與へて無窮に存すれば、これこそ永久の生命なれと論ずる人あり。これ亦一應の同理あれども所謂一片の理窟のみ。斯かる事にて花に歌ひ月に悲しむ纏綿たる人間の情操を滿足せしめ得べきにあらず。或は子孫に生命の傳はるを論ずる人あれど、斯くては子無き人の生命は如何にして永久を求むべき。昔時宗教の弊は迷信の多く伴へるにありき。今日亦此事無きにあらざるも、所謂智識階級の說明あまりに科學的常識的なるもの確かに一の弊風なり。科學的說明のみにて滿足すと云はゞ宗教の必要は既に無きにあらずや。宗教の生命は科學のみにて知る能はざる靈の實在に向つて信仰を捧ぐるにあり。野の花一つ採りて調ぶるも其所に神祕の分子あり。草露にすだく蟲の音にも其所に神祕の響きあり。神祕の領域は曠々として宇宙を覆へり。科學者亦神祕の域內にありて僅かに東西を批議するのみ。批議する自已の既に神祕の傀儡たるを悟らず、尺寸の技巧に自然を征服せりなど已惚るゝ可憐の子なり。神祕を神祕と觀ずるこそ正直なる人間の觀察なれ。古來奇跡と稱するもの、種々なる訛傳、迷信附隨して玉石混淆せるは云ふまでも無けれど、我等は偉人の行跡のみならず、我等相互の間にも常に奇跡の伴ひあるを確信するものなり。辿り來れる我等が短かき生涯を深夜人定まりて熟々と觀じ見よ。弱き身の反りて

神祕の世界

奇跡に就きて

宗教の力
因果の理

佛教にて云ふ永久の生命

個人の徹底的安心

く生き殘り、强かりし多くの人の忽然として世を早めし奇跡は無きか。百里の外に母の悲しむと夢みし後に息才なりし父の計報に接せし奇跡は無きか。名醫に捨てられし重患の信仰の力にて癒えたる奇跡は無きか。十年の交友と計畫せる事成らずして圖らざる未知の人との會見に新運命を開拓したる奇跡は無きか。死を覺悟して却りて助かり、安全の道を講じて不慮の禍に罹りし奇跡は無きか。夫れより夫れと思ひ廻らさば奇跡の數は暮れ行く空の星の如くに增し行くべし。是等の奇跡を總合して解決を與へ、其の間に連瑣せる意義を十分味はゝせて趣味津々たる生を送らしむるもの實に宗教の力なり。

因果の道理に關しても常識論者は唯現實に於てのみ之を云ふ。現實の科學的論も一應可なれども佛教の說明茲に盡きたりと思はゞ甚しき淺見なり。佛教の三世因果の說明は決して歷史に記載せらるべき範圍に限れる所謂現實論にはあらざるなり。佛教に於ては靈魂等云ふ遊離性を帶びたる物的存在を否認すれど身口意三業の自ら因をなして之に應ずる第二の生の開かるべき微妙の法を認むるなり。過去と云ひ、現在と云ひ、未來と云ふもの悉く現在思惟しつゝある此の生身の我等が過去、現在、未來なり。我身と稱するも因緣の集合に過ぎざれば我身の實體なるもの無く、從つて靈魂等云ふ固定的の物を否定するは佛教自然の結論なれども惑業の息まざる限り常に因緣集合の種子存續すべきは勿論なり。佛教の靈魂否定は婆羅門派系の捉はれたる物的靈魂を破せるものにして我の實體なしとは對比的我執を去り、眞如の法體に融すべき大我の覺りに達すべきを說けるものなり。惑業盡くる時、此の法樂に浴し得べく是れ卽ち涅槃の境界にして永久の生命とは之を指すなり。

宗教は飽くまでも個人の徹底的安心を獲得せしむるを本務とするものなり。國家主義と相容るゝや否や、

個人の安心と道德と國家

道德と相容るゝや否やは第二義門なり。唯個人の安心を求むる時、自然に國家主義と冥合し、期せずして道德の根本と相融するに及んで忠孝信義其の他の諸道德は油然として衷心より涌出すべきなり。若し强ひて國家に迎合せんとし道德に結び付かんと謀むるものあらば尠なくとも方便的の宗教たるを免れざるなり。されど國家にして法に適ひ、道德にして自然に合し、（枝葉の形式は如何にもあれ其の精神に於て云ふ）宗教にして完全なるものならしめば三者の一致融合すべきこと當然なりと云ふべし。何となれば國家は因緣近き人類の團體を保護するものにてあり、道德は人類相互に敬愛の念を尊重して高尚なる福利を進むるものなれば人類各自の安心を求むる宗教にして完全なるものならしめば前者と相容るゝの當然なるを覺ゆればなり。宗教は個人の安心を求むるに應ずるを本務とすと說かば國家主義者の狷介なる一派には個人の幸福と國家の利益と相容れざる場合は如何に所すると危ぶむ者あらん。然り、不完全なる宗教にありては斯かる懸念も無きにあらず。然かも我が佛教にありては國家の成立と個人の存在とを機械的に見ずして深厚なる因緣に基づくと感ずるなり。我等が僅々五十年を生涯と見ずして永久の生命を信ずるなり。泡沫に等しき短生涯の利害のみを考へて因緣深き國家を捨て未來無限の苦因を作るに忍びんや。臭き頭を法華經の爲めに捧げんは石に黃金を易ふるが如してふ聖者の觀念は、やがて御宮仕へが法華經なりと敎へられたる信者の國家觀念となるぞかし。更に一切衆生佛性ありとの觀念は道德の根本をなすを思はゞ個人の徹底的安心を與ふる佛敎は卽ち國家、社會の要素たる道德を完全に築き上ぐる究竟の根底たるを知るべきなり。

完全なる宗教と、完全なる道德と完全なる國家

眞の佛教の國家觀

世には現實主義の宗敎と云へば之を尊とび未來主義と云へば之を斥くる風潮あり。例へば日蓮主義は現實主義なれば我等の理想に叶へり、淨土の敎へは未來主義なれば之を採らずと云ふが如し。されど現實と云ひ未來と云ふも一貫せる永久の生命に對して何等の差異ありや。時間の經過と共に今の未來は刻々現實となり來るなり。現在の我の不完全なるを覺り、修行を積んで未來の完成を期する所に現在の價値の存するなれば未來の理想なき所謂刹那主義なる現實論は一夜の歡樂に現を抜かす放蕩兒の悅ぶ所、我等をして云はしむれば全く無意味なり。日蓮主義を指して現實主義と云ふは未來のみを尊とんで現在を輕んずる一派の宗派に對せる名稱のみ。例へば努力を積んで富貴を致すとせんに、努力を輕んじ富貴のみに憧がるゝを戒しめ、努力そのものに絕對の價値あり、之を外にして未來の富貴なきを敎ふるが完全なる現實主義にして日蓮主義亦此の意味に於ける現實主義なり。又一方には現に生息しつゝある此の國土を穢土と厭離して死後に來るべき他界の淨土を欣求する思想に對し、此の國土と現在の我身とを外にして他方に淨土の求むべき無きを力說するもの現實主義の主張なり。佛敎は因緣の敎へなり。一樹の蔭に宿り、一河の流れを汲むもの皆他生の緣にあらざるは無し。因緣最も厚き此の國土衆生を外にして他界の淨土に生るゝと云ふが如きは佛敎根本の思想と違背せり。卽ち光輝ある未來と直接の連瑣を有する現在を重んずるに於て現實主義は有意義なり。

現實主義に就きて

人身を得たることの悅びを讃するもの佛敎に如くは無かるべし。或は優曇華の咲くに譬へ、或は盲龜の大海に浮木を得るに例へたり。斯くまで人生に價値を認むるものは偏へに向上の理想を有し、成佛の修行を積まんこと人生を外にして得べからずとすればなり。されば一面に人生の價値を高潮し乍ら他の一面に於て泡沫夢幻の浮世と觀じ、苦界と呼び、穢土と稱し、只管出離の道を敎へたり。甚だ矛盾せる如くにして矛盾にあらず。人間界は止まるべき場所にあらずして進むべき唯一の場所なるを示したるなり。滿足すべき所にあらずして努力すべき唯一の場所なるを悟らしたるなり。而して佛徒の仰ぐ理想の目標は靈山淨土に久遠劫來

佛教の人生觀

高く澄みたる月の影。

日本佛教外史 終

◎佛教外史略年表

皇紀	佛滅紀	日本	支那	印度	参考欄 西洋
前三六八	前七九		周ノ昭王二十六年	釋尊降誕 盛時ソロモン王時代ニ近シ	ヘブライノ
前三三九	前五〇		周ノ穆王四年	釋尊成道	
前二九〇	一		周ノ穆王十三年	釋尊入滅	エジプト王シサク一世エルサレムヲ取ル
前一七五	一一五		周ノ厲王四十五年頃	經典第二結集	リコルゴスパルタノ法典ヲ定ム
前七〇	二二〇頃			阿育王ノ治世、經典第三結集、大天出ス新義ヲ	黒人種エジプトヲ征服
一	二九〇	人皇第一代神武天皇御即位			
一一〇	四〇〇	人皇第二代綏靖天皇	周ノ靈王ノ世孔子生誕		
一三九	四二九	人皇第三代安寧天皇	周ノ昭王世孔子禮ヲ老子ニ問フ		
一六〇	四五〇頃	人皇第四代、懿德天皇	周ノ敬王	迦膩色迦王ノ治世ノ頃	ペルシヤ戰
三四七		人皇第六代孝安天皇	孟子七編ヲ作ル	馬鳴菩薩、龍樹菩薩等出世、第四回結集	脇尊者ノ一百九十年ソクラテス生ル
四一〇	七〇〇頃	人皇第七代孝靈天皇	周末秦ノ始皇帝	提婆菩薩出世、鐵イテ出世	第一ヒューニツク戰爭
六一〇	九〇〇頃	人皇第十代崇神天皇	漢宣帝	無着菩薩世親菩薩等出世	ケーザル、ポンペイウス抗爭當時皇紀六百五十七年キリスト生誕

七二五	一〇一五	人皇第十一代垂仁天皇	後漢ノ明帝蔡愔等ヲ印度ニ遣ハシテ佛教ヲ求ム	ネロ帝時代第一次キリスト教徒ノ迫害、	一〇六六頃	一三五六	人皇十七代履中天皇
七二八	一〇一八	垂仁天皇	白馬寺立ツ	ネロ帝弑セラル、	一〇七〇	一〇九九	人皇十八代反正天皇
八〇八	一〇九八	人皇第十三代成務天皇	後漢ノ桓帝ノ時高等支那ニ禪教ヲ傳フ				
九〇〇頃	一一九〇	人皇第十五代應神天皇	三國時代康僧會ノ譯ス、無量壽經ノ譯、竺法護ノ譯ス、竺律炎ノ句經ノ譯アリ	此ノ頃ローマ國一千年祭ヲ行フ	一〇八〇頃	一三七〇	人皇十九代允恭天皇
九四六頃	一二三六	應神天皇	西晉武帝ノ時竺法護正法華經等數多ノ譯經ヲナス	ヂオクレチヤンス帝、	一一三六	一四二六	人皇二十一代雄略天皇
一〇〇〇頃	一二九〇	人皇第十六代仁德天皇	東晉成帝ノ時佛圖澄布教ニ勗ム	コンスタンチヌス二世戰死	一一七〇頃	一四六〇	人皇二十六代繼體天皇
一〇三九	一三二九	人皇第十五代仁德天皇	釋道安法ヲ弘ム				
一〇五〇	一三四〇	同前	盧山ノ惠遠白蓮社ヲ結ブ	羅馬帝國分裂			

一一八二	一四七二	仝前	欽人司馬達等來朝、				
一二一二	一五〇二	人皇二十九代欽明天皇	佛教始メテ日本ニ渡ル、蘇我、物部二氏ノ爭ヒ、	陳、隋ノ時代惠思禪師ノ南岳ニ入ル禪宗二祖惠可寂、	ヂオドリヒ死ス	一二六四	一五五四
一二三四	一五二四	人皇三十代敏達天皇聞德太子生誕、	智者大師天台宗ヲ開ク嘉祥大師三論ヲ拳揚ス		コンスタンチノープルノ宗教會議マホメット生誕	一二六六	一五五五
一二四七	一五三七	三十一代用明天皇、物部氏滅亡、四天王寺ヲ建立ス				一二六七	同上
一二四八	一五三八	三十二代崇峻天皇元興寺建立				一二六八	一五六〇
一二五三	一五四三	三十三代推古天皇、聖德太子攝政、	開皇十七年智者大師寂		ローマ法王グリゴリー世	一二七〇	同上
一二五六	一五四六	同上百濟惠慈來朝、法興寺ヲ建立ス、				一二八一	一五七〇
一二六一	一五五一	同上聖德太子南買ニ賣買ノ術ヲ敎フ、			アゴスチンローマ法王ノ命ニヨリ英國ニ布敎	一二八四	一五七四
一二六二	一五五二	同上百濟僧觀勒天文、地理等ノ書ヲ獻ズ、				一二八五	一五七五
一二六三	一五五三	同上官位ノ制ヲ定ム				一二九二	一五八二

十七ヶ條ノ憲法制定、
詔シテ釋迦佛ノ像ヲ作ラシム、
同上金剛寺建立、小野妹子ヲ隋ニ派遣ス、
同上勅シテ天神地祇ヲ祭ル百濟寺、法隆寺等建立
同上妹子等歸朝、
同上高麗僧墨徽來朝、紙墨等ノ製法ヲ傳フ
同上聖德太子及ビ馬子等ニ詔シテ天皇記、國記ヲ撰セシム、
同上、聖德太子薨去、
同上、高麗僧慧灌來朝シ三論宗ヲ弘ム、
同上、僧正、僧都等ノ官ヲ設ク、
郭三十四代舒明天皇、遣唐使歸朝、僧日文等隨ヒ歸ル、
唐ノ太宗ノ貞觀七年、支那三藏天竺ニ入ル、寒山拾得天台山ニ隱ル

マホメット、瞑想ニ耽ル、
マホメット始メテイスラム教ヲハジム、
戒賢論師出世
マホメット歿ス、

一二九四	一五八四	同上、役ノ行者生誕、			サラセン人ペルシヤヲ破ル	一三四五
一三〇〇	一五九〇	同上、高向玄理等歸朝、	真觀十四年華嚴宗ノ祖杜順寂			一三五九
一三〇三	一五九三	第三十五代、皇極天皇、田背大兄王薨去、	真觀十七年賢首大師生ル、			一三六〇
一三〇五	一五九五	第三十六代孝德天皇、蘇我木滅亡、大化ノ新政、	真觀十九年玄奘天竺ヨリ歸ル、			一三六一
一三〇六	一五九六	同上、僧道昭宇治橋ヲ作ル、	瑜伽論、般若心經等ノ譯成ル、	サラセン人アフリカヲ犯ス、		一三六三
一三一三	一六〇三	同上、白雉四年、僧定慧道昭等入唐、				
一三一七	一六〇七	第三十七代齊明天皇、始メテ盂蘭盆會ヲ行フ、鎌足山階寺ヲ建立ス			サラセン東ローマト和ス	一三六六
一三一九	一六〇九	同上、諸國ノ寺院ニテ盂蘭盆經ヲ講セシム	大般若經ノ譯成ル、			一三七〇
一三二九	一六一九	第三十八代天智天皇、行基菩薩生誕、	唐ノ高宗ノ世、華山律師（道宣）寂			一三七一
一三三三	一六二三	第四十代天武天皇、（白鳳元年）始メテ一切經ヲ河原寺ニ寫サシム、				一三七七
一三四〇	一六三〇	同上、始メテ金光明經ヲ宮中及ビ諸寺ニ說カシム、	唐ノ玄宗ノ世、慈恩大師寂		コンスタンチノープルノ宗教會議	

一三四五	一六三五	同上、詔シテ毎戶ニ持佛堂ヲ置カシム				
一三五九	一六四九	第四十二代文武天皇、役行者ヲ伊豆ニ流ス	新譯華嚴經成ル		サラセンロマヲ和破ル	
一三六〇	一六五〇	同上、元興寺ノ道昭寂、始メテ火葬ヲ執行、	唐ノ中宗ノ世、義淨金光明經ヲ譯ス			
一三六一	一六五一	同上、（大寶元年）大寶律令成ル、始メテ孔子及ビ十哲ヲ大學寮ニ祭リ名ヲ釋奠ト云フ				
一三六三	一六五三	同上、（大寶三年）僧義淵酒正トナル、持統上皇崩御、遺詔ニヨリ火葬ニ行フ				
一三六六	一六五六	同上、（慶雲三年）藤原不比等初メテ維摩會ヲ修ス、此ノ年始メテ道鑑ヲ行フ			サラセン人イスパニヤヲ征服ス	
一三七〇	一六六〇	第四十三代元明天皇、（和銅三年）藤原不比等南都ニ興福寺ヲ營ム				
一三七一	一六六一	同上、（和銅四年）太安麿古事記ヲ作ル、	唐ノ玄宗ノ開元四年、天竺ノ僧、長空三藏來ル、同八年、不空三藏寂ル			
一三七七	一六六七	第四十四代元正天皇、（養老元年）安部仲麿、僧昉等留學生トナリテ入唐、僧行基追放セラル				

一三八〇	一六七〇	同上、（養老四年）舍人親王、安麿等日本紀三十卷ヲ著ハス、				
一三八六	一六七	第四十五代聖武天皇、（神龜三年）僧行基山崎橋ヲ作ル、同四年大和、長谷寺建立	開元十五年菩提流支寂			
一三八八	一六七八	同上、五年僧義淵寂、				
一三九〇	一六八〇	同上、（天平二年）光明皇后施藥院ヲ建ツ	吠陀論派ノシヤンリーカラ出デマ、ベーダ破門ス	法王グリゴリー東ローマ帝レオヲ破門ス	東ローマ帝レオ三世畫像禮禁ヲ發ス	
一三九五	一六八五	同上、七年吉備眞備、玄肋僧正等歸朝、天平八年、唐僧鑑眞ハジメテ華嚴ノ章疏ヲ傳フ				
一四〇〇	一六九〇	同上十二年、諸國ニ法華經十部ヲ寫シ七重塔ヲ造ラシム、木年始メテ華嚴經開講ヲ金鐘寺ニ行フ			サラセン人力衰フ	
一四〇一	一六九一	同上、十三年諸國ニ詔シテ國分寺ヲ建立セシム、		法王東ローマノ管轄ヲ離ル、		
一四〇三	一六九三	同上、十五年東大寺建立及大佛鑄造ノ詔下ル、				

一四〇五	一六九五	同上、十七年、行基大僧正トナル、玄肋筑紫ニ貶セラル、同十八年、印度ノ婆羅門僧正來朝				
一四〇九	一六九九	同二十一年、奈良ノ大佛竣工、奥州初メテ黃金ヲ出ス、四月天平感寶ト改元アリ、七月孝謙天皇御卽位、天平勝寶ト改元ス、本年二月行基菩薩寂、天平勝寶四年婆羅門僧正寂				
一四一四	一七〇四	第四十六代孝謙天皇（天平勝寶八年）唐僧鑑眞來朝、戒壇ヲ東大寺ニ築ク、				
一四二三	一七一三	第四十七代淳仁天皇、天平寶字五年三戒壇ヲ改定ス（天平寶字七年）鑑眞和尙寂、			偶像禮拜禁止令勅行、フランク王國ノ分裂、	サラセン王國東西ニ分離ス
一四二七	一七一七	第四十八代、羅德天皇、（神護景雲元年）勝道上人下野ノ二荒山ヲ開ク、同上三年、道鏡非望ヲ企ツ、清麿ノ忠節、				
一四三五	一七二五	第四十九代光仁天皇（寶龜六年）始メテ天長節ヲ行フ、	唐ノ太宗ノ世不空三藏寂			カロロ大帝イタリヤノ王トナル、

一四四八	一七三八	第五十代桓武天皇（延暦七年）最澄法師比叡山延暦寺ヲ創ム、	唐ノ德宗ノ世馬祖道一寂	
一四五四	一七四四	同上、延暦十三年平安京ニ遷都、比叡山ヲ帝都鎮護ノ道場トナス、同上十五年、鞍馬寺、東寺、四寺建立、同上十七年法華十講ノ法會アリ、田村麿清水寺建立、同上二十三年最澄空海入唐、同上二十四年最澄歸朝天台宗ヲ傳フ、最澄歸朝天台宗ヲ傳フ		サラセンノ黃金時代、畫像禮拜ヲ許可ス、
一四六六	一七五六	第五十一代平城天皇（大同元年）空海歸朝眞言宗ヲ傳フ、		カロロ大帝帝冠ヲ戴ク
一四七〇	一七六〇	第五十二代嵯峨天皇（弘仁元年）弘仁之亂ニ連座シテ高岳親王皇太子ヲ廢セラレ出家トナル、	唐ノ憲宗ノ世、百丈懷海寂	
一四七六	一七六六	同七年、空海高野山ヲ開ク、		
一四七八	一七六八	同上、（九年）最澄叡山ニ大乘戒壇ヲ築カント願フ、	同、韓文佛公佛骨表ヲ上ル	
一四八二	一七七二	同上、（十三年）二月最澄ニ傳燈大法師位ヲ賜ハル、六月四日最澄上人寂、叡山ニ戒壇設置ノ勅許アリ、同十四年空海ニ東寺ヲ賜ハル、		
一四八四	一七七四	第五十三代淳和天皇（天長元年）六月僧義眞天台座主トナル、同五年叡山ノ戒壇院成ル、同六年瑛拏安世ニ命ジ諸國ニ水事ヲ作ラシム、		
一四九四	一七八四	第五十四代仁明天皇（承和元年）宮中ニ眞言院ヲ置ク、宮中後七日ノ御修法コヽニ始マル、同二年三月廿一日空海上人高野山ニテ寂、本年高岳法親王入唐トノ說モアリ、同四年慈覺大師圓仁入唐、同七年四月始メテ清涼殿ニテ灌佛ノ祭リヲ行フ、同、九年、恒眞親王出家セラル、同十四年圓仁歸朝、	唐ノ文宗ノ世、萃殿ノ寂、	
一五一一	一八〇一	第五十五代文德天皇（仁壽元年）常行三昧ヲ叡山ニ修ス、同、宮中ニ修ス、仁王會ヲ珍、三年、智證大師（圓珍）入唐ス、同四年、圓仁天台座主トナル、同、天安二年圓珍歸朝、	唐ノ武宗ノ世、佛寺四萬余ヲ廢シ萬尼二十六萬還俗セシム翌年武宗共ニ佛教復興ノ端ヲ開ク、宣宗ノ世黃檗木禪師寂、普化禪師寂、	畫像禮拜ノ宗教會議ニ最後ノ許可ヲ與フ、
一五二〇	一八一〇	第五十六代清和天皇（貞觀元年）筑紫ノ宇佐八幡宮ヲ遷ス、同十四年圓珍三井寺ニ遷ル、		コンスタンチノープルヲ大王、ドアルフレッ

一五二四	一八一四	同上、（貞觀六年）正月圓仁寂、同上（八年）最澄ニ傳敎圓仁ニ號勅賜アリ、慈覺ノ大師本年三井寺ヲ天台ノ別院トナシ圓珍命セラレテ別當トナル、同上（十年）圓珍天台座主トナル、		ブルガリヤ王キリスト敎ヲ信ズ
一五三七	一八二七	第五十七代陽成天皇（元慶元年）僧正遍昭山科ノ元慶寺ヲ建ツ、同年眞雅僧正寂、		メルゼンノ條約フランス國イタリヤ、フランス、ドイツ三國ニワカル、
一五四八	一八三八	第五十九代宇多天皇（仁和四年）仁和寺造營、供養導師眞然僧正、		
一五五九	一八四九	第六十代醍醐天皇（昌泰二年）宇多上皇落飾、法皇ノ稱茲ニハジマル、紫延喜元年菅原道眞ヲ筑此年御室ヲ仁和寺ニ遣ス、御門跡ノ號茲ニ始マル、同二年、醍醐寺ノ開山聖寶僧正トナル、同三年、菅原道眞茲去空也上人生誕、同四年字多法皇仁和寺ニ徙居、同廿一年空海ニ弘法大師ノ勅賜アリ、延長五年、圓珍ニ智證大師ノ勅賜アリ、	後梁末帝ノ世布代和尙寂	皇紀一五七〇オクスフォード大學創立、五年後ニケンブリッチ大學創立、
一五九八	一八八八	第六十一代朱雀天皇（天慶元年）空也上人京都ニ念佛ヲ唱フ、此ノ前後ニ平將門、藤原統友等ノ亂アリ、		
一六〇一	一九〇一	第六十二代村上天皇（天曆五年）空也上人六波羅密寺ヲ造ル、	後周ノ世、佛像ヲ毀チテ錢ヲ鑄ル、	
一六二六	一九一六	同、（康保三年）慈惠僧正天台座主トナル		
一六二九	一九一九	第六十三代冷泉天皇（安和二年）帝位ヲ皇太弟ニ讓リ冷泉院ニ遷ル、天子ニ院號ヲ用フルハ茲ニ始マル		
一六三二	一九二二	第六十四代圓融天皇（天祿三年）空也上人寂、天元四年慈惠大僧正トナル、永觀元年惠心僧都母ノ骸終ニ至孝ヲ致ス		
一六四六	一九三六	第六十五代華山天皇（寬和二年）天皇華山寺ニ落飾、		
一六五一	一九四一	第六十六代一條天皇（正暦二年）皇太后詮子尼トナラレ東三條院ト號ス、女院ノ始メナリ、長德三年、多田滿仲薨去、		

		同長保二年、興福寺僧徒ノ遮行ヲ禁ス、		
		同四年、東大寺ノ僧奫然嵯峨清涼寺ノ釋迦堂ヲ建立ス、同寛弘四年、書寫山ノ性空上人寂、		
一六八〇	一九七〇	第六十八代後一條天皇寛仁四年、藤原道長法成寺ヲ建立シ無量壽院ト號ス、沙門濟信ヨリ始メテ牛車ヲ許サル、同治安二年、佛工定朝法橋トナル、工ノ叙位ハ此ニ始マル、	宋ノ眞宗ノ世、錢塘ノ僧道誠釋氏要覽ヲ撰ス	
一六九九	一九八九	第六十九代後朱雀天皇長暦三年、叡山ノ衆徒園城寺ノ僧ヲ襲フ、		
一七一一	二〇〇一	第七十代後冷泉天皇永承六年、關白頼通ノ子治ノ平等院ヲ建ツ、（永承六年始）		
一七三二	二〇二二	第七十一代後三條天皇延久四年、瑞忍上人生誕、	宋ノ神宗ノ世、歐陽修死去	
一七四一	二〇三一	第七十二代白河天皇永保元年、叡山ノ僧徒三井寺ヲ燒ク、	宋ノ神宗ノ世、程明道死去	
		同三年、仁和寺ノ御室	年司馬光相トナル、	

		性信二品ニ叙セラル、出家ノ皇子ニ位ヲ賜ハル始マリ、同嘉德元年、僧賴豪寂ス、		
一七五七	二〇四七	第七十三代堀河天皇承德元年、瑞忍上人大原ニ來迎院ヲ建ツ、同康和元年、仁和寺覺行ヲ親王トス法親王ノ始メ、	宋ノ哲宗ノ世、蘇東坡既セラル、	第一回十字軍
一七六八	二〇五八	第七十四代鳥羽天皇天仁元年、源平二氏ヲシテ延暦寺ノ僧徒ヲ禦グ、同天永二年、興福寺ノ僧徒東大寺ノ僧徒トノ間ニ鬪フ、同永久元年、延暦、興福二寺兵ヲ構フ、同保安元年、南都北嶺相爭フ、同保安二年、山僧園城寺ヲ燒ク、同四年、山僧京都ニ亂入ス、	宋ノ徽宗ノ世、程伊川死去	佛教漸ヤク印度ニ滅セントシテ學バントスル者ノハ錫蘭島ニ渡レリ、
一七八四	二〇七四	第七十五代崇德天皇天治元年、長忍上人禁裏ニ念佛會ヲ營ム、長承元年二月瑞忍寂、同、二年四月七日、法生ル、	南宋ノ高宗ノ世、朱熹	

		然上人生誕、延暦寺僧徒爭鬪ス、興福寺ノ僧徒京師ニ入訴ス、同六年、延暦寺ノ僧園城寺ヲ燒ク、此ノ年佐藤憲清出家西行ト稱ス		
一八〇二	二〇九二	第七十六代近衛天皇康治元年、園城寺ノ僧延暦寺ヲ燒ク、同二年、根來寺開山興教大師寂、久安元年、興福寺ノ僧東大寺ヲ攻ム、同二年園城寺ノ僧延暦寺ヲ燒ク、同四年、興福寺ノ僧入京強訴、此ノ年攝政忠通法性寺ヲ建ツ、	南宋ノ高宗ノ世、岳飛殺サル、	
一八一六	二一〇六	第七十七代後白河天皇保元元年、保元之亂、		
一八一九	二一〇九	第七十八代二條天皇平治元年、平治之亂、同、長寛元年、延暦寺ノ僧徒園城寺ヲ燒ク、		
一八二七	二一一七	第七十九代六條天皇仁安二年、僧文覺神護寺再興、僧重源渡宋、同、三年、僧榮西渡宋、		第二回十字軍
一八二九	二一一九	第七十代高倉天皇嘉應元年、重源榮西共ニ歸朝、同安元年、僧覺阿宋ヨリ歸ル、同三年、南都ノ僧多武峯ヲ燒ク、安元元年、法然上人淨土宗宣揚、		コンスタンスノ和約、
一八四五	二一三五	第八十一代安德天皇（寿永四年）平氏滅亡、		第三回十字軍
一八五二	二一四二	第八十二代後鳥羽天皇建久三年、源頼朝征夷大將軍トナリ幕府ヲ鎌倉ニ開ク、同六年、頼朝入京、東大寺供養ヲナス、昨年榮西三度目ノ渡宋、榮西三師ニヨリ歸ル、文治三年二度目ノ渡宋ヲナシタルナリ、		印度本土ニ佛教絶ユ
一八五九	二一四九	第八十三代土御門天皇（正治元年）建久十年ニ改元、泉涌寺ノ俊芿入宋、同二年念佛停止ノ命アリ、同、鎌倉ニ壽福寺ヲ建ツ、榮西開山、建仁寺建立、榮西二年、建仁寺ヲ建立ス、同開山トナリ禪宗ヲ弘ム、同承元二年、念佛宗停止、法然上人流罪、親鸞上人流罪、熊谷蓮生寂、	南宋、寧宗ノ世、	第四回十字軍

一八七二	二一六一	第八十四代順德天皇（建暦元年） 慶政律師歸朝、法然上人赦免歸京、 同二年正月廿日法然上人寂、	朱熹死去、		
一八八二	二一七二	第八十六代後堀河天皇（貞應元年） 二月十六日蓮上人生誕、昨年春久ノ變アリ、三上皇ヲ左遷シ奉ル、 同二年道元禪師入宋、 同、元仁元年親鸞上人淨土眞宗ヲ開ク、修寺建立、慈鎮僧正寂、 嘉祿元年高田專修寺建立、 安貞元年栄西後律師寂、 道元禪師歸朝、 貞永元年、栂尾明恵上人寂、		エギリス王大憲章ニ署名ス、	
一八九三	二一八三	第八十七代四條天皇、（天福元年） 南都北嶺爭、（嘉祿元年）興福寺ノ僧石清水神人ト爭フ、聖一國師入宋、（同二年）南都ノ僧蜂起朝、（仁治二年）聖一國師歸	南宋理宗ノ世、無準禪師風ヲ拳揚ス		
一九〇六	二一九六	第八十八代後嵯峨天皇（寛元年定）宋僧道隆來朝、		第五次十字軍	
一九〇九	二一九九	第八十九代後深草天皇（建長元年）建長寺建立、道隆開山、			
一九一三	二二〇三	建長五年四月廿八日蓮上人開宗、同八月道元禪師寂、同七月聖一國師東福寺開堂、			大空位時代
一九二〇	二二一〇	第九十代龜山天皇、（文應元年） 園城寺戒壇勅許、叡山ノ强訴、戒壇勅許ノ停止、宋僧兀庵來朝、 弘長元年五月日蓮上人伊豆ニ流サル、弘長二年十一月廿八日親鸞上人寂、 同三年日蓮上人赦サル、 文永五年蒙古ノ使者來ル、 同八年九月十二日蓮上人龍ノ口ノ首ノ座ヲ佐渡ヘ流罪、 同十月蒙古使者趙良弼來ル、 令九年本願寺創立、 同十年一月日蓮上人流罪赦免、同五月甲州身延久遠寺開山、同十月兵壹岐對馬ニ寇ス、	南宋ノ理宗ノ世ヘ謝枋得寇セラル	第六次十字軍	文天祥殺サル
一九三五	二二二五	第九十一代後宇多天皇建治二年一遍上人時宗開宗（弘安元年） 七月僧道隆寂、 同二年十月元僧祖元來朝、 同三年十月聖一國師寂、			
一九四二	二二三二	弘安五年、十月十三日蓮上人寂、			

一九四九	二二三九	第九十二代伏見天皇（正應二年） 八月一遍上人寂、 永仁二年四月ヨリ日像上人京都布教、 永仁六年法燈國師寂、	此ノ年圓覺寺ヲ立ツ、祖元禪師開山、		
一九五九	二二四九	第九十三代後伏見天皇正安元年元僧一山來朝、同二年四大寺僧徒ノ訴ヲ奉ニ、興正菩薩ノ勅諚アリ、嘉元元年極樂寺ノ忍性律師寂、	元ノ仁宋ノ世、		
一九八六	二二七六	第九十六代後醍醐天皇嘉暦元年紫野大德寺立ツ大燈國師開山タリ、元亨二年僧師錬元亨釋書ヲ上ル、元德元年友梅禪師元ヨリ歸朝、	金字ノ佛經寫ス、		
一九九七	二二八七	第九十七代後村上天皇延元二年關山國師妙心寺ニ開ク、延元四年僧祖錄石尊氏ニ說キテ天龍寺ヲ創ム、	明ノ太祖ノ世、僧ヲ選ニテ諸王ニ侍セシム		
二〇四〇	二三三〇	第九十八代後龜山天皇（天授六年）夢窓ノ高足妙葩ヲ僧錄司ニ任ズ、僧錄司茲ニ始マル、弘和三年夢窓國師ヲ			
二〇六三	二三五三	第九十九代後小松天皇永十年應歧陽詩經書經ノ新註ヲ明ヨリ寄ラス、	相國寺開山トナス、同元中五年僧義堂井ニ妙葩寂、	フランシスコ支那ニ布教ス	數多ノ高僧雲集、悲山等最モ著ハル、
二〇八二	二三七二	第百代稱光天皇應永二十九年將軍義持大藏經ヲ朝鮮ニ求ム、			コンスタンスノ宗教會議
二〇九〇	二三八〇	第百一代後花園天皇永享二年白山僧徒南禪寺ニ亂入、同六年延暦寺僧徒京都ニ亂入、同九年義教多武峯ヲ攻ム、			ジヤンダルク率イテ佛軍ヲ破ル
二一一八	二四〇八	同、長祿二年義政大藏經ヲ朝鮮ニ求ム、當時眞惡上人北國巡化		百年戰爭	東ローマ帝國亡ブ、
二一二五	二四一五	第百二代後土御門天皇寛正六年僧雪舟明ニ赴ク、山門ノ僧徒、眞宗ノ坊舍ヲ燒ク、應仁元年、コレヨリ應仁ノ亂始マル、時蓮如上人活躍、		ローマ教會ノ大分裂	

			文明十一年ニ山科ノ本願寺立ツ			
			文明十三年八月、一休禪師寂ス			
			同十四年朝鮮大藏經ヲ足利氏ニ贈ル			
			同十五年、應仁ノ亂一段落ス			
			同十八年太田道灌殺サル			
			長享二年加州一向一揆蜂起ス			
			延德三年朝鮮王佛經典ヲ日本ニ贈ル			
			明應五年石山本願寺建立ス			
			同八年義澄佛經ヲ朝鮮ニ求ム			
			此ノ年二月廿五日蓮如上人寂ス			
二一一六六	二四五六	第百三代後柏原天皇永正三年、加賀一向宗爭亂ス				
		同八年大內義興僧桂悟ヲ明ニ遣ハシ釋典佛誡ヲ求ム				
二一一九	二二四八二	第百四代後奈良天皇天文元年一向一揆ス、同天文五年叡山ノ僧徒ト京都ノ日蓮宗ト合戰ス、同天文七年大藏經ヲ朝鮮ニ求ム	明ノ世宗ノ世、王陽明死ス		コロンブス亞米利加發見	
二一一九	二二五〇九	第百五代正親町天皇永祿二年、太願寺門跡ニ列ス			宗教改革ノ發端	
					二一二四七	二一七五
					二一五三七	二一五六五
					第百六代後陽成天皇天正十五年、耶蘇教禁ス	第百七代後水尾天皇、豐臣氏滅亡ス
					文祿四年吉大佛供養ヲ示ス	元和元年、淨土宗法論アリ、日蓮宗法論アリ、淨土宗法度ヲ制ス

同入ル年耶蘇宣教師京都ニ

元亀二年織田信長島一向一揆ヲ征ス

長ノ二年五月撰ヲ焼キツクス

同九月叡山ヲ焼キツクス

天正二年ヨリ信長石山本願寺ヲ攻ム

同七年安土論、同八年一段落

同九年石山戰爭

同年信長高野山ノ僧徒ヲ殺ス

同十年長秋セラル

同十二年、秀吉叡山ヲ再興ス

同十三年、秀吉南蠻寺ヲ毀ツ

同十四年、秀吉方廣寺ヲ造リ大佛殿建立

						同五年、崇傳僧錄司トナル
						寛永二年僧天海ヲシテ忍岡ニ寛永寺ヲ建テシム
						同四年倡ノ制ヲ定ム
						同五年重ネテ耶蘇教ヲ禁ズ
二一一九〇	二五八〇	第百八代明正天皇寛永七年不受不施派ノ上人流罪ニ處ス				
		同十二年寺師奉行ヲ置ク				
		同十五年島原ノ亂平ラグ				
		耶蘇教嚴禁、此年澤庵禪師東海寺ヲ開ク				
		全十六年外國貿易ヲ禁ズ				
		同十九年紫衣僧正生寂、同二十年天海僧正生寂				
二三〇六	二五九六	第百九代後光明天皇正保三年、澤庵禪師寂ス				
		慶安元年天海ニ慈眼大師ノ勅諡アリ				
		同四年輪王宮ニ下向、守澄法親王武藏ニ下向ス				
		承應三年隱元禪師來朝				
二三一一	二六一一	第百十代後西院天皇文元年、黃檗山萬福寺建立ス				
		京ノ大佛ヲ壞チ文錢鑄造ス				
		同三年、鉄眼等ノ三僧淀川ニ語ル				
					二十年戰爭	
					フランス王ルイス十四世、英王チヤールス一世ノ死刑	
					普國獨立スクロンウエルノ死ス	
					二三二八	二六一八
					寛文八年二月元政上人寂ス	第百十一代霊元天皇延寶元年隱元禪師寂ス、同六年鉄眼禪師一切經開版成就ス、此ノ年支那ノ僧越禪師歸化ス
					二三三五一	二六四一
					第百十二代東山天皇、元祿四年、覺鑁上人ニ興教大師ノ勅諡アリ、同五年慶上人ノ願成就シテ東大寺ノ大佛修補成リ開眼供養ス、此年楠公ノ碑ヲ湊川ニ立ツ、同十年法然上人ニ圓光大師ト勅諡アリ	
						真亨元年木庵禪師寂、同白隱禪師寂、同二年將軍綱吉生誕、同四年吉生類憐ミノ令ヲ發ス、憐ミノ令不受ノ僧侶流ス	
						不施派ノ僧侶流サル
						ペトル大帝北歐戰爭
					二三七八	二六六八
						第百十三代中御門天皇享保三年、祐天僧正寂、慈雲尊者生誕

二四四	二四二	二七二	二七一	二七三	二七〇	二四〇	二四二	二四二	二七二	二七一	二七二	二四〇	二六九	二四〇	二六一	二四〇	二四一
文字律寛寛天寛延生天安寧和ノ政政明シハ慶応永百化三永十八六ルテ三ノ年山年年年年中ト慈恵手セ後大質慈澤ナ寺僧婦者ニ死去	師明作年テ四著年蓮大寛寛教和リ伊宗大テシ池宗学業十一年鄉道チ我之日鸞論年代十一論鈔論シ論リ弾論チ七リ和チ二日ノ皇	宗シ山薪寛寛寛延寛立タチ地府曆百ツルク輝寺令ニ五等説チ年代繁繁以立寺院寺宗ズ、寄寺院本ニ	徒同チ後延寛唱語享享百唱年ヘテ作年元四ノ年ニ二年代、説リ當ノ財チ年代、霊宗大永石鎌霊チ乗仲田町春排悲梅鎌皇正ス、説定殺法	教ス、仏遊巻四文寛百教ガ作寺四十九謙ル々蓮音遠代仁孝ル々ニ企日孝反蓮ニ聖聞聞ス仏教ノ聖聞死皇ナ天一去	中夢語作中當中時日誠リ非蓮幡古平穢穢蓮宗チ今田篇ハ論異リ建穢草蓮穢教チ孝ノ出篇ナ	師明作年テ四著年蓮大寛寛教和リ伊宗大テシ池宗学業十一年鄉道チ我之日鸞論年代十一論鈔論シ論リ弾論チ七リ和チ二日ノ皇	宗シ山薪寛寛寛延寛立タチ地府曆百ツルク輝寺令ニ五等説チ年代繁繁以立寺院寺宗ズ、寄寺院本ニ	徒同チ後延寛唱語享享百唱年ヘテ作年元四ノ年ニ二年代、説リ當ノ財チ年代、霊宗大永石鎌霊チ乗仲田町春排悲梅鎌皇正ス、説定殺法	教ス、仏遊巻四文寛百教ガ作寺四十九謙ル々蓮音遠代仁孝ル々ニ企日孝反蓮ニ聖聞聞ス仏教ノ聖聞死皇ナ天一去	中夢語作中當中時日誠リ非蓮幡古平穢穢蓮宗チ今田篇ハ論異リ建穢草蓮穢教チ孝ノ出篇ナ	紛ス、同爭ナ三年雨本ニ頭寺宗浅ノ聞

カト同チニ廢ニ共ニ委任シ十ナニ十任免神レ信二ラ布二月リ、自藤ッ由法ノリ、ノ制禁明布	同師同輪同悪明秀明大同明ニ活佛チ道明ナ盛明住ニノ同霊寛同妻等本大チ五布チ年霊	師同慈明治陽治師九治獅飲逸ニ入八チニ六タラ四七聚六聚頭等寺院シ佛任等月髪	ノ年号慶慶ノ年師五ノ年号慶慶大ノ母逝年セル非年主自年ルヴ方年所ノチ教ニ嚴三ノ	十ノ年大十大十ノ年八出セル非年チ我之日鸞論年代十一論鈔論シ論リ弾論チ七リ和チ二日ノ皇	七ノ年師三慶慶年セリ母逝札四張由歌フセシニノ派宗立等教ニ教ニ嚴三ノ	師同作年テ四著年蓮大寛寛教和リ伊宗大テシ池宗学業十一年鄉道チ我之日鸞論年代十一論鈔論シ論リ弾論チ七リ和チ二日ノ皇	宗シ山薪寛寛寛延寛立タチ地府曆百ツルク輝寺令ニ五等説チ年代繁繁以立寺院寺宗ズ、寄寺院本ニ	徒同チ後延寛唱語享享百唱年ヘテ作年元四ノ年ニ二年代、説リ當ノ財チ年代、霊宗大永石鎌霊チ乗仲田町春排悲梅鎌皇正ス、説定殺法	教ス、仏遊巻四文寛百教ガ作寺四十九謙ル々蓮音遠代仁孝ル々ニ企日孝反蓮ニ聖聞聞ス仏教ノ聖聞死皇ナ天一去	中夢語作中當中時日誠リ非蓮幡古平穢穢蓮宗チ今田篇ハ論異リ建穢草蓮穢教チ孝ノ出篇ナ	紛ス、同爭ナ三年雨本ニ頭寺宗浅ノ聞

日本佛教外史索引

備考

字音は凡て發音の自然に從へり、例へばセウもセフもシヤウもシヨウも一括してシヤウの部におけるが如し。屢々記載しある熟字の如きは比較的意義の明瞭すべき頁數を示したり。頁數の多く示しあるものは必要の場所ゆゑ必らず凡てを參照するを要す。

ア

阿私陀仙人……四
阿祇尼……一八
阿闍若迦……一九
阿羅邪仙人……二二
阿說示……二三
悉趣……二九
阿羅漢……三五
阿那律……四八・六二
阿難……四八・七二
阿闍世……五三
阿含經……九一
阿育大王……九二
安世高……一〇八
阿彌陀經……一一八
阿彌陀如來……一一七
阿那含果……一二四
阿羅漢果……一二四
阿賴耶識……一二八・一二九
阿賴耶識緣起と業感緣起……一二九
阿字本不生……一四九
阿覺大師……二四三
阿彌陀直授の法門……二五八
安樂戸方……二六九
天野四郎……二七九
甘糟忠綱……二八五
秋田城之助……三四一
あるべきやう……三四三
足利尊氏……三六二
足利義滿……三六八
足利義政……三六八
安土法問……三七七
朝倉孝景……三七八
赤松連城……四四二
新井日薩……四四三

イ

一切種智……四
章賢……四
因緣……六
醫方明……七
因明……八
印度哲學……一八
因陀羅……一八
因明論……一九
章提希夫人……五二
一切空……一〇一
因人……一二
一心法界……一二
困分可說、果分不可說……一一四
一乘……一一五
一念三千の法門……一二七
一心三觀……一二九
因陀羅網……一四二
一位は一切位……一四三
淨仰……一五四
維摩經……一七〇
忌詞……二〇八
いろは歌……二三六
一期の無常……二三七
いろは文庫……二三九
一枚起請文……二七二
一向宗……二九五

一遍上人……三七七
一寧一山……三四八
一休禪師……三六九
一休の母……三七〇
石山本願寺……三七三
石山戦爭……三七四
隱元禪師……四四四
石田道歌……四三〇
井伊直弼……四三四
井上圓了……四四五
因果の理……四六七

ウ

禹……五
有爲……九・二一
有爲轉變、優陀夷……一三・一九・四七
ウパニシャット……一九・二〇
鬱陀羅摩……二五
優婆塞……三五
優婆夷……三五
優婆須蜜經……三六
優婆離……四八
盂蘭盆……五・一九・二
優婆先那比丘……六〇
優陀延王……六八
雨安居……九〇
有情世間……二三
有漏智……二四・四六三
有事……二四
有所得……二三一
雲門……一五四
氏……一七二
雲間の國字……三五三
雲岡和尚……三七九
上杉謙信……三八一
上杉治憲……四三七
梅上澤雄……四四三
雲照律師……四四四

エ

圓覺樹……八・二四
會者定離……一七
緣起論……二〇
圓寂……八五
圓淨提……九四
表鉢……九七
羅漢……九九
鬚邊……二〇
依報……二四・二七・三二五
有餘涅槃……八・二四

オ

熊胆眼藥……三一・三八
鸚鵡觀……六九
應供の果……二二四
應身佛……一四四
黃檗禪師……一五四
歌國修……一六二
小野妹子……一七九
恩田……一八三
三佛二法……二四一
圓覺寺……二四三
往生要集……二五四
大原來迎寺……二五八
往相廻向……二九〇
大谷派……二九五
おがみ念佛……三二九
大內義隆、太田道灌……三七九
織田信長……三八三
黃檗派……四〇四
黃檗山萬福寺……四〇六
遠羅天釜……四二八
大石良雄……四三六
エネルギー機械論……四六一
永久の生命……四六・四六七

カ

我……二〇
我所……二〇
苟陰……二六
我慢……二四
伽耶迦葉……三六
迦留陀夷……三九
迦毘陀……三九
迦留陀夷……六三
彩の譬……六七
迦膩色迦王……九七
訶梨跋摩論師……一〇二・二五
覺賢三藏……一一〇
薄印三昧……一一二
嘉祥三藏……一一三
戒……一二四・一二六・一三・一三七・二八七
我空法有……一二五
戒體……一二七
戒行……一二七
戒相……一二七
戒賢論師……一三一
嘉祥大師……一三一
我版三折の苦學……一三四
蔵野獨圓……四四三
大內青巒……四四四

力

我……二〇
我所……二〇
苟陰……二六
我慢……二四
伽耶迦葉……三六
迦留陀夷……三九
迦毘陀……三九
迦留陀夷……六三
彩の譬……六七
迦膩色迦王……九七
訶梨跋摩論師……一〇二・二五
覺賢三藏……一一〇
薄印三昧……一一二
嘉祥三藏……一一三
戒……一二四・一二六・一三・一三七・二八七
我空法有……一二五
戒體……一二七
戒行……一二七
戒相……一二七
戒賢論師……一三一
嘉祥大師……一三一
我版三折の苦學……一三四
牛跡の水……一三
祇園精舍……四四
給孤獨……四四
祇陀太子……四五
善逝……五三
蹈陳如……一三・一三
河村瑞賢……四三
加藤清正……一三八
刀狩……一三八
加藤景正……一三〇
開目抄……一三八
加藤景正……一三〇
學道用心集……一三〇
覺鑁……一三五
覺阿……一三九
覺鑁上人……一三五
覺賢僧都……一三八
鑑眞和尚……一三一
鑑智……一三五
看話禪……一三八
韓文公……一三六
桂……一三七
韓國の廣足……一三九
減壞……一二・一三・一三七・一八七
鑑眞和尚……一三一
覺賢僧都……一三八
覺鑁上人……一三五
覺阿……一三九
學道用心集……一三〇
加藤景正……一三〇
開目抄……一三八
刀狩……一三八
加藤清正……一三八
河村瑞賢……四三
蹈陳如……一三・一三
牛跡の水……一三
祇園精舍……四四
給孤獨……四四
祇陀太子……四五
善逝……五三
敵國降伏……一四九
經智……一五三
看話禪……一五八
韓文公……一六三
桂……一七二
韓國の廣足……一九六
減壞……一二・一三・一三七・一八七
鑑眞和尚……一三一
覺賢僧都……一三八
覺鑁上人……一三五
覺阿……一三九
學道用心集……一三〇
加藤景正……一三〇
開目抄……一三八
刀狩……一三八
加藤清正……一三八
河村瑞賢……四三
佐兒の譬……八〇
經の意義……九〇
醍醐の法門……一三六
金剛子の譬……一四三
新藏……一五一
經外の別傳……一五一
義淵僧正……一九六
行基……二〇五・二〇九
行滿……二二五
宮中眞言院……二三九
義眞和尚……二四二
教行信證……二九一
新藏佛教……二四八
清水觀音……二六〇
祇王、祇女……二七八
木下道正……三〇四
菊池武時父子……三六二
義堂……三六七
苦人……三六九
教如……三九三
教導職……四四三
北品遠隆……四四三
義堂和尚……四四四
幾何學原理の矛盾……四六一
既成宗教……四六五
苦跡……四六六

ク

工巧明……七
瀧頂……八
若行林……一七
元來の無明……二七
鬼島……三二
觀無量壽經……五三
君運川……六六
俱舍論……一〇二・二二
圍中の四餘……一〇九
久遠實成……一一五
觀無量壽經……一一八
九品の淨土……一一八
九品の彌陀……一一八
俱舍……二二
具足戒……二七
瀧頂……二四
空論……二九
俱盧舍尚……二六
觀勒……二九
鞍部德積……二九
鞍作鳥……二七三
鞍作多須那……二八二

藥狩 一八四
火葬 一九五
還學生 二三四
灌頂 二二六
元三大師 二四五
空也上人 二五二・二五三
鞍馬山寺 二六一
九條兼實 二六八・二九二
熊谷直實 二八四
愚禿抄 二九一
愚禿 二九三
求聞持の法 二九六
觀心本尊抄 三一九
久遠の本佛 三二四・三二八・四五五
關山 三五四
楠正成 三五九
快川禪師 三八一
官吏僧 三九五
環溪禪師 四四四
科學と宗教 四六〇
科學的智識の有限 四六二

ケ

羿 五
解脫 二〇・二二・二四
外覧 二七
見惑 二七・四六三
解空第一 六五
夏 九〇
顯正 一〇一
華嚴經 一一三・二〇五
華嚴の三尊 一一四
解深密經 一三〇
支那三藏 一三〇
化儀の四教 一三五
化法の四教、假諦 一三九
荊溪尊者 一四〇
華嚴宗 一四〇・二〇八
賢首大師 一四〇
顯教 一四六
慧果阿闍梨 一四七・二三一
元興寺 一六九
遣隋使 一七九
敬田 一八三
玄昉 一九五・二一五
元慶寺 二四二
源賢 二六二
顯眞僧都 二六七
解脫上人 二六七・二八七
源智上人 二七七
還相廻向 二九〇
建仁寺 二九七
建長寺 三〇二
下種結緣 三二四
見性成佛 三四五
瑩山禪師 三五七
顯如上人 三七四
元政上人 三九九
元政の壁書 四〇二
原子說 四六二
現實主義 四六八

コ

勾踐 五
五明學 七
五微塵 二四
五大 二四
五利使 二七
五鈍使 二七
業 二九
五蘊 三八・一二二・一二三
護彌 四四
恒河 六六
黑白の鼠 六九・七六
好苦梵志 七三
五通の比丘 七六
五行 一〇〇
康僧鎧 一〇八
虎溪の三笑 一一一
極樂淨土 一一八
口稱念佛正定業 一二〇
虛空無爲 一二三
五性各別 一二九
五時の說教 一三四・一三五
五味の譬 一三六
金剛薩埵 一四六
金剛頂經 一四六
金剛智 一四六
弘法大師 一四七
金剛界 一四八
公案 一五七
光明皇后 一九三・一九九
興福寺 一九三
國師 一九四
國分寺 二〇〇
國分尼寺 二〇〇
甲賀寺 二〇二
金鐘寺 二〇二
極樂寺 二一八
檻門共戒 二二七

弘法大師 二三〇・二四〇
高野山 二三四
興福寺 二四七
興教大師 二五二
公胤僧正 二六九
興正菩薩 二八七
興禪護國論 二九七
兀庵 三〇二・三四四
後五百歲 三〇九
小松の辻說法 三一三
五綱の判釋 三二九
極樂遊び 三四〇
悟空 三四四
虛無僧 三五三
後醍醐天皇 三五七
興山和尙 三八五
公慶上人 四〇七・四〇九
國粹論 四四一
恒順上人 四四四
光素說 四六二

サ

刹利 一九
三毒 三三・三九
三寶 三四・一七六
沙門 三五
三迦葉 三六
三歸 三九
三界の首枷 四九
沙羅雙樹 八二・八四
三藏 九一・一三一
三學 九一
三大 一〇〇
三教一致 一〇六
三種の華嚴 一一三
三界 一二四
三論宗 一三一・一九〇
三諦 一三九
三觀 一三九
三身即一 一四五
三昧耶曼陀羅 一四八
三密加持 一五〇
三福田 一八三
三寶の奴 二〇四
三聚淨の菩薩戒 二二八
三教指歸 二三〇
山門派 二四四
摧邪論 二六九
西阿彌陀佛 二七〇
佐藤憲清 二八〇
西行法師 二八〇
三種の教相 三二九
三益の機 三三〇
佐々木高綱 三四〇
相模入道信忍 三五一
三黜三教の布教 三六五
齋藏道三 三七八
在川和尙 四二二
三條教則 四四三
佐田介石 四四四
佐久間貞一 四四四

シ

獅子吼 一
寂光土 一
衆生、眞諦 二九
常飯王 一
悉多太子 三
宿緣 四・七三
舜 五
周公 五
釋種忍天 七
鑿明 七
四門出遊 一三
須彌、車匿 一六
釋提桓因 一八
首陀 一九
勝論 一九
實相論 二〇
自性 二〇
神我 二〇
自在天 二〇
順世外道 二一
沙迦羅龍王 二三
四句の偈 二六・二三八
思惑 二七・四六三
邪見業 二九
正見業 二九
十二因緣 二九・三〇
遮婆世界 三〇
四聖諦 三三・一二五
四苦 三三
舍利弗 四〇・七一
神通第一 四一
七佛通戒の偈 四一
七佛 四二
持戒第一 四九
自業自得 五五
四辯 五九
四辯第一 五九

維摩詰所說第一……六四
周利槃陀伽……六五
獅子吼第一……六八
寂滅定……七二
宿因……七三
宿世の因緣……七三・八二
尸毘王……七四
四大……七六
人生の譬……七六
四姉妹の譬……七九
純陀……八二
須摩提羅……八二
寂滅……八五
體苦提……八八
七百集法……九二
上座部……九七
乘……九八
此岸……九八
小乘……九八・一四一
聲聞……九九
眞如緣起……一〇〇・一三三
四信……一〇〇
十住毘婆沙論……一〇一
十二門論……一〇一
成實論……一〇二・一三五
宗數論師……一〇二
順世理論……一〇二
儒教……一〇四
四十二章經……一〇七
支婁迦讖……一〇八
竺律炎……一〇八
竺法護……一〇八
譯經……一一一
自力念佛門……一一一
定心別時の念佛……一一一
淨土門……一一五
淨土論……一一七・一一八
淨土の三部經……一一七
四十八の願……一一七
自力門……一一八
聖道門、淨土門……一一九
慈愍三藏……一二〇
慈愍三藏……一二〇
色……一二二
色法……一二二
心王……一二三
心所……一二三
順現業……一二三
順生業……一二三
順後業……一二三
正報……一二三・一二七
色界……一二四
定……一二四
所住舍果……一二四
四聖……一二四
成實宗……一二五・一九〇
四部律……一二七
慈恩大師……一三一
慈恩教……一三一
靈鷲中道……一三一
成假中道……一三一
章安大師……一三四
生酥味……一三七
熟酥味……一三七
十如是……一三七
濟濟即寂光……一四〇
事法界……一四一
四法界……一四一
事理無礙法界……一四二
事々無礙法界……一四二
十玄緣起門……一四二
藏眞品……一四六
四曼陀羅……一四八
神秀……一五四
從容錄……一六〇
支那國民の通性……一六一
老子……一六二
司馬遷等……一六五
聖德太子……一六八・一九二・二九
四天王寺……一六九
僧曇靖……一七〇
十七條憲法……一七三
出世間と世間……一七八
眞諦……一七八
宗教と美術……一八〇
書紀……一八六
定慧……一九三
排佛堂……一九四
修驗道……一九七
沙彌濟……一九九
聖武天皇……一九九
四部說法立の伽藍……二〇四
遊佛……二〇七・二一四
淸宮寺……二〇八
淸佛融合……二〇八
小乘戒……二一三
順曉阿闍梨……二一五
修驗道師……二一五
十住心……二一三
四國靈場……二一四

淸遠濟頂……二一六
慈覺大師……二一四二
新發……二一四二
寺門派……二一四四
藥師信仰……二一四四
性空上人……二一四五
始祖の法門……二一四八
聖實……二一四九
眞言修驗道……二一四九
眞言新義派、古義派……二一五二
市聖……二一五三
四種三昧……二一五三
常行三昧……二一五三
十界の圖……二一五四
霊明……二一五九
鎭鳴の譬……二一六四
俊乘房重源……二一六七
拾閑圓戒……二一八・二一九
淨土宗……二一七二
淨土門の三心、四修……二一七三
淨土門の五流……二一七三
俊芿律師……二一八七
親鸞上人……二一八八
淨土眞宗……二一八八
順次生……二一九〇
淨土文類抄……二一九二
日蓮大師……二一九七
善導師……二一九七
正法眼藏……二一九九
聖一國師……二二〇二
四個の格言……二二〇六
正後末の三期……二二〇九
色讀……二二二
四條金吾……二二四
上行菩薩……二二四
藏眞品……二二四・二二八
遊家の菩薩……二二四
鳴呼底佛……二二五
事の一念三千……二二九
四悉檀の化導……二三〇
四衆……二三二
順縁と逆縁……二三四
逆化……二三四
折伏門……二三四・二五五
恩親圓……二三五
時宗……二三七
鹽船入道……二五〇
鹽田道福……二五一
常濟大師……二五八
眞諦上人……二七四
實知上人……二七四
證知上人……二七四
惟知……二七七
鳥原の亂……二七四
正法律……二七六
慈雲尊者……二七六
十善法語……二七七
正受老人……二四四
死の稽古……二四二
心學道話……二四五
正眼國師……二四六
心學道話……二四三〇
實語教……二四九
島地默雷……二四三
寂順僧正……二四四
自力門の長所、短所……二四五
人智の有限……二四六
四劫の循環說……二四六
神秘の世界……二四六
宗教の力……二四六

ス

須彌壇……一八
數論……二〇
須達長者……二四
水中の牛糞……五六・二四六
須菩提……六五
須陀洹果……一二四
隨緣の六大……一二四八
牛羊鳥……一八七
菅原道眞……二六二
菅原爲世……二〇一
崇德和尚……二九三
鈴木正三……二二

セ

成湯……五
善惡……八
善論派……一九
選定……二〇・二四・一五二
染愛……二四
前正覺山……二五
尊山童子……二六
善逝……二九
善男……三五
善女……三五
施餓鬼……五六
刹那、說法刹……六七
井水を飲む譬……七八
世親菩薩……一〇一

千品の論師……一〇二
善財童子……一一四
善導……一二〇
絕對中道……一三三
漸教……一三五
清涼大師……一四四
善無畏三藏……一四六
禪宗……一五一・一九五
青原羅師……一五四
石頭和尚……一五五
前世の父母……一八四
刹那の無常……一三七
千觀作拳……一三二
選擇集……一六八
正雜二行……一七二
泉湧寺……一八・四四六
絕對他力……一九
攝受門……一三四
政秀寺……一八四
清正公……一八八
見字の夢……一九〇
遠章寺……一九二
石水和尚……一九二
正業復師……一九二
雪爪老人……一九四

ソ

象を摩すの譬……八〇
双曲線と漸近線……九六
藏教……一三六
則天武后……一四・一四二
即事而眞……一四九
即身成佛……一五二
曹洞宗……一五五
蘇東坡……一五九
蘇我稻目……一六五
蘇我馬子……一六六
僧正……一六九
僧都……一六九
俗諦……一七八
僧侶……一八〇
綜藝種智院……一三六
像法時代……一四一
增賢聖……一四五
僧兵……一四六
遠梁生……一八八
祖元禪師……一〇四・一四七
僧道無……一五三
漸的作業……一四五
世界的宗教と國家的宗教……一四七

タ

帝釋天……一八・一四
提婆達多……一五二
多聞第一……一七八
大乘非佛說……一九六
大天……一九七
大衆部……一九七
大乘起信論……一九八・一九
大毘婆沙論……一九八
大乘……一九・二三・二四
大智度論……二〇二
提婆菩薩……二〇二
大不思議論……二二三
他力門……二二八
第七識……二二八
第八識……二二八
大唐西域記……二三一
對信の中道……二三二
醍醐味……二三七
大乘始教……二四一
大乘終教……二四一
總持寺……二五七
增上寺……二七一・二九二
即非禪師……二〇七

ト

大日經……二四六
大日如來……二四八
胎藏界……二四八
大愛陀羅……二四八
陀羅尼……二五二
慈恩大師……二五・二八五
大溝弘忍……二五三
大慧和尚……二六〇
高天原……二六六
高向玄理……二八〇
大化の新政……二九〇
橘諸兄……二〇五
大信正……二一一
大乘圓頓戒……二二七
高岳親王……二四〇
台密……二四二
檀那流、田村麿……二六〇
平維茂……二六二
平康頼……二七四
平重盛……二七五
平重衡、平維盛、平忠度……二七七
大悲著薩……二七七
歎異抄……二七・二八・二九二
他力觀同……二八・二九〇
高日港……二九五

大學菲本……三〇九
龍の口……三二七
第三の法門……三三〇
他阿上人……三三九
大慈國師……三五二
大鑑寺……三五三
大燈國師……三五三
大智禪師……三六三
武田信玄……三八二
澤彥和尚……三八四
大佛供養會……三八八
大樹寺……三九〇
澤庵禪師……四〇三
大藏經開版……四〇八
伊達政宗……四二〇
伊達宗實……四二二
太敎院……四四三
秦龍和尚……四四四
田中智學……四五二
高山樗牛……四五三
他力門の長所短所……四五六
ゲーサキン……四六三
大聖の悟界……四六四

チ

頭陀第一……四二
重耳、痴心……一四
中道……三二
竹林精舍……三九
智恵第一……四一
長爪梵志……五九
涅槃無爲……九・一三
中論……一〇一
定心別時の念佛……一一一
長安……一一一
智者大師……一三・一三五
中諦……一三九
智顗法師……一四〇
澄觀大師……一四四
島窠和尚……一五九
張無盡居士……一六〇
張天成……一六二
豐臣秀吉……一六八
中將姬……一七七
智證大師……一四三
地獄の菩薩……三四・四五
超悉檀の化導……三三
長曾我部元親……三八二

ツ

鶴の林……八四
通教……一三六
恒貞親王……一六三
塚原……一三八
土牢御書……一三五

テ

天上天下唯我獨尊……一
轉輪王……一〇・一三
天眼第一……一六三
天冠寺……八四
天台宗……一三・一三六
天台の三大部……一三四
天齊國愛陀羅……一八二
天智天皇……一九三
天武天皇……一九三
天長節……二一九
傳敎大師……二二・二九
天台座主……二四二
天台の開大師……二四五
天王寺屋淨本……二八
天龍寺……二六三
傳通院……二七一
天文の法難……二七七
天海僧正……二九二
鐵牛禪師……四〇七
慶眼禪師……四〇七
手島搭尾……四三〇
電子論……四六二

ト

豐臣秀吉……四・三八五
德川綱吉の母……五
斗藪……四二
華嚴の譬……七八
燈光明、頓說菩提……九六
道教……一〇六
懷奘菩薩……一〇八
道安……一一〇
陶淵明……一一一
鳩摩羅什三藏……一一一
鳩摩……一一九
濟濟……一一九
頓教……一二九・一四一
道遠和尚……一四〇・一三五
同時具足相應門……一四二
道信……一三三
道昭……一九四
東大寺……二〇一・二〇三・二四八
道隱法師……二一四

道元……二二六
東寺……二三五
さが無くて死す……二三九
闘争時代……二四一
東慶夫師……二五〇
燈籠夫臣……二七五
道元禪師……二九九
道隆禪師……三〇二
當麻蓮華……三二七・三二八
德川家康……三九〇
登誉上人……三九一
東叡山寛永寺……三九二
寒摩寺……四〇三
童子教……四四〇
東西文明の統合地……四五三

ナ

内明……八
難陀波羅……二七
内寛……二七
那提迦葉……三六
難陀……四八・六〇
南山律師……二二七
南禪……一五四
南嶽禪師……一五四
南泉和尚……二五六
中大兄皇子……一九〇
中臣鎌足……一九〇
中川の實範上人……二八七
南禪寺……三四九
長崎次郎……三五〇
長崎爲基……三五一
南蠻寺……三九四
内觀法……四一五
中澤道二……四三一
南條文雄……四四三

ニ

人相……四
尼連禪河……三五・三七
如來……三一
二十億……六五
乳牛の譬……八〇
二乘……九・二一四
乳味……一三六
西寺……三三四
日蓮上人……三〇五
如說修行……三一一・三一八
日昭……三三三・三三六
日朗……三三三・三三八
人間顯……三三〇
日興……三三六
日向……三三六
日頂……三三六
日持……三三六
新田義貞……三六一
日像上人……三六四
日親上人……三七六
日奥上人……三八七
日光山……三九二
日經上人……三九七
日重上人……三九八
日乾上人……三九八
日遵上人……三九九
二宮尊德……四三三
西有穆山……四四四
日蓮主義……四五二
日本國民の特性……四五三
ニヨートン……四六三

ヌ

奴隸所致……一六五

ネ

涅槃……二〇・八〇・八五
拈華微笑……四三・一五
涅槃經……一一六
念佛の三流……一二〇
根來寺……二五一

ノ

能忍……二九五

ハ

沛公……五
毀陀羅尼……七
婆羅門教……一八
婆羅門族……一八
毀伽仙人……二一
毀提……二二
婆藪槃豆……二二
牛糞の句……二六
入苦……三三
入正道……三三・二六
波斯匿王……四四
毀提婆者……六二
滯狗羅……六四
縛せられし獸……六七
八十誦律……九二
八宗の祖……一〇〇

破邪……一〇二
般若三藏……一一三
般若經……一一四・一一五
般若……一一四
波羅密多……一一五
高法唯識……一二八
八識……一二八
破邪即顯正……一三二
八種の惰見……一三二
八不中道……一三三
八教……一三六
般若多羅尊者……一五二
馬鳴菩薩……一五四
白樂天……一五九
問人后……一六八
婆羅門僧正……二一一
範安……二九二
香僧……三五三
白隱禪師……四二二
白鷗先生……四二五
高理一空……四三三
芭蕉翁……四三三
般理和尚……四三六
培保己一……四三九
排佛論……四三七・四四二

ヒ

原坦山……四四四
毘舍……一九
頻婆娑羅王……一三・三七
非想非非想處……二四
實頭盧……六八
毘琉璃王……七三
夢波羅蜜……九〇
彼岸……九八
百論……一〇一
白蓮社……一一一
毘盧遮那佛……一一三・一一四・二〇一・二〇五・二〇三
非擇滅無爲……一二三
秘密教……一三五
百丈和尚……一五四
悲田……一八三
貧者の一燈……二〇二
廣慧……二一九
比叡山……二三・二四
秘密灌頂……二三四
東寺……二三四
譬喩師法體……二六八
平田篤胤……四三八
光の波動說……四六二
光の電磁氣說……四六二

フ

ファーマナ……一九
佛陀……三〇・一〇三
富樓那……六七
佛舍利……八四
不瞬塔……九三
佛鉢……九七
佛圖澄……一〇八
佛國記……一一二
普賢……一一四
不定衆……一三三
不定教……一三五
不空三藏……一四七
佛菩薩の種子……一四九
不立文字……一五一
藤原不比等……一九三
不空羂索院……二〇二
藤原伊勢人……二六〇
藤井元彥……二七〇
藤井善信……二九二
普勸坐禪儀……三〇一
佛種……三二
不輕菩薩……三四
藤澤上人……三九
佛國々師……三五二
普化宗……三五二
鳳穴道者……三五三
藤原俊基……三五八
藤原資朝……三五八
藤原藤房……三五九
風流禪……三六八
不受不施派……三八・三九八
藤原惺窩……三九一
不動智神妙錄……四〇四
佛頂長老……四三三
古池眞傳……四三三
福田行誡……四四三
佛教哲學……四四五
分子說……四六二
フェヒネル……四六三
佛教の國家觀……四六八
佛教の人生觀……四六九

ヘ

壽陀論……一九
吠舍離の十非事……九二
邪計所執の相……二二八

別教……一三六
碧巖錄……一六〇
澄照國正……一四二
平常業成……一二九〇
平民佛教……一三六六

ホ

法燈……一
法輪……三
菩提……二
菩提樹……三・二七・九・三・九四
菩薩行……一四・九・九
梵天……一八・二〇
梵……二〇
煩惱……二四
法華……四九・九〇
法會……六五
本生物語……七三・七五
方便力……九九
法蘭……一〇七
法句經……一〇八
法顯三藏……一一一
本地開顯……一一五
本門……一一五
菩提流支……一一七・一一九
法藏比丘……一一七
法相宗……一一八・一一四
眞如……一一八
法華玄義……一一四
法華文句……一一四
法性本俱說……一一八
親鸞聖人……一四五
法身佛……一四五
法華の六天……一四八
法曼陀羅……一四九
北禪……一五四
法眼……一五四
法隆寺……一八一
梵網經……一八四・一八五・二一八
本地垂迹說……二〇六
本佛……二〇七・二一四
方便說……二〇七
本朝の三祖壇……二一三
法華會……二一四
法華經と戒律……二一八
法性寺……二一四
本覺の法門……二一八
法明上人……二五九
法然上人……二六五
法華經信解品……二七四

佛の前……二七八
本願寺……二九五・二九三
本門の本尊……三一九
法開顯……三二〇
本覺、始覺……三二二
本地開顯……三二四・三二八
本來の菩薩……三二四
法華經……三八・三九・三五二
北條時政……三四〇
北條義時……三四〇
北條時賴……三四四
北條時宗……三四六
北條貞時……三四八
北條早雲……三五一
北條氏綱……三五一
北條氏康……三五一
方廣寺……三五五
法華經の烏帽子……三八八
法華經爲政會……三八八
豐國神社……三八八
本多日生……四五三
法華經と日本國……四五六

マ

摩耶夫人……一
摩奴の法典……一八
マントラ……一九
摩訶男……二三
魔王……二七
摩訶迦葉……四二
摩訶俱絺羅……五六
摩訶羅……九七
摩訶……一〇七
摩訶……一一五
未來記……一一八・一一九
摩訶止觀……一二四
曼陀羅……一四八・一三〇
密嚴が谷……一三六
親鸞……一三六
密平信光……一三九〇
卍山和尚……四〇七・四一〇
前田利家……四一〇
松平定信……四一七

ミ

彌勒山……一二・一三
妙貫……四一
宮行第一……五一
彌勒菩薩……一〇一
妙法蓮華經……

夢窓國師……一五
夢窓國師……一五

メ

家刹……二四
馬鳴……四〇
滅度……八五
馬鳴菩薩……九七
面壁九年……一五三
明教新誌……四四五
明治の維新……四四五
迷信……四六四

モ

目蓮……四〇・七一
獸頭……一一四
獸頭……一五八
物部尾輿……一六五
物部守屋……一六六
文殊上人……一八〇・一四四
門徒宗……一九五
文底の一念三千……一九
毛利元就……一九七
木食上人……一六五
木庵禪師……四〇七
諸橋奏堂……四四三

耶輸陀羅……一一・四八
耶舍……一四
野狐の譬……七五
山背大兄王……一八七
山伏……一九七
山階道理……一四七
山法師……一四七
山科本願寺……一七三
山中幸盛……一六〇
耶蘇教……一九四
柳生父子……四〇四
夜船閑話……四一四・四一五
山內一豐……四一一
山鹿素行……四一九

ユ

瑜伽論……一一〇
瑜伽……一〇・一五〇
唯識論……一〇・一三〇
友海禪師……一〇
融通念佛……一七七
融觀……一九九
勇者の十德……一六三

遊行上人……三三九
酉譽上人……三七一
紹天僧正……四一一

ヨ

欲界……一二四
横川法語……二五六
養珠院……三九九

ラ

羅漢羅……一二・四九
羅麻林……一七
賴吒和羅の曲……九八
羅什三藏……一〇八
酪味……一三六
賴豪阿闍梨……二四六
ラヂューム……四六二

リ

輪廻……二二・二九・八五・一二四
離婆多……六五
律……九一
龍樹菩薩……一〇〇・一四六
律宗……一二六・二一四・二八七
略戒……一二七
理法界……一四二
理と事……一四三・一五一・三二九
龍智……一四六
兩部曼陀羅……一四八
梁の武帝……一五三
臨濟禪師……一五四
臨濟禪……一五五
臨濟將軍、曹洞士民……一五五
良价禪師……一五五
留學生……一八〇
良辨僧正……二〇一・二〇八
兩部神道……二三五
理同事證……二四三
理源大師……二五〇
良忍上人……二五七
良觀上人……二八七
臨終正念……三〇八
立正安國論……三一四
理の一念三千……三二九
離三業の念佛……三三八
了譽上人……三七一
輪王寺の宮……三九二
蓮華藏世界……一二四・二〇五

レ

蓮如上人……三七一

ロ

六道……一
六大眞教派……一九
鹿野園……三二
六藏……七八
論……九一
廬山……一一〇
六大……一四七
六波羅密……一五三
蠟燭の譬話……三四五
朗卷……三五三

ワ

臨尊者……九八
惑業……一二三
宏智禪師……一六〇
我國民道有性……一六七

ヰ

井を掘る譬……七七

◉讀み方に就きて

讀者の便宜を計りて本書の佛教專有語には假名を附したり。されど多くは普通讀み居しまゝに從ひて特に穿鑿をなさゞりしが、境野先生が本書を親しく御檢べ下され最も正確なる發音と其の他有益なる御示教とを賜はれり。本文の上にて直ちに訂正するよりも別表となし置く方讀者の注意ともならんかと左に本書の假名と正しき讀み方とを對照して掲ぐることゝなせり。斯かる點までも詳しく御注意下されし先生の御厚意眞に感謝の至りに堪へざるなり。

頁數	行數	本書の假名	正しき讀力
一	一行目	常住般涅槃王	常住般涅槃王
七	終ヨリ一行目	工巧明	工巧明
八	八行目	瀧頂	瀧頂
二二	三行目	羅睺羅	羅睺羅
二六	一〇行目	乾闥婆	

原音カンタカなれども他の邦音に例すればケンチョクにすべし。

一九	六行目	般若論派	
二二	九行目	阿闍梨若迦	阿闍梨若迦
二二	一〇行目	耶須陀羅	耶須陀羅
二三	終ノ行	摩訶男	摩訶男
二三	終ヨリ四行目	頗婆羅	頗婆羅
二四	六行目	觸	觸
二三	終ヨリ五行目	處	處
三三	二行目	四聖諦	四聖諦
三三	七行目	五陰盛苦	五陰盛苦
三四	九行目	沙門	沙門
四一	終ヨリ四行目	其意	其意
四一	終ヨリ四行目	般若論派	
四二	一行目	迦若阿闍梨	迦若阿闍梨
四二	七行目	陀羅須耶	陀羅須耶
四五	十一行目	河拘羅	河拘羅
五二	四行目	沙羅	沙羅
五二	七行目	達多	達多
五八	終ヨリ三行目	給孤獨	給孤獨
八二	七行目	那含	那含
八二	同	跋提河	跋提河
八六	六行目	沙羅	沙羅
八六	終ヨリ二行目	須婆陀羅	須婆陀羅
九一	六行目	言亡	言亡
九八	六行目	長阿含	長阿含
九八	六行目	脇尊者	脇尊者
九八	終ヨリ六行目	毘婆沙論	毘婆沙論
一〇九	同	衆賢論師	衆賢論師
一〇八	同	順正理論	順正理論
一〇八	十三行目	博士	博士
一〇九	終ヨリ二行目	鳩摩羅什	鳩摩羅什
一〇九	九行目	月氏品	月氏品
一一	終ヨリ四行目	那含	那含
一一	九行目	孤獨	孤獨
一一	十行目	給孤獨	給孤獨
一一	七行目	達多	達多
一一	三行目	沙羅	沙羅
一一	二行目	拘羅	拘羅
一一	同	跋提河	跋提河
一一	八行目	須婆陀羅	須婆陀羅
一一	終ヨリ三行目	外道	外道
一一	同	言亡	言亡
一一	同	長阿含	長阿含
一一	同	脇尊者	脇尊者
一一	同	毘婆沙論	毘婆沙論
一一	同	衆賢論師	衆賢論師
一一	同	順正理論	順正理論
一一	十三行目	博士	博士
一一	終ヨリ二行目	鳩摩羅什	鳩摩羅什
一一	九行目	月氏品	月氏品
一一	同	慧文	慧文
一一	十一行目	禪師	禪師
一一	同	法苑義林章	法苑義林章
一一	同	戒賢	戒賢
一一	一行目	立人	立人
一一	七行目	拜	拜
一一	同	偏計	偏計
一一	二行目	解深密經	解深密經
一一	終ヨリ二行目	正報	正報
一二	三行目	大命	大命
一二	五行目	永劫	永劫
一二	七行目	唯有	唯有
一二	九行目	菩提	菩提
一二	十行目	財	財
一二	九行目	維摩經	維摩經
一五	同	懷敬	懷敬
一五	十一行目	讚歎	讚歎
一五	終ノ行	人心	人心
一五	終ヨリ二行目	教外	教外
一四	終ヨリ二行目	應身佛	應身佛
一四	終ヨリ五行目	賢首大師	賢首大師
一三	三行目	慧文禪師	慧文禪師
一三	十行目	法苑義林章	法苑義林章
一二	同	戒賢	戒賢
一二	一行目	立人	立人
一二	七行目	拜	拜
一二	同	偏計	偏計
一二	二行目	解深密經	解深密經
一二	終ヨリ二行目	正報	正報
二〇	三行目	大命	大命
二〇	七行目	永劫	永劫
二二	八行目	唯有	唯有
二二	九行目	菩提	菩提
二二	十行目	財	財
二二	十四行目	維摩經	維摩經
二二	十二行目	懷敬	懷敬
二二	十六行目	讚歎	讚歎
二二	八行目	人心	人心
二二	終ヨリ五行目	教外	教外
二四	同	應身佛	應身佛
二四	五行目	賢首大師	賢首大師
二三	九行目	慧文禪師	慧文禪師
二三	終ヨリ三行目	法苑義林章	法苑義林章
二三	十四行目	戒賢	戒賢
二三	十二行目	立人	立人
二三	七行目	拜	拜
二三	同	偏計	偏計
二三	二行目	解深密經	解深密經
二三	終ヨリ二行目	正報	正報
二三	三行目	大命	大命
二二	八行目	永劫	永劫
二二	十四行目	唯有	唯有
二二	十六行目	菩提	菩提
二二	十二行目	懷敬	懷敬
二二	十六行目	讚歎	讚歎
二二	十四行目	人心	人心
二二	八行目	教外	教外
二四	同	應身佛	應身佛
二四	五行目	賢首大師	賢首大師
二三	九行目	慧文禪師	慧文禪師
二三	終ヨリ三行目	法苑義林章	法苑義林章
二三	十四行目	戒賢	戒賢
二三	十二行目	立人	立人
二三	七行目	拜	拜
二三	同	偏計	偏計
二三	二行目	解深密經	解深密經
二三	終ヨリ二行目	正報	正報
二三	三行目	大命	大命
二二	八行目	永劫	永劫
二二	十四行目	唯有	唯有
二二	十六行目	菩提	菩提
二二	十二行目	懷敬	懷敬
二二	十六行目	讚歎	讚歎
二七	六行目	心地觀經	心地觀經

二八七	三行目	有嚴	有嚴
二九一	終ノ行	善信	善信
三〇二	七行目	大歇心	大歇心
同	終ヨリ四行目	兀菴	兀菴
三二四	終ヨリ二行目	結緣	結緣
三二八	終ヨリ四行目	千界	千界
三五四	十二行目	有在	有レ在
三七六	六行目	日遐	日遐
三七九	六行目	越生	越生

正誤表

頁數	行數	誤	正
四〇	二行	目蓮	連（他モ同樣）
四一	九行	神道	通
五四	四行	優陀耶	那
一〇一	七行	瑜珈宗	（瑜珈宗）
一一三、一一四		法身毘盧遮那佛	報ニ改ム
三一七	十一行	瓦礫刀杖	及加刀杖
三三四	終ノ行	世に	正に
四一八	終ヨリ三行目	歎喜	歡喜

大正八年十月二日印刷
大正八年十月五日發行

日本佛教外史奥附

定價金四圓五拾錢

著作者　菊地亮三郎
東京市京橋區南鍋町一丁目二番地

發行者　松岡達
隆文館圖書株式會社代表者

印刷者　鈴木梅太郎
東京市神田區錦町三丁目六番地

印刷所　三賞舍印刷所
東京市神田區錦町一丁目三番地

發行所　隆文館圖書株式會社
東京市京橋區南鍋町一丁目
振替貯金口座東京八五三番

三浦關造先生著

日本道德と最近社會思潮

菊版函入裝幀極美　定價金壹圓七拾錢　送料金十二錢

本書は現代生活と沒交渉な概念的國民道德論を警戒して靈肉合致の日本民族的本然性に道德の原理を明示し、最近社會思潮の精神的理由を解剖して日本道德の立場を明示し、唯物史觀と唯心史觀の誤謬を指摘して日本經濟史の研究により靈肉一致の雄大なる創造的大原則を明示し、動機論結果論の弱點に陷らざる日本に絶對倫理意志の活動を提唱し、現代教育を覺醒すべき不朽の生命を啓示する者也。

電話新橋一七八〇番　隆文館發行　振替口座東京八五三番

江部鴨村先生著

貧者の一燈

（忽三版）

裝幀優雅布製函入　四六判三百五十餘頁　定價壹圓七拾錢　送料金拾貳錢

貧者の一燈！是れ何をか諷示せる？謙抑なる心を以て生に徹せんとする者の行手を照らす燈火に非ずや。深き思索をもてる著者が過去半生の生活苦と戰ひ而も尙自我の尊嚴を維持して一歩も下らざる眞摯の態度と熱烈なる經驗とは收めて本書一卷に在り人生の眞味自然の情趣より說き起し、名と金と戀とを論じ、結婚生活の根據を明かにし、更に現時焦眉の急務たる備主傭人の融和を談ずる所、情理二つながら透徹す。以て貧者の福音たるべく、以て貧者の福音たるべし。加之著者の筆致平明流麗溫情言外に溢れ餘韻嫋々卷を捲ふの邉あらしめざるの概あり、切に愛讀を請ふ所以也。

電話新橋一七八〇番　隆文館發行　振替口座東京八五三番

最新刊

永平寺管長　日置默仙禪師序
前曹洞宗大學教授　高階瓏仙老師著

悟道の妙味

不立文字の教理も文字に依らざれば知ること能はず、教外別傳の悟道も言語を離れては傳ふること能はず、而も古來禪を談ずるもの徒らる難入難解の語句を弄して却つて人を迷はしむる多し。高階老師學深く德高く教禪二面に於て眞に現代の巨匠たり。今本書に依つて多年實參實究の歷程を精叙し、悟道の眞諦を闡明するに平談俗話を以て處世修養の南針を指示す、讀者に依つて直ちに禪の淵源を究むべく、又悟徹の洪範を得べし。

裝幀　布製函入
頒優美
四六判　三百餘頁
定價　金壹圓八拾錢
送料　金拾貳錢

電話　一七一八〇番　新橋
振替　八五口座　東京三番
隆文館發行

教育參考書

青木武助先生著	校訂	大日本歷史集成上	金五圓　送料金貳拾四錢
同	校訂	大日本歷史集成中	金五圓　送料金貳拾四錢
同	校訂	大日本歷史集成下	金五圓　送料金貳拾四錢
同		續大日本歷史集成上	金五圓　送料金貳拾四錢
同		續大日本歷史集成下	金五圓五拾錢　送料金貳拾四錢
坂本健一先生著		西洋歷史集成上	金五圓　送料金貳拾四錢
同		西洋歷史集成中	
同		西洋歷史集成下	
櫻井時太郎先生著		東洋歷史集成上	金四圓五拾錢　送料金貳拾四錢
同		東洋歷史集成中	金參圓八拾錢　送料金廿四錢

宗教・哲學・歷史

桑木嚴翼先生著	時代と哲學	金壹圓參拾錢	送料金拾八錢
朝永三十郎先生著	哲學と人生	金壹圓	送料金拾貳錢
松本文三郎先生著	宗教と學術	金壹圓參拾錢	送料金拾貳錢
加藤玄智先生著	宗教講話	金九拾錢	送料金拾貳錢
フクセツト氏大川周明先生譯著	宗教の本質	金壹圓拾錢	送料金拾貳錢
ヘロドトス坂本健一先生譯著	世界最古史	金貳圓五拾錢	送料金拾八錢
ギボン坂本健一先生譯著	羅馬盛衰史	金貳圓四拾錢	送料金拾八錢
ギボン坂本健一先生譯著	羅馬中興史		
大鳥居弁三先生著	世界諸人種	金六拾錢	送料金拾貳錢
龜谷天尊先生著	教育勅語と宗教	金五拾錢	送料金拾貳錢

教育參考書

櫻井時太郎先生著	東洋歷史集成下	金四拾四錢	送料金四拾四錢
角田政治先生著	最新大日本地理集成上	金四拾錢	送料金貳拾四錢
同	最新大日本地理集成下	金五拾錢	送料金貳拾四錢
同	續大日本地理集成上	金貳圓五拾錢	送料金拾八錢
同	續大日本地理集成下	金貳圓五拾錢	送料金拾八錢
同	外國地理集成上	金貳圓八拾錢	送料金拾八錢
同	外國地理集成下	金參圓八拾錢	送料金貳拾四錢
水津嘉之一郎先生著	最新化學集成上 理論應用	金四圓	送料金貳拾四錢
水津嘉之一郎先生野田市三郎先生共著	最新化學集成下 理論應用	金四圓五拾錢	送料金貳拾四錢
角田政治先生橋本留喜先生共著	講話資料集成 學校教育社會教育	金五圓	送料金貳拾四錢

穗東口京長高市師先生著輕	山部駒村先生著	文學士坂本健一先生著		手工教授研究會編	川東島京次女郎高先師生調著譯	高郷橋西純高一校先教生著授	西来山國智教治育先學生博著士	市東川京區郡之一先高生女著長	三國橋口長爾市先生著閲			
愛兒の躾と愛兒の教育	貧者の一燈	西洋歴史集成中卷	小高等理科教授資料集成	解教説授 手工教授資料集成	修身教授資料集成	最新地文地理集成	自學主義各科教授原論	乳兒の教育	女教師の爲に			
送料金壹圓貳拾八錢	送料金壹圓拾七錢	下上 送料金參圓五拾錢	近刊	送料金參圓拾八錢	送料金參拾八錢	送料金參圓拾八錢	送料金貳拾五錢	送料金壹拾貳錢	送料金貳圓拾五錢			

終